

聖使徒イアコフの公書

【一】

イアコフ神及び主

イイススハリストスの僕は散じ居る十二支派の安を

問ふ。我が兄弟よ爾等種類の試誘に遇ふ時は之を大なる喜び爲せ。爾等の信の試は忍耐を生ずるを知らばなり。惟忍耐は完全なる行爲を顯すべし。爾等が完備純全にして一も缺くることなからん爲なり。若し爾等の中に智慧の足らざる者あらば、夫の咎むるなくして徑に衆に與ふる神に求むべし。然らば彼に與へられん。惟信を以て惑も疑はずして求むべし。蓋疑ふ者は風に吹かれて碎かる。海の浪に似たり。此の若き人は何なり主より受けんと思ふ勿れ。貳心の人は其凡の路に於て固からず。卑き兄弟は其高きを以て誇と爲し。富める者は其卑きを以て誇と爲せ。蓋彼は草の花の如く逝きん。日出で、熱して草を枯らせば其花は落ち其容の美しきは亡ぶ富める者も是くの如く其途に枯る。忍耐して試誘を受くる人は福なり。蓋其試みられて後主が彼を愛する者に約せし生命の冕を受けん。一三 誘はるは時

何人も我神に誘はるる言ふ勿れ。盗神は惡に誘はれず、自も亦人を誘はず。一四 即人
各己の怒に引かれ、餌せられて誘はるゝなり。一五 慾既に孕みて、罪を生じ、罪成りて、
死を生ず。一六 我が至愛の兄弟よ、自ら欺く勿れ。一七 凡の善なる施、凡の全備なる賜
は、上より、光明の父より降るなり。彼には變易なく、遷移の影もなし。一八 彼は己の旨に
循ひて、眞實の言を以て、我等を生めり、我等が其造りし物の、初實の果を爲らん爲なり。
一九 故に我が至愛の兄弟よ、凡の人は、速に言ふに遅く、怒るに遅かるべし。二〇
蓋人の怒は神の義を行はず。二一 是を以て爾等凡の汚さ餘れる惡さを去りて、溫柔に
して、戦ふる所の言能く爾等の靈を救ふ者を接げよ。二三 且言を行ふ者と爲れ、第聞く
のみにして己を欺く者と爲る勿れ。二三 蓋言を聞き行はざる者は、其本來の面を
鏡に観る人に似たり。二四 彼は己を觀て去り、直に其若何なるかを忘れたり。二五 然れ
ども自由の全備なる律法を鑒みて、之に居る者は、彼聞きて忘るゝ者に非ず、乃功を
行ふ者と爲りて、其行ふ所に福ならん。二六 若し爾等の中誰か自ら敬虔なりと意ひて、
己の舌に勸を著けず、乃己の心を欺かば、其敬虔は徒然なり。二七 神及び父の前に純

潔にして無玷なる敬虔は、即ち孤と後とを其患難の間に顧み且自ら守りて世に汚されざるに在り。

第三節 一我が兄弟と爾等は我が光榮の主イエススハリストスを信じて親を以て人を取る勿れ。蓋若し人金の銀を穿め美しき衣を着て爾等の會堂に入り亦貧しき人惡しき衣を着て入りんに、爾等美しき衣を着たる者を顧みて之に爾は此に善き處に坐れと曰ひ貧しき者に爾は彼處に立て或は此に我が足下に坐れと曰はば、則ち爾等己の衷に判断して惡しき念ある裁判者と爲るに非ずや。我が至愛の兄弟よ之を聽け神は豈斯の世の貧しき者を選びて信に富ませ彼を愛する者に約せし國を嗣がしむるに非ずや。然るに爾等は貧しき者を藐しめたり。富める者は爾等を虐げ爾等を裁判所に曳くに非ずや。爾等は爾等が稱へらるゝ榮名を濫すに非ずや。若し爾等書に載する所の王法例を愛するこそ己の如くせよと云ふを行はば則ち善く行ふなり。然れども若し親を以て人を取らば、則ち頭を行ひ律法に對して犯罪者と爲るなり。一全律法を守りて其一を犯す者は全律法を犯すなり。一盜淫する毋

れと言ひし者は亦殺す母れと言へり然らば爾淫せずと雖殺すこと有らば亦律法
を犯す者と爲るなり。一三 爾等百ふ所行ふ所自由の律法に由りて審判を受けんとす
る者の如くすべし。一四 爾等が矜恤を施さざりし者は審判せらるゝ時に矜恤を喪さら
ん矜恤は審判に勝つなり。一五 我が兄弟よ若し人自ら信ありと謂ひて行なくば何の
益かあらん信能く彼を救ふか。一六 若し兄弟或は姉妹裸にして日用の糧に乏からん
に。一七 爾等の中の或人々に安然として往け温にして飽くを得よと曰ひて其身に蓄
むる者を之に與へずば何の益かあらん。一八 是くの如く信も亦行なければ自ら死
せる者なり。一九 人或は言はん爾に信あり我が行ありと謂ふ爾の行を兼ねざる信を
我に示せ我は我が行に由りて我が信を爾に示さん。二〇 爾等は一なりと信す斯く爲
すは善し冤鬼も亦信じて而して慄く。二一 愚昧の人よ爾は行を兼ねざる信の死せる者
なるを知らんか欲するか。二二 我等の先祖アブラハムが其子イサクを祭壇の上に
獻げて殺させられしは行に由るに非ずや。二三 爾見るか信は彼の行を助け又行に
由りて信は全きを獲たり。二四 斯く聖書の云ふ所應へりアブラハムは神を信ぜり此

れ彼に歸して義と爲れり且彼は神の友と稱へられたり。然らば爾等之を觀る人の義とせらるゝは行に由りてなり唯信に由るには非ず。二五同じく故塔ラアフも信使を納れて之を他の途より歸らしめて義とせられしは行に由るに非ずや。二六死し靈なき體の死せる者なるが如く斯く行なき信も亦死せる者なり。

【第三】 我が兄弟も多くの者帥と爲る勿れ我等が物を受けんこと更に嚴しきを知らばなり。二七我等皆多く愆を爲す。若し人言に愆なくば是れ全き人にして其全體にも勒を著くるを得るなり。二八視よ馬の我等に馴はん爲に我等勒を其口に置きて其全體を取す。二九又舟は大なる者にして且烈しき風に逐はるる雖も小き舵を以て舵師の望む所に運轉せらる。是くの如く舌も小き體なりと雖も大なるを以て誘ふ。觀よ微なる火は物を燃すこと何を多き。舌も亦火なり不義の飾なり舌は我が百體の中に在りて能く全體を玷し能く我が一生の範圍を燃して己は地獄より燃さる。蓋凡の禽獸昆蟲鱗介の類は制せらる且人類に制せられたり。惟舌は人能く之を制するなし此れ抑へ越え惡にして死の罪を滿つる者なり。我等之を以て解及び父を

祝慶し亦之を以て神の背に預ひて流られたる人人を阻ふ。一の口より祝慶と詛
きは出づ我が兄弟よ此くの如き事あるべからず。一樹泉は一の穴より甘き及び苦
き水を出すか。一我が兄弟よ無花果の樹は楡櫟を結び或は葡萄の樹は無花果を結
ぶを得んや。是くの如く亦一の泉は鹹き及び甘き水を出す能はず。一爾等の中智慧
及び見識ある者は誰ぞ善き行に由りて智なる溫柔を以て其爲す所を彰すべし。一
然れども若し爾等心の中に苦き荆棘と忿争きを懐かば誇る勿れ眞實に對して跪る
勿れ。一此の智慧は上より降るに非ず乃地に屬し靈に屬し冤鬼に屬する者なり。一
蓋荆棘と忿争き在る所には亂さ凡の惡しき事き在るなり。一上よりする智慧は
第一に潔淨次に和平温良柔順にして矜恤及び善き果を充て偏視せず偽善ならず。
一ハの果は和平を行ふ者に和平を以て種かる。

第四章 爾等の中に戦闘と争競とは何よりするか此より即爾等の首體の中に戦
ふ諸然よりするに非ずや。二爾等貪れども得ず殺し嫉めども及ぶ能はず争ひ聞へど
も得ず求めざるが故なり。三求むれども受けず爾等の怨の爲に喪さんとして妄に求

むるが故なり。姦淫の男女、爾等は世の友たるは是れ神に對して仇たるを知らざるが故に世の友と爲らんと欲する者は神の仇と爲るなり。爾等或は聖書の言ふ所を虚しと意ふか曰く我等の中に居る神は愛して嫉に至ると、然れども更に大なる恩寵を賜ふ故に曰く神は憐る者に敵し謙る者に恩寵を賜ふと。是を以て爾等に服し、惡魔に敵せよ然らば彼爾等より逃れん。神に近づけ然らば彼爾等に近づかん。罪人と、爾等の手を淨くせよ、二心の者と、爾等の心を潔くせよ。若し哀れ、哭け、爾等の笑は哀に、歎は憂に變すべし。一〇の主の前に自ら卑くせよ、然らば彼爾等を高くせん。一、兄弟よ、相勵る勿れ其兄弟を諷する者は律法を諷り又律法を諷するなり、爾若し律法を諷せば律法を行ふ者に非ず、乃審判者なり。一、立法者及び審判者能く救ひ能く滅す者は一なり、爾他人を諷する者は誰ぞ。一三、今日、或は助日我等某の色に往き、一年彼處に居り、貧弱して利を獲んと言ふ者よ、一、爾等は助日如何にならんを知らず、蓋爾等の生命は何ぞ暫く現れて遂に消ゆる霧なり。一五、爾等は之に易へて云ふべし、若し主の旨に違ひ、又我等生きば、此或は彼を

爲さんご。一六 爾等驕に依りて高ぶる凡そ此くの如き高慢は悪なり。一七 故に善を行ふを知りて之を行はざる者は罪あり。

第四節 一八 今聽け、富める者よ、爾等に臨む所の苦難の爲に泣き號べ。一九 爾等の財は朽ち、爾等の衣は蝨くひ、二〇 爾等の金銀は錆びたり、其錆は誰を爲して、爾等を攻め、且火の如く、爾等の肉を焼まん、爾等は未の日の爲に財を積めり。二一 視よ、爾等の田を獲りし工人に、爾等が給せざる値は、欲び且刈りし者の呼聲は、主「サワオフ」の耳に至れり。二二 爾等地に在りて、奢り樂めり、爾等の心を養ひしこき、居宰の日に働ふるが如し。二三 爾等義者を罪に定めて、之を殺せり、彼は爾等を拒まさりき。二四 兄弟よ、恒に忍びて、主の臨むに及べ。視よ、農夫は地の費き産を待ちて、是が爲に久しく忍び、前後の雨を得るに逾ぶ。二五 爾等も恒に忍び、爾等の心を堅くせよ、蓋主の臨むこと避づけり。二六 兄弟よ、相怒む勿れ、恐らくは罪に定められん、視よ、審判者は門の前に立つ。二七 我が兄弟よ、主の名に依りて言ひし諸預言者を以て、苦難と恒忍の式とせよ。二八 視よ、我等は忍耐せし者を屬なりとす。爾等皆てイアエフの忍耐を聞き、且主の如何に之を終へしを見たり、蓋主は至仁

にして矜恤なり。一三〇我が兄弟よ首として醫を發する勿れ、或は天を以て、或は地を以て、或は他物を以て醫ふ勿れ、爾等惟是を以て是と爲し、否を以て否と爲すべし、恐らくは罪に陥らん。一三一爾等の中に苦しむ者あらば、祈禱すべし、樂しむ者あらば、聖詠を歌ふべし。一三二爾等の中に病む者あらば、教會の長老等を招くべし、彼等主の名に依りて、彼に油を傳げて、彼の爲に祈禱すべし。一三三信に由る祈禱は病める者を救ひ、主は彼を起さん、若し彼罪を行ひしならば、赦されん。一三四爾等互に己の過を認め、又互に祈れ、瘡されん爲なり、蓋義者の熱切なる祈禱は多くの力あり。一三五イリヤは我等と同情の人なりしが、雨ふらざらんことを切に祈りたれば、地に雨ふらずして三年六月を歴たり。一三六復祈りたれば、天は雨を與へ、地は其産を生ぜり。一三七兄弟よ、若し爾等の中に眞實の道より迷へる者ありて、孰か之を正しきに至らしめば、二〇知るべし、罪人を其迷へる道より反らしめし者は、靈を死より救ひ、多くの罪を掩はん。

聖使徒ペトルの前公書

第一

ペトル、イエススハリストスの使徒たる者は、

アシヤ及びリヌスニヤに散じ處る旅客、ニ神父の預知に依りて神の成聖を以て、順服の爲及びイエススハリストスの血の澆を受くる爲に選ばれたる者に奮を逸す。願はくは恩寵と平安とは爾等に増さんことを。祝讃せらる。我神、我が主イエススハリストスの父は、其大なる慈憐に依りて、イエススハリストスの死よりの復活を以て、我等を活くる望、朽ちず玷れず衰へざる開業の爲に復生せしめたり。是の開業は、爾等の爲に天に藏められたり。蓋し爾等は末の時に顯れんとする救の爲に、神の能力を以て、信に由りて、疑らるゝなり。爾等此に因りて喜べ、今之を要せば、種種の試験に因りて、暫く憂ふるごごあり。是れ特に爾等の試みられたる信は、火に試みらるごごも滅ぶべき黄金より、至と貴くなりて、イエススハリストスの顯現の時に、精潔尊貴の光榮を得ん爲なり。爾等イエススハリストスを見ずして、愛し、今彼を見されごも、信

じて言ひ隠く且光榮なる喜を以て喜ぶ、爾等の信の目的、即、靈の救を獲ればなり。
一〇 此の救は爾等が蒙る恩寵を預言せし諸預言者之を探り且尋れたり、一、彼等は
其衷に在りしハリストスの神が預めハリストスの苦及び之に従ふ光榮の事を證し
て何の時又如何なる時を示ししかを究めたり、二、彼等黙示に因りて此等の事は己
の爲ならずして我等の爲なるを知れり即、今天より遠されし聖神に藉りて福音せし
者が爾等に傳へし事天使等も幾ばんと欲する所の事なり。三、故に爾等の心の眼を
束ね、徹醒して、イエススハリストスの顯現の時に爾等に賜ふ所の恩寵を全く認め、
一、孝順なる子の如くにして、先の榮味の時の慈に教ふ勿れ、二、即、爾等を召したる
聖なる者に教ひて己も亦凡そ行ふ所に聖なれ、三、蓋録して云へるあり我聖なるに
因りて、爾等も聖なれ。一、七、爾等若し親を以て人を取らずして各人を其行に由りて
審判する者を父と名づけば、傷れて世に寄る時を度れ、一、六、蓋知る爾等が先祖より傳
はりたる空しき度世より願はれしは、獲るべき金銀を以てせしに非ず、一、九、乃、疵な
く玷なき羔の如きハリストス、二〇、創世の先より預定せられ末の時に及びて爾等の

爲に現れし者の貴き血を以てせしなり。二三爾等彼に由りて神を信ぜり蓋神は彼を死より復活せしめて彼に光榮を賜へり爾等が神に於ける信と望とを有たん爲なり。二三爾等聖神に由りて眞實に循ふを以て己の靈を兄弟を愛する爲なき愛の爲に淨めて潔き心を以て篤く相愛せよ。二三爾等は朽つる種よりするに非ず乃朽ちざる者より生きて世世に存する神の言に由りて重生せられたり。二三爾等の肉體は草の如く凡の人の光榮は草の花の如く草枯れて其花は落ちたり。二三然れども主の言は世世に存す此れ即爾等に福音せられし言なり。

四二四

一故に爾等凡の惡心凡の醜陋爲善嫉妬凡の誹謗を去りて二三爾等

赤子の如く純良なる靈智の乳を慕へ之に由りて教に長ぜん爲なり。二三爾等は主の仁慈なるを味ひたり。二三爾等は彼即人に棄てられ神に選ばれたる貴き活ける石に就きて、二三爾等亦活ける石の如く己を以て國神の堂聖なる司祭班を建てよ、イイススハリストスに由りて神の悦び納るゝ所の國神の祭を獻げん爲なり。二三爾等聖書に録して云く、我選ばれたる貴き屋隅の石をシオンに置く彼を信する者は蓋を得

さらん。故に彼は爾等信する者の爲には賈倍せざる者の爲には工師が糞でたる
 石にして、屈隅の首石と爲りし者、賤の石の鑿なり、八彼等は言に従はずして之に
 賤く彼等亦此が爲に定められたり。然れども爾等は選ばれたる族王たる司祭班聖
 なる人民神の業となりし民なり是れ爾等を幽暗より其奇妙なる光に召したる者の
 盛徳を彰さん爲なり、一爾等素民に非ざりしが今は神の民なり素珍値を環らざり
 しが今は珍値を蒙りし者なり。二至愛の者よ我爾等を旅客及び寄寓者として求む
 爾等を攻むる肉慾を防ぎて、三異邦人の中に善き行を爲せ彼等今爾等を勝りて惡
 者と云へる者が爾等の善き所爲を見て眷顧の日に於て神を贖せんと爲なり。一三故
 に爾等主の爲に凡の人の定制に服へ或は王に於てせよ其上に在るを以てなり、一四
 或は有司に於てせよ其彼より惡を行ふ者を罰し善を行ふ者を賞する爲に遣さる
 を以てなり。一五我等が善を行ひて悪人の無知の言を止むるは神の旨なり、一六我
 等自由の者なりと雖、惡を敵はんと爲に自由を用ゐる者に非ず神の僕なるが故なり。一七
 衆人を敬ひ、諸兄弟を愛し、神を畏れ王を尊め。一八長を以て主人に服へ、惟

善良の者、柔和の者に於けるのみならず、苛刻の者にも然すべし。一、九、若し人無法の
 苦を受け、神を念ひて憂に堪へば、此れ神の嘉する所なり。二、〇、若し爾等、罪を犯して、
 違はれて之を忍ば、何の害かあらん然れども、若し善を行ひて、苦を受けて忍ば、此
 れ神の嘉する所なり。二、一、爾等の召されたるは、此が爲なり、蓋ハリストスも我等の爲
 に苦を受けて、我等に式を遣せり、我等が其跡に隨はん爲なり。二、二、彼は罪を行はず、其
 口に詭譎なかりき。二、三、彼は誦られて、誦を反さず、苦を受けて、喝さざりき、乃之を我
 なる審判者に託せり。二、四、彼は我等の罪を自ら己の身に任ひて、水の上に擧げたり、我
 等が罪を絶ちて、義に生きん爲なり、彼の傷に由りて、爾等醫されたり。二、五、蓋、爾等は
 業(牧者)なき迷へる羊の如くなりしが、今は爾等の靈の牧者及び監督に歸れり。

第三章 一、婦は爾等も亦其夫に順へ、或は彼等の中に言に服せざる者あらば、言に由
 らずして、其緒の行に由りて、後られん爲なり。二、すなはち、爾等の貞潔にして、敬虔なる行を
 見るに因りてなり。三、爾等の飾は髪を染み、金を着け、或は衣を敷ふ事の如き、外部の者
 なるべからず、四、すなはち、心の内の隠れたる人、溫柔恬靜なる神の朽ちざる華美を敷ふ者

ペトル前公書 第三章 自二章一九至四 四二三

なるべし此れ神の前に供し、^一盜^二昔神を頼みし聖なる婦も斯く己を飾りて其夫に
 順へり、^三カラガアウラアムに順ひて之を主と稱へしが如し爾等若し善を行ひて何
 の難き事をも畏れずは彼の子たるなり。^四夫も爾等も亦智慧を以て其婦と偕に居り、
 之を遇ふこと弱き器の如く之を敬ふこと恩寵の生命を共に嗣ぐ者の如くせよ爾等
 の所轄に阻礙なからん爲なり。^五之を要するに爾等皆意を同じくし體恤を爲じ兄弟
 を愛し憐憫を施し懇切を盡し謙遜を守れ。^六惡を以て惡に或は節を以て節に報ゆる
 勿れ反りて祝福せよ爾等祝福を嗣がん爲に召されたるを知ればなり。^七一〇^八發生命を
 愛し住み日を見んと欲する者は其舌を惡より其口を離隔の言より止むべし、^九惡
 を避けて善を行ひ和平を求めて之を追ふべし。^{一〇}蓋主の目は義人を斯く其耳は彼
 等の所を聽く然れども主の面は惡を爲す者に對ひて彼等を地より滅さんとする。^{一一}
 爾等若し移めて善を行はば、^{一二}誰か爾等を害せん。^{一三}然れども若し彼の爲に苦を受く
 とも爾等福なり。彼等の威嚇を懼るゝ勿れ亦憂ふる勿れ。^{一四}主神を爾等の心に聖
 なりさせよ凡そ爾等の望の緣由を問ふ者に溫柔と敬虔とを以て答へんことを常に

備へよ。一、且玷なき良心を有て、爾等を誣ひて、惡者と爲す所以に由りて、爾等のハリ
ストスに於ける善き行を誘ふ者の辱められん爲なり。二、若し神の旨に逆はば善き
行の爲に苦を受くること惡しき行の爲にするより愈れり。一、ハリストスも
一次我等の罪の爲に、殺者にして不殺者に代りて苦を受けたり、我等を引ききて神に詣
らん爲なり、彼は身にて殺され、神にて生かされ。一、此の神を以て下りて獄に在る諸
神に宣傳せり。二、即昔ノイの方舟の造らるゝ際、神が恒忍を以て待ちたる時
に於て、願はざりし諸神なり、蓋其方舟には少數の者、即八人のみ水より救はれたり。
二、此に象れる洗滌、即肉體の穢を除くに非ずして、玷なき良心を神に求むる事は、
今我等をも救ふ、イエススハリストスの復活に由りてなり。三、彼は天に升りて神の
右に在り、諸天使と權柄と能力とは彼に服せり。

第四節 一、ハリストスは爾等の爲に肉體にて苦を受けられたれば、爾等も亦此の意を以
て自ら救ふべし、蓋肉體にて苦を受くる者は、脚を息めしなり。二、是れ肉體に寓れる餘
日を已に人の怒に罹はす、乃神の旨に循ひて度らん爲なり。三、蓋爾等が過ぎたる度

生の時に、異邦人の旨に従ひて、邪修終意沈溺、賢愚も、必ず拜偶像を行ふこと足れり、故に彼等は、爾等が彼等と併に此の放蕩の極に與らざるを異みて、爾等を防る。彼等は、彼等も、なくして生者及び死者を審判せんとする者に答を爲さん。六、死しし者にも、福音せられしは、彼等人に循ひて、身にて審判を受けたれども、神に循ひて、神にて生かんと爲なり。一切の終は、通づけり、故に、隨位し、且、微服して、祈禱せよ。八、要する者は、篤く相愛するに在り、益愛は多くの罪を赦ふ。互に、族人を、餉して、答む勿れ。一〇、神の種種の恩寵の恩恵なる、家宰の如く、各其受けし賜を以て、互に、務めよ。一一、人若し言はば、神の言として、言へ、人若し、務めば、神の賜ふ力を、盡して、務めよ。神が凡の事に於て、イエスス、ハリストスに由りて、贖せられん爲なり、光榮と、權能とは、彼に、無窮の世に歸す、「アミン」。一二、至愛の者よ、試の爲に、爾等に、遣さるゝ火の如き、苦を、異しみて、異しき事、爾等に、遣へり、さする勿れ。一三、ハリストスの苦に、與るに、因りて、喜べ、其光榮の顯現の時にも、喜びて、樂しまん爲なり。一四、若し、彼等、ハリストスの名の爲に、爾等を、勝らば、爾等、爾等なり、蓋、光榮の神、神は、爾等に、止る、彼等に、因りて、彼は、遺され、爾等に、

因りて禁せらる。一五 惟爾等の中に兇殺者或は竊盜或は行惡者或は狼に人の事に與る者として苦に遇ふ者あるべからず、一六 然れども若し「ハリスラアニン」として之に遇は、蓋づる勿れ、乃此の分の爲に神を贖祭せよ。一七 神の家より始めて審判を行ふ時至れり若し先づ我等より始めば神の福音に順はざる者は其終如何にぞや、一八 若し義者僅に救を得ば不虔者と罪人とは何處にか立たん。一九 故に神の旨に循ひて苦を受くる者は善を行ひて其靈を情すべき造物主に託すべし。

第四節

爾等の中の長老等に我は同長老且ハリストスの苦の證者及び願れんとする光榮に共に與る者として求む。二〇 爾等に在る神の群を牧して之を監督するには強ひて爲すに非ず、乃願に因り又神の旨に順ふに因り不潔の利の爲に非ず、乃熱心に因りて爲せ、又神の樂に主たるに非ず、乃群の式と爲れ、然らば牧長の頭れん時に爾等測まざる光榮の冕を得ん、又爾等少き者は長老等に順へ且皆相順ひて、謙遜を衣よ蓋神は誇る者に敵し謙る者に恩寵を賜ふ。故に爾等神の大能の手の下に自ら卑くせよ彼が期に屈りて爾等を高くせん爲なり。二一 凡そ爾等が處る所を彼に

託せよ。蓋彼は爾等を顧みるなり。一四 蓋爾等の敵なる惡魔は、吼ゆる獅の如く、巡り行きて吞むべき者を尋ね、爾等信を棄てて之を棄け、世に在る爾等の兄弟も同じき苦に遇ふを知らばなり。一五 踏の恩寵の神ハリストスイイスを以て我等を其永遠の光榮に召し、主は願はくは爾等が暫時の苦の後に自ら爾等を全くし、堅くし、強くし、動かさらしめん。一六 願はくは光榮と權能とは彼に無窮の世に歸せん「アマモン」。

一七 我はシルアン、愈ふに忠信なる爾等の兄弟に託して、斯の短音の書を送りて、勳を爲し、且爾等の立つ所の恩寵が神の眞の恩寵なるを證せり。一八

一九 在る爾等と同じく選ばれたる教會及び吾が子マルコ爾等の安を問ふ。一四 爾等愛の接吻を以て互に安を問へ。願はくはハリストスイイスに頼りて平安は爾等衆人に在らんことを「アマモン」。

聖使徒ペトルの後公書

第二篇

一

シモンペトル、イエススハリストスの僕及び使徒たる者は、我等の神及び

教主イエススハリストスの義に頼りて、我等と共に同じく貴き信を獲たる者に書を
送す。二願はくは風亂と平安とは、神及びハリストスイエスス我等の主を敬るに於て、
爾等に増さんことを。彼の神聖なる能力より、我等に凡そ生命及び敬虔に要する事
は賜はりたり、光榮と盛徳とを以て我等を召し、者を識るに由りてなり。蓋此の光
榮盛徳に依りて、我等に貴くして大なる許約は賜はりたり、我等が此を以て世に在る
處の敗壞を脱れて、神の任に與る者となり。是の故に爾等一切の勉勵を用
ひて、爾等の信に徳を加へ、徳に知識を加へ、知識に節制を加へ、節制に忍耐を加へ、忍
耐に敬虔を加へ、敬虔に兄弟の親睦を加へ、兄弟の親睦に愛を加へよ。蓋若し此等
爾等の中に在りて、彌益さば、爾等が我等の主イエススハリストスを識るに於て、迷ま
ざるなく、果を結ばざるなきを致さん。此等の無き者は、盲にして、目を蔽ひ、其惑き罪

より深まりし事を忘れたり。一〇故に兄弟よ、益々勉勵して爾等の召されし事及び選ばれし事を堅固にせよ此等を行ひて永く眠かざらん。二〇蓋此くの若くば爾等に我等の主教主イエススハリストスの永遠の國に入る恩恵は裕に加へられん。二三故に爾等此を知り且既に受けたる眞實に堅められざれども我は慎に爾等に此等の事を記念せしむるを怠めざらん。二四我は此の幕に在る時此の記念を以て爾等を勵ますは當然の事なりと思へり。二五蓋我は我が幕を脱せんことの近きを知る我が主イエススハリストスの我に示しが如し。二六然れども我は我が去らん後にも爾等の常に此等を記念することをお勧めん。二七蓋我等は巧なる虚脱に従ひて爾等に我が主イエススハリストスの能力と降臨とを告げしに非ず、乃其威光を親しく見たる者として然せり。二八蓋至大なる光榮より益の彼に來りて此は我の至愛の子我が喜べる者なりと曰ひし時彼は神父より尊貴と光榮とを受けたり。二九天より來りし此の聲は我等彼と偕に聖なる山に在る時之を聞けり。三〇且我等に近に確なる預言者の言あり爾等が之を暗き處に耀く燈として天明け、晨星の爾等の心に出づるに至るまで

願みるは善し。二〇し。首として知るべし凡の聖書の預言の己に由りて解く能はざるを。
二一。蓋預言は未だ嘗て人の旨に由りて出でしはあらず、乃神の諸聖人が聖神に感
ぜられて之を言ひしなり。

第二編 一。民の中には偽の預言者も有りき、斯く用等の中にも偽の師は起らん、彼等
は淪亡の異端を入れ、彼等を贖ひし主宰に背きて自ら速なる淪亡を取らん。二。多くの
者は彼等の放蕩に従はん、彼等に因りて眞實の道は踴躍を受けん。三。彼等は貪婪に由
りて、飾言を以て用等を餌せん、彼等の審判は昔より定まりて遅はらず、彼等の淪亡は
察れず。四。盜賊は罪を犯し、諸天使を容さず、乃地獄の幽暗の縲紲に縛り、之を刑の爲
に饑らしめて審判を待たしめ、又古世を容さず、乃不虔者の世に洪水を施して、惟
義を傳へしノイの一家八人を救ひ、又ソドムゴモラの節邑を滅に定め、之を灰に墜
じて、後氷の不虔者の鑒と爲し、七。惟義なるロト、無道の者の淫亂の行に倦みたる者を
救へり、八。蓋此の義人は彼等の中に居り、其不法の行を見且聞きて、日、日其義なる靈を
傷めたり。九。然らば、則主は敬虔の者を誘惑より救ひ、不義の者を刑の爲に饑りて、密

判の日を待たしむるを知る、一特に肉に循ひて汚れたる慾を行ひ首長を鞠入する者に於て然りと爲す。彼等は狂妄にして我意を張り、勝者を畏れず、二然るに天使等は權威と能力とを以て彼等に勝ると、三主の前に之を勝りて叩するを爲さす。一彼等は本性の無知なる愚執はれて滅さるゝ爲に生れたる者の如く其知らざる所を勝りて己の敗壞を以て滅されん。二彼等は不義の報を受けん。蓋彼等日日宴樂を以て歡と爲し、既に自ら汚し、又爾等を汚す者にして、爾等と共に宴して其神賜を以て樂と爲す。一彼等は目に色慾を充て、罪を犯して已めず。彼等は堅からざる靈を惑はす。其心は貪に慣れたり。是れ罪の子なり。一彼等は正しき道を離れ、迷ひてソルの子アラブムの蹤に従へり。即不義の利を愛して、己の不法の爲に責められし者なり。首なき牝驢は人の聲を出して、預言者の狂へるを止めたり。一彼等は水なき泉なり。暴風に逐はるゝ雲及び霧なり。永遠の幽暗は彼等の爲に備へられたり。一蓋彼等は勝りたる虚誕を語りて、迷へる者の中より僅に脱れたる者を肉慾と淫亂とに誘ふ。一之に自由を與へん。と約すれども、自ら敗壞の奴隸たり。勝たる者は

勝つ者の奴隷たればなり。二〇蓋若し彼等我が主救主イエススハリストスを識るに因りて、世の汚を脱れ、復之に廻はれて勝たる、時は彼等の爲に後の患は先より更に甚し。二一彼等義の道を識りて其傳へられし聖なる誠に反かんよりは、寧之を識らざるを美さす。二二彼等は正に謬に云ふ所に應へり、犬は其吐きたる物に反り、豕は糞に潔められて復泥に臥す。

第三節 一 至愛の者よ、我今此の第二の書を爾等に達す、此等を以て記念せしめて爾等の正潔なる意を勵ます。二 爾等が先に聖なる預言者の書ひし言及び爾等の諸使徒の傳へし主救主の誠を記憶せん爲なり。三 首として知るべし、末の日に嘲る者來り、己の怒に従ひて行ひて、云はん、彼の降臨の許約は安にか在る、蓋列祖の賤りしより以來、萬物は造成の始より存すること、是くの如し。蓋彼等は知るを欲せず、太初に神の言に由りて天あり、又地は水より水を以て合成せられたり、此に緣りて當時の世は水に淹されて滅びたり。然るに今の天地同じき言に由りて覆らる、者は火の爲に存せられて審判及び不敬虔の人の淪亡の日を待つなり。八 至愛の者よ、此の一事は

爾等に隠さるべからず主に在りては一日は千年の如く千年は一日の如し。主が其の許約を行ふは或者が遅はると思ふ如く遅はるに非ず乃人の滅ぶるを欲せず家人の悔改に至らんことを欲して我等を永く忍ぶなり。然れども主の日の來るは盜の來るが如くならん當時天は響きて通り體質は燃ゆ毀れ地及び之に載する事物は皆焚け盡きん。斯くの如く此等皆毀れんとするに由り、爾等即彼の天焚かれて毀れ燃ゆる體質は餘けんとする所の日の來るを待ち且慕ふ者は現行と敬虔に於て如何なる者となるべきか。然れども我等は彼の許約に依りて新天新地に義の居る處を俟つ。故に至愛の者、爾等之を俟ちて玷なく疵なく平安にして彼の前に現れんことを勉めよ。且我等の主の恒忍を以て救と爲せ我が至愛の兄弟パウロも彼に賦せられし智慧に循ひて爾等に書せしが如く、亦其凡の書に之を述ぶるが如し其中に曉り難き處あり學ばず又堅からざる者は他の聖書の如く是をも亦強ひ解きて自ら敗亡を取るなり。至愛の者、爾等預め此の事を知りて慎め恐らくは無道の者の迷に誘はれて己の堅固を失はん。乃恩寵及び我等の

主しゅ教きやう主しゅ | イいスすスすハはリりスすトとスすをを知しるる智ち識しにに成せい長ちやうせせよよ。願ねがははくくはは光くわう榮えいはは今いまもも永えい世せいのの日ひも
彼かにに歸かへせせんんアアミミンン。

ハトル後公書

四二六

聖使徒神學者イオアンの第一公書

第一節 生命の言に關して始より有りし事我等の聞きし事我等の目に見し事親
究めし事我等の手に掬りし事蓋生命は顯れたり而して我等は之を見之を證し
此の永遠の生命父と共に在りて我等に顯れし者を爾等に傳ふ。我等が見し事聞
きし事を以て爾等に傳ふるは爾等をして我等と共に與せしめん爲なり我等の共與は
父及び其子イイススハリストスに在り。我等が此の書を爾等に送するは爾等の喜
の全からん爲なり。夫れ我等が彼より聞きて爾等に傳ふる所の福音は乃神は光な
り其中に一も暗なきことなり。若し我等彼に共與ありと云ひて暗を行はば則我等
證りて眞實を行はざるなり。若し我等光を行はば彼が光に在るが如し。則我等互
に共與あり而して彼の子イイススハリストスの血は我等を悉くの罪より潔む。若
し我等罪なしと言はば則自ら欺きて眞實は我等の中に在らず。若し我等の罪を
認めば則彼は信且義にして我等の罪を赦し我等を悉くの不義より潔めん。一〇若

し我等罪を犯さ。りき云はば則彼を以て離る者。爲すなり其言は我等の中に在らず。

第三節

一。我が小子。我が之を書して爾等に送するは。爾等が罪を犯さ。らん爲なり。若し人罪を犯さば。我等に父の前に保薦師あり。即義人イイスス。マリヌスなり。二。彼は我等の罪の爲に挽回の祭なり。第我等の爲のみならず。亦全世界の爲なり。我等若し彼の誠を守らば。是に由りて彼を離れるを曉る。四。我彼を離れり。云ひて其誠を守らざる者は。離る者にして。眞實は其中に在らず。五。彼の言を守る者は。神の愛實に其衷に全くせられたり。是に由りて我等が彼に在るを曉る。六。彼に居ると言ふ者は。彼が行ひし所に。循ひて行ふべし。七。至愛の者。我が書して。爾等に送するは。新なる誠に非ず。乃舊き誠。爾等が始より有てる者なり。舊き誠。は爾等が始より聞きし言なり。八。復我新なる誠を書して。爾等に送す。彼に在りても。爾等に在りても。眞實なる者なり。蓋暗は過ぎ。眞の光は。已に照る。九。自ら光に在り。と言ひて。其兄弟を憎む者は。尙暗に在るなり。一〇。其兄弟を受する者は。光に居り。其衷に。暗なし。一一。其兄弟を憎む者は。暗に在るなり。

り暗に歩み、何に往くを知らず、暗は其目を盲まし、故なり。一三、小子よ、我書して爾等に達す、爾等の罪は彼の名に縁りて赦されたればなり。一四、爾父よ、我書して爾等に達す、爾等太初より在る者を識りたればなり。一五、少者よ、我書して爾等に達す、爾等凶惡者に勝ちたればなり。童子よ、我書して爾等に達す、爾等父を識りたればなり。一六、爾父よ、我書して爾等に達せり、爾等剛健にして、神の旨、爾等の裏に居り、爾等凶惡者に勝ちたればなり。一七、世をも世に在る物をも愛する勿れ、人世を愛すれば、父に於ける愛、其裏に在らず。一八、凡そ世に在る者、即ち肉體の慾、目の慾、度生の驕は、父よりするに非ず、乃世よりするなり。一九、世も其慾も逝ぐ、惟神の旨を行ふ者は永く存す。二〇、小子よ、末の時至れり、爾等が「アンヲハリスト」來ると聞さし、如く今已に多くの「アンヲハリスト」あり、是に由りて我等は末の時なるを知る。二一、爾等ば我等より出でたり、然れども我等に屬せしに非ず、蓋若し我等に屬せしならば、乃我等と偕に止りしならん、然れども彼等は出でたり、是に由りて、皆我等に屬するには非ざることを見れたり。二二、且爾等は聖なる者より傳

責せられて知らざる所なし。二一〇 我が密して爾等に遠せしは、爾等が眞實を知らざるに因るに非ず、乃之を識り、且凡の讒の眞實に由らざるを知らざるに因りてなり。二一三 誰る者は誰ぞ、イイススのハリストスたるを認めざる者に非ずや、是れ即アンタハリストス、父及び子を認めざる者なり。二一四 凡そ子を認めざる者は父をも有たず、子を承け認むる者は父をも有つなり。二一五 故に爾等が始より聞きし者は、爾等に居るべし、若し始より聞きし者、爾等に居らば、爾等も亦于及び父に居らん。二一六 彼が我等に約せし許約は、乃永遠の生命なり。二一七 我は、爾等を惑はす者の事に就きて、此を審して、爾等に遠せり。二一八 且爾等が彼より受けし所の傳言は、爾等に居るなり、故に爾等は人の惑ふるを要せず、乃此の傳言は、爾等に凡の事を教へ、且其眞にして偽ならずるに因りて、其爾等に教へし如く、彼に居れ。二一九 小子よ、今彼に居れ、彼が顯れん時に、我等の殺然たらん爲、彼が臨まん時に、彼の前に愧ぢざらん爲なり。二二〇 爾等若し彼の義なるを知らば、乃凡そ義を行ふ者の彼より生れしを知れ。

第二回

一親よ、父は何等の愛を我等に賜ひて、我等に神の子と稱へられ、且爲るを得

しめし。世は我等を讒らす。彼を讒らざるが故なり。二至愛の者よ、我等今神の子たり、然れども若何にならんか。尙未だ顯れず。我等惟其顯れん時、彼に育たる者よ爲らんことを知る。蓋其眞の狀に於て彼を見ん。三凡そ彼に於ける此の惡を憫く者は己を潔くす彼の潔きが如し。四凡そ罪を行ふ者は不法を行ふなり。罪とは不法なり。爾等ば彼の顯れしは我等の罪を眞はん爲にして彼には罪なきを知る。五凡そ彼に居る者は罪を犯さず。凡そ罪を犯す者は未だ彼を見ず。未だ彼を讒らざるなり。六小子よ、人に惑はさるゝ勿れ。義を行ふ者は義なり。彼の義なるが如し。七罪を行ふ者は惡魔に由る。蓋惡魔は始より罪を犯せるなり。神の子の顯れしは特に惡魔の工を毀たん爲なり。八凡そ神より生れし者は罪を行はず。蓋其種は彼の衷に存す。彼は罪を犯す能はず。神より生れしが故なり。一〇神の子は惡魔の子は斯く知らる。凡そ義を行はざる者は神よりするに非ず。其兄弟を受せざる者も亦然り。一一蓋是れ爾等が始より聞きし所の命なり。乃我等相愛すべし。一二カインの如くすべからず。彼は凶惡者に縁りて己の弟を殺せり。胡爲れぞ之を殺したる己の行は惡しく。弟の行は義なり。しに因りてなり。

三 我が兄弟よ若し世爾等を憎まば奇しむ勿れ。一 我等は死より生命に移りしを知
 る兄弟を愛すればなり兄弟を愛せざる者は死に居るなり。一五 凡そ其兄弟を憎む者
 は殺人者なり爾等は凡の殺人者は永遠の生命を其衷に有たざるを知る。一六 彼は我
 等の爲に其生命を捐てたり此によりて我等は愛を知れり我等も兄弟の爲に生命を
 捐つべし。一七 然るに此の世の産業を有つ者にして其兄弟の乏しきを見て彼の爲に
 己の心を閉せば神の愛安んそ其衷に在らん。一八 我が小子よ我等愛するに言を以て
 し或は舌を以てする勿く乃行ぎ實を以てすべし。一九 此に由りて我等は眞實
 に屬するを知り且彼の前に我等の心を安んす。二〇 盜者し我が心我等を責めば況や
 神をや蓋神は我等の心より大にして知らざる所なし。二一 至愛の者よ若し我が心我
 等を責めずば我等神の前に殺然たり。二二 且求むる所は彼より受く蓋彼の誠を守り
 彼の悦ぶ所を行ふ。二三 彼の誠は乃我等其子イイススハリストスの名を信じ且彼
 が我等に誠めし如く相愛するに在り。二四 彼の誠を守る者は彼に居り彼も亦此に居
 るなり彼の我等に居るは其我等に與へし所の神に由りて之を知る。

第四節 一 至愛の者よ、楯神を信する勿れ、乃其神の神に屬すや否やを試みよ。蓋多く
 の偽預言者は世に出でたり。二 神の神と迷謬の神とを此くの如く知れ、凡そイエスス
 カリストスが肉體を以て來りしことを承け認むる神は神に屬するなり。三 凡そイエ
 ススハリストスが肉體を以て來りしことを承け認めざる神は神に屬するに非ず、乃
 爾等が來らんと聞きし所、今已に世に在る「アンチハリスト」の神なり。四 小子よ、爾等は
 神に屬し、而して彼等に誘てり、蓋爾等に居る者は世に居る者より大なり。五 彼等は世
 に屬す、故に其言ふ所も世に屬す、世は彼等に聽く。我等は神に屬す、神を識る者は我
 等に聽く、神に屬せざる者は我等に聽かず。此に由りて我等は眞實の神と迷謬の神と
 を識るなり。六 至愛の者よ、我等相愛すべし、蓋愛は神に屬す、凡そ愛する者は神より生
 れて、神を知るなり。七 愛せざる者は神を識らず、蓋神は愛なり。八 神は其獨生の子を世
 に遣して、我等をして彼に由りて生命を得しむ、此を以て神の我等に於ける愛は顯れ
 たり。九 我等が神を愛せしに非ず、乃彼は我等を愛し、其子を遣して、我等の罪の爲に
 挽回の祭と爲せり、此に於て愛あり。一〇 至愛の者よ、若し神此くの如く我等を愛せば

我等も相愛すべし。一ニ神を見し人未だ嘗てあらず。若し我等相愛せば神は我等に居り其愛は我等の裏に全くせられしなり。二彼既に其神を我等に與へたれば我等此に由りて彼に居り彼も我等に居るを知る。三父が其子を遣して世の救主と爲し。四此は我等已に之を見且聞す。五イオアヌスを神の子と承け認むる者は神は彼に居り彼も神に居るなり。六神の我等に於ける愛は我等已に之を知り且信せり。神は愛なり愛に居る者は神に居り神も彼に居るなり。七愛は我等の裏に全くせられて我等をして審判の日に毅然たるを得じむ蓋我等の此の世に在りて行ふ所は彼の行ひしが如し。八愛の中には懼なし乃全き愛は懼を外に逐ふ蓋懼の中には苦あり懼る者は未だ愛に全くせられざるなり。九我等は彼を愛すべし蓋彼は先づ我等を愛せり。二〇人若し我神を愛すと云ひて其兄弟を惡まば誰る者なり蓋見る所の兄弟を愛せざる者は偽ぞ見ざる所の神を愛するを得ん。二一神を愛する者は亦其兄弟を愛すべし此の誠は我等之を彼より受けたり。

四三三

凡そイオアヌスのかりストスたるを信する者は神より生れたるなり凡そ

生みし者を愛する者は彼より生れし者をも愛す。我等若し神を愛し其誠を守らば、
此に由りて我等が神の諸子を愛するを知る。蓋神の誠を守るは是れ乃神を愛す
るなり其誠は難からず。蓋凡そ神より生れし者は世に勝つ世に勝ちたる勝は乃我
等の信なり。五世に勝つ者は誰ぞ、イエスが神の子たるを信する者に非ずや。六此れ
即水と血と神とを以て來りしイエススハリストスなり、猶水のみならず乃水と血と
を以てせり而して證を作す者は神なり神は眞實なるに因る。蓋天に在りて證を作
す者三父なり言なり聖神なり此の三の者は一なり。又地に在りて證を作す者三神
なり水なり血なり此の三の者は一に歸す。若し我等人の證を受けば神の證は更に
大なり蓋是れ神が其子の爲に證せし所の證なり。一神の子を信する者は己の裏に
證あり神を信せざる者は彼を証する者と爲す、蓋神が其子の爲に證せし所の證を信せ
ず。一此の證は即神は我等に永遠の生命を與へ而して此の生命は彼の手に在るこ
と是なり。二神の子を有つ者は生命を有ち神の子を有たざる者は生命を有たず。一
我之を書して爾等神の子の名を信する者に達せり爾等が永遠の生命を有つを知

らん爲又神の子の名を借ごん爲なり。我等彼の旨に留みて求むれば彼は我等に
聽く是れ我等が彼の前に毅然たる所なり。凡そ彼が我等の求むる所を聞くを知
らば亦我等の彼に求むる所を得るを知る。若し人其兄弟が死を致さざる罪を犯
すを見れば求むべし然らば神は彼即死を致さざる罪を犯す者に生命を與へん。死を致
す罪あり我之が爲に祈るべしと云はず。凡の不義は罪なり但し死を致さざる罪
あり。我等は凡そ神より生れし者の罪を犯さざるを知る乃神より生れし者は己
を守り凶悪者は彼に觸れず。我等が神に屬し世は憎惡に伏するは我等之を知る。
又知る神の子來りて我等に光及び智慧を與へたり我等が眞の神を識りて其眞
の子イオブスハリストスに居らん爲なり。此れ即眞の神及び永遠の生命なり。二二
小子よ己を偶像より離れ、イオブス。

聖使徒神學者イオアンの第二公書

一 老夫は、選を蒙りたる貴婦及び其諸子、我が實に愛する所第我のみならず、凡そ眞實を識りたる者が、我等に居り且我等と併に世世に居らんとする眞實に緣りて愛する所の者に番を送す。願はくは神父及び父の子主イエスキリストスよりする恩寵と慈憐と平安とは眞實及び愛に於て爾等と併に在らんことを。我爾が諸子の中に、我等が父より誠を受けし如く眞實を行ふ者あるを見て甚喜べり。汝等、今も我が爾に勸むるは、新なる誠を書して爾に送するが如きに非ず、乃我等が始より有つ所の者なり、即我等相愛すべし。愛とは我等が彼の誠に備ひて行ふこと是なり。此の誠は、乃爾等が之を行ふ爲に始より聞きし所なり。蓋多くの惑はす者世に入りて、イエスキリストスハリトスが、肉體を以て來りしことを承け認めず、此れ乃惑はす者なり、ニアシテハリトスなり。爾等自ら悔め、我等が勞せし所を失はざらん爲、乃全き賞を獲得ん爲なり。凡そ罪を犯してハリトスの教に居らざる者は、解を有たず、キリストス

の教カキヘに居スる者モノは父チ及び子コを有タつなり。一〇 人ヒト若シし此コの教カキヘを佩カびずして爾等ナンチラに來キらば、彼カレを家イヘに納イる、勿ナカれ其安ソノアンを問トふ勿ナカれ。一一 蓋シテ彼カレの安アンを問トふ者モノは其惡ソノアチしき行コトに與アるなり。一二 我ワレ尙ナ多く書シして爾等ナンチラに達タツすべき事コトあれども、紙カミと墨スミを以もつてするを欲ホウせず、乃ナ爾等ナンチラに至イりて口クチを以もつて口クチに對カひて言カはんことを望ノゾむ、爾等ナンチラの喜ヨロコビの全マツからん爲ためなり。一三 選ニらば、爾等ナンチラの姉妹シマイの諸子シヨシは爾ナンチの安アンを問トふニアニシシ。

聖使徒神學者イオアンの第三公書

一 老夫は至愛なるが、我が實に愛する者に害を遣す。二 至愛の者よ、我所る爾が康健にして、且凡の事に進歩するは、爾が靈の進歩するが如くならんことを。蓋兄弟來りて、爾が忠信の事如何に、爾が眞實を行ふ事を證せし時、我甚喜べり。我には我が諸子が眞實を行ふを聞くより大なる喜なし。三 至愛の者よ、爾が兄弟と旅客とに爲す所は、忠信にして爲すなり。彼等は教會の前に爾の愛を證せり。爾若し神に合ふが若く、彼等の旅行を助けば、其行ふ所善し。蓋彼等は異邦人より何をも取らずして、主の名に緣りて出でたり。八 故に我等此くの如き者を接くべし、眞實に同勞する者とならん爲なり。九 我書を教會に遣せり、然れども、彼等の中に長たるを好む、子トレフ我等を納れず。一〇 故に我等に至らば、彼の行ふ事を憶ひ起さん、彼は惡言を以て我等を勝り、且此を以て足れりさせずして、自ら兄弟を接けず、接けんを欲する者にも之を禁じて、教會より逐ふ。一一 至愛の者よ、惡に效ふ勿れ、乃善に效へ。善を行ふ者は神に屬し、

悪を行ふ名は神を見たりき。一三
我等も亦證す爾等は我が證の眞なるを知る。一四
筆を以て之を書して爾に送するを欲せず。一五
對ひて言はんことを望む。一六
平安なれ諸友爾の安を問ふ爾諸友に各其安を問へ。

聖使徒イウダの公書

一 イウダ、イオニスス、カリストスの僕、イアエフの兄弟は、神に聖にせられ、イオニスス、カリストスに饒らるゝ召されたる者に書を遣す。願はくは慈憐と平安と仁愛とに爾等に増さんことを。至愛の者よ、我甚我が共與の救の事を爾等の爲に書するを願ひて、一次聖徒に傳へられし信の爲に力を竭くすべき勸を盡して、爾等に遣するを必要と爲せり。蓋或不敬虔の人人皆より此の刑に預定せられたる者、我が神の恩寵を易べて邪惡の緣と爲し、獨一の主宰神及び我が主イオニスス、カリストスを拒む者は、濫に入りたり。我が爾等已に之を知る者に憶ひ起さしめんことを欲するは、乃主が民をエギベトの地より救ひて後に、信ぜざりし者を滅じ、父己の本位を守らすじて、其任處を離れたる諸天使を、永遠の線綫を以て、幽暗の下に、大なる日の審判の爲に守れること、是なり。ソドム、エモラ及び近鄰の諸邑、此と同じく淫亂を行ひ、異色を穢にせし者が、永遠の火の刑を受けて、鑑戒と立てられし如く、此の夢想者肉體を汚し、首長を誹ん

じ尊者を勝る者も此くの如くならん。天使首ミハイルは悪魔と論じて、モイセイの
 屍を争ひし時敢て勝りて之を罪せざりき惟曰へり主は爾に禁すべしと。一〇然れ
 ども此の罪は知らざる所を勝り本性に依りて無知の獄の如く知る所を以て己を汚
 す。一二彼等禍なる哉蓋彼等はカインの途を行き、ラアムスの利慾の迷に流れ、コレイ
 の逆逆の中に滅びたり。一二彼等は爾等の愛の晩餐を汚す者なり爾等と共に宴して、
 懼るゝなく己を思す。彼等は風に逐はるゝ水なき雲再死し根抜かれたる果なき秋の
 樹。一三己の穢を沫だつる海の猛浪、永遠の幽暗の備はりて待つ所の迷へる星なり。一
 四アダムより第七世なるエノクは此の輩の事を預言して云へり、主は其萬族の
 聖なる天使と共に臨みて、一五審判を衆人に行ひ凡の不敬虔の者が其不敬虔に由り
 て爲し、悉くの事及び不敬虔なる即人等が彼に對ひて言ひし悉くの積なる言を責
 めんぞ。一六彼等は怒言を言ひ足るを知らざる者其怒を疑にして不敬虔さ不法さを
 行ふ者なり其口は誇りたる言を出し利の爲に人に詭ふ。一七然れども爾等至愛の者
 我等の主イエイススハリストスの諸使徒が義に言ひし言を憶へ。一八蓋彼等は爾等

に憚り、末の時に嘲ける者ありて己の不敬虔の愆に従ひて行はん。一九此の罪己を
唯一の倍より區別する者は靈に屬して神を有たざる者なり。二〇至愛の者も爾等
己を爾等の至聖なる倍に建て、聖神に藉りて禱り、己を神の愛に守りて、我等の主
イエススハリストスより永遠の生命を得しむる慈憐を俟て。二一且或者は其状を察
して之を矜み、二二或者は懼を以て之を救ひて、火より脱れしめ、自ら懼を以て之を責
めて、肉に汚されたる衣だに惡め。二三能く爾等を護りて、厭かしめず、爾等に疵なくし
て、歡びて其光榮の前に立つを得しむる。二四獨一救いの神我等の教主に、我等の主イ
エススハリストスに由りて、光榮及び威嚴能力及び權柄は、世世の先にも今にも萬世
にも歸す「アミン」。

イワダ公書

四四四

聖使徒パウロがローマ人に達する書

第一

一

パウロ、イエス・キリストノ僕召されたる使徒、神の福音、即ち神の福音、
其諸預言者を以て聖なる書に於て許約せし福音、其子、即ち肉體に依りては、ダ
の裔より生れ、聖徳の神に依りては、大能に於て、死より復活するを以て、神の子と
稱し、省の福音、我等に恩寵と使徒職を受けしめ、其名に依りて、萬民を、亦其中に
爾等、イエス・キリストに召されたる者を、信に従はしむるを致す、我等の主、イエ
ス・キリストの福音を傳ふる爲に選ばれたる者は、書じて、凡そローマに在る聖徒、神
の愛する所の召されたる者に達す。願はくは、恩寵と平安とは、神我等の父及び主、
イエス・キリストより、爾等に賜はらんことを。我は先づ、イエス・キリストに頼り
て、爾等衆の爲に、我が神に感謝す。爾等の信の全世界に傳へらるゝを以てなり。蓋我
が其子の福音に於て、我が神を以て事ふる所の神は、私の證者なり、我斷はす、爾等を念
ひて、一いつに、恒に我が所屬の中に、我が神の旨に依りて、何の時か、善き途を得て、爾等に至

らんことを求む。一 蓋我切に爾等を見んことを望む。聊か鬼神の賜を爾等に頒ち與へて爾等を堅固にせん爲なり。二 是れ即ち爾等の中に在りて爾等と我と共同の信を以て相慰めん爲なり。三 兄弟よ、我爾等を知らざるを欲せず。我爾等に至らんことを志せり。他邦民の中に於けるが如く、爾等の中にも聊か果を獲ん爲なり。然れども今に至るまで阻まれたり。一 我はギリシヤ人及び化外人智者及び愚者に負ふ所あり。一 故に我に於ては、我爾等ローマに在る者にも福音を傳へんことを願ふ。一 蓋我はハリストスの福音を以て耻せせず。是れ凡の信する者先づイカテヤ人次にラシヤ人に救を得しむる神の能なればなり。一 其中に神の義は顯れて信より信に迷む餘されしが、如し義人は信に由りて生きん。一 蓋神の怒は天より顯れて不義を以て眞實を阻む人人の凡の不虔不義を攻む。一 神の事に於て知るべき所は、彼等の爲に明なるに因る。神は彼等に之を顯し、故なり。二 蓋彼の見る可からざる事、即其永遠の能さ、神性は、創世より以來遺られたる物を察するに由りて見るべし。故に彼等は推諉すべきなし。三 然れども、彼等は神を知りて之を神として榮せず、亦感謝せ

ざりき、乃其思念は虚しくなり、其無智の心は味み、二二自ら智者と稱へて愚者と爲り、二三朽ちざる神の光榮を變じて、朽つる人及び禽獸昆蟲に似たる像と爲せり。二四此に縁りて神は彼等を其心の慾に於て汚穢に付して、彼等互に其身を辱しむるに至れり。二五彼等は神の眞實を易へて偽と爲し、受造物に敬拜奉事して、造物主に代へたり、二六即世に寵設せらるる者なり、「アモン」。此に縁りて神は彼等を耻づべき慾に付せり、二七蓋彼等の婦女は順性の用を變へて逆性の用と爲し、二八男は亦婦女の順性の用を棄て、嗜慾相熾め、男は男と耻づべき事を作して、其迷露に當れる報を己の身に受けたり。二九彼等は神を其念に存するを願はざりしに由りて、神は彼等を展れる心を慍きて不當なる事を行ふに付せり。三〇彼等は凡の不義淫行、惡惡貪婪、驕傲を充て、嫉妬兇殺、争鬪、詭譎、刻薄を盈つる者なり。三一彼等は隠刺、讒誘する者、神を怨む者、押に侮る者、三二矜慢驕傲なる者、惡事を圖む者、父母に順はざる者、三三頑愚なる者、約に背く者、無情なる者、怨を構ふる者、憐なき者なり。三四彼等は此くの如き事を行ふ者の死に當るべき神の擬定を知るさ雖、自ら之を行ふのみならず、之を行ふ者をも嘉す。

第三節

是を以て凡そ人を讃する者よ、用推譲すべきなし蓋他人を讃するは道に
 之を以て己を卑するなり、爾議する者同じき事を行へばなり。我等は此くの如き事
 を行ふ者の爲に眞實に合ふ神の審判あるを知る。此くの如き事を行ふ者を讃して、
 自ら之を行ふ人も爾神の審判を逃れんと思ふか。抑爾は神の仁慈寛容恒忍の豊
 厚なるを説んじて其仁慈が用を悔改に導くを知らざるか。然れども爾は剛愎の悔
 なき心さに留みて己の爲に神の怒の日及び其審判の顯現の日に怒を積む。蓋神は
 各人に其行に留みて報いん。忍耐して善を行ひ光榮尊貴不朽を求むる者には永遠
 の生命を報い。争闘を爲し眞實に順はずして不義に順ふ者には忿怒と熱怒とを報
 いん。患難と困苦とは凡そ惡を爲す人先づイウテヤ人次にマリシ人の靈に至らん。
 一〇 光榮と尊貴と平安とは凡そ善を爲す人先づイウテヤ人次にマリシ人に至らん。
 一〇 蓋神には偏視するこなし。一二 凡そ律法なくして罪を犯し、者ば律法なくし
 て滅び律法ありて罪を犯し、者ば律法に由りて審判せられん。一三 蓋律法を聞く者
 は神の前に義なるに非ず、乃律法を行ふ者は義とせられん。一四 蓋律法を有たざる異

邦人等、性に率ひて律法の事を行ふ時は、律法を有たすも、雖、自ら己の律法たるなり。
 一五 彼等は律法の工の其心に銘されたるを彰す、此れ彼等の良心及び互に眩め或は
 衰むる思慮の證する所なり、一六 卽、神がイエスス、ハリストスを以て人の密事を審
 判する日に於てす、我が福音する所の如し。一七 親よ、爾はイウテヤ人と稱へられ、律法
 に安んじ、神を以て誇り、一八 其旨を知り、律法に諭されて最善き事を辨へ、一九 自ら信
 じて、智者の相暗に在る者の光、二〇 愚なる者の師傅、幼兒の教師、律法に於て知識を眞
 實との式を有つ者と爲す。二一 然らば、爾は何の故に他人を誨へて、己を誨へざるか、二
 二 竊む勿れと勸めて、自ら竊むか、姦淫する勿れと誓ひて、自ら姦淫するか、偶像を惡ろ
 して、自ら聖物を攘むか、二三 律法に誇りて、自ら律法を犯すを以て、神を辱しむるか。二四
 蓋、爾等に緣りて、神の名は、異邦人の中に、誇らる、録されしが如し。二五 爾若し律法を
 行はば、割禮は益あり、爾若し律法を犯す者ならば、爾の割禮は無割禮と爲れるなり。二
 六 故に、若し割禮を受けざる者、律法の誠を守らば、其無割禮は、彼が爲に、割禮に銘せざ
 らんや、二七 且、性に由りて、割禮を受けずして、律法を行ふ者は、豈、爾文書及び割禮あり

て律法を犯す者を罪せざらんや。二八リだし外面にのみイウテヤ人たる者は、イウテヤ人に非ず外面に肉體にのみある割禮は割禮に非ず、二九す内心にイウテヤ人たる者は、イウテヤ人たり心の割禮文に由るに非ずして神に由る者は割禮なり其審は人に由るに非ず乃神に由るなり。

第三章

然らばイウテヤ人には何の長する所あるか或は割禮は何の益あるか。二凡の事に於て長する所多し首として神の言の彼等に託せられしに在り。蓋或者信ぜざりしならば如何彼等の不信は神の信を廢せんか。非らず神は眞實なり凡の人は偽なり誑されしが如し云く爾は爾の言に義にして爾の審判に勝たんぞ。若し我等の不義は神の義を影せば我等何にか言はん神は怒を加ふる時に於て不義なるにあらずや我人の信に預ひて言ふ。非らず若し然らば神は如何にして世を審判せん。蓋若し神の眞實は、我の偽を以て、愈其光榮を顯せば我何ぞ猶罪人の如く審判せられん、又我等は善を來さん爲に惡を爲すは可ならんか或者が我等を勝りて我等斯く言ふと謂るが如し彼等の定期は宜なり。然らば何ぞや我等愈れるか蓋もな

し蓋我等已にイリテヤ人もモリヤ人も皆罪に服するを證せり、一〇しる
云く我なる者一もあるなし、一悟る者なく神を尋ねる者なし、一三皆迷ひ均しく無
用と爲れり善を行ふ者なし、一も亦なし。一三彼等の喉は啓けたる松其舌にて欺く娘
の毒は其唇に在り。一四其口は蛆と苦さに満ち、一五其足は血を流す爲に疾し、一六
毀敗と害害とは其途に在り、一七彼等は和平の道を知らず、一八其目の前に神を畏る
長なしと。一九我等知る凡そ律法の音ふ所に律法の下に在る者に音ふなり斯く凡
の口は塞がり世皆神の前に罪あるを致す。二〇盗人一も律法の行に由りて彼の前
に義させらるゝを得ず律法に由りて罪の知らるゝが故なり。二一然れども今は律法
の外に神の義は著れたり律法及び諸預言者の證する所の者なり。二三即イエス
ハリストスを信するに由りて悉くの信者に臨み悉くの信者に在る神の義なり區別
なきに縁る。二四蓋人皆罪を獲神の光榮を失ひて、二五義させらるゝを得るは功な
くして彼の恩寵を以てハリストスイエスの贖に頼りてなり。二六神は彼を立て、
其血を以て信に由る挽回の祭と爲せり是れ曾て神の寛容の時に行ひし諸罪の赦に

於て彼の義を顯さん爲、^{二六}今の時に彼の義を顯して彼の義なること、イエスを信する人を義と爲すことを示さん爲なり。^{二七}然らば誇る所安にか在る除かれたり何の法を以てせしか、行の法が非らず、乃信の法なり。^{二八}故に我等は人の義せらるゝは、信に由りて、律法の行に由らざるを認む。^{二九}神は獨イウテ、火の神なるか、亦異邦人の神なるに非ずや、然り、亦異邦人の神なり。^{三〇}蓋同一の神は割禮を受けし者を信に由りて義と爲し、亦割禮を受けざる者を信を以て義と爲すなり。^{三一}然らば我等信を以て律法を廢するか、非らず、乃律法を堅立するなり。

四四 然らば我等は、我が先祖アウラムは肉體に由りて、何をか得たると言はん。^二若しアウラム行に由りて義とせられしならば、誇るべき所あり、然れども神の前に有るなし。^三蓋聖書は何をか言ふ、アウラムは神を信ぜり、此れ彼に歸して義となりたり。^四行ふ者には、其後ば恩に由りて歸するに非ず、乃本分に由りてなり。^五然れども行はずして、惟不虔者を義と爲す主を信する者には、其信は歸して義と爲る。^六斯くダワドも行に由らずして、神より義の歸せらるゝ人の福を述べて云く、^七

不法を教され、罪を赦はる。人は罪なり、主が罪を歸せざる人は罪なり。此の罪は、
は割禮を受くる者に在るか、抑割禮を受けざる者に在るか。盜我等は信アツラム
に歸して、義を爲れりと云ふ。一〇然らば如何に彼に歸せしか。割禮の後か、抑割禮の
先か。割禮の後に在らず、乃割禮の先に在り。一割禮の後も、彼は未だ割禮を受けざ
る先に有ちし所の信に由る義の印として之を受けたり、此れ彼が凡そ割禮を受けず
して信する者の父となりて、彼等にも義の歸せん爲、一亦割禮を受けし者の父、即
ち割禮を受けしのみならず、我が先祖アツラムが未だ割禮を受けざる時に有ちし
所の信の迹を履む者の父と爲らん爲なり。一三蓋アツラム若くは其裔に、世界の
嗣と爲るべき許約の賜はりたるは、律法に由るに非ず、乃信の義に由るなり。一四若
し律法に由る者、爾らば信は虚しく許約も廢せられたるなり。一五蓋律法は怒を
致す、律法なき處には犯すことも有るなし。一六故に信に由る恩に由らん爲なり、是れ
許約はアツラムの悉くの子孫、律法に由るのみならず、即信に由る者にも堅固な
らん爲なり。一七蓋録されしが如し、我等を立て、多くの民の父と爲せりと、アツラア

一 其信ぜし所の神死せし者を生かし、無き者を有るが如く稱ふる主の前に於て我等衆人の父たるなり。 一八 彼は忍なき時に於て怒を以て多くの民の父と爲らんことを信ぜり、言ひし所の如し、爾の裔は是くの如くならんこと。 一九 彼は信衰へすして、約百歳なりと雖、己の身の已に死せし如きと、其の胎の死せし如きとを願みず、
 二〇 不信を以て神の許約を疑はず、乃信に堅固にして、光榮を神に歸し。 二一 其約せし所、彼亦之を成すを能はずと確に信じたり。 二二 故に此は彼に歸して義と爲れり。 二三 然れども彼に歸して義と爲れり、且録されしは、獨彼の爲のみならず、 二四 亦我等の爲なり、我等、即我が主イエス Kristus を死より復活せしめし神を信する者にも、歸して義と爲らん、 二五 蓋主は我等の罪の爲に解され、我等の義とせられん爲に復活せり。

第二四章 一 この故に我等は信を以て義とせられて、神と和睦するを得たり、我が主イエス Kristus に頼りてなり。 二 我等彼に頼りて信を以て今居る所の恩寵に至るを得、且神の光榮を望むを以て誇と爲す。 三 此のみならず、乃亦忠誠を以て誇と爲す。

す。蓋し知る。患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は蓋を啓かず、蓋神の愛は、我等に與へられたる聖神に由りて、我等の心に滿がれたり。蓋しハリストスは、我等が尙弱かりし時に於て、期に屆りて、不虔者の爲に死せり。夫れ義人の爲には死する者幾と無し、恩人の爲には敢て死する者或は之れ有り。然れども神が其愛を我等に顯すは、我等尙罪人たりし時、ハリストスが我等の爲に死せしを以てせり。故に我等己に其血を以て義とせられたれば、況や今彼に由りて、怒より救はれんをや。一〇、蓋し我等敵たる時、其子の死を以て神と和睦せしならば、況や和睦して後、其生命に由りて救はれんをや。二、此のみならず、乃今我等に和睦を得しめたる我が主、ハリストスに頼りて、神を以て誇る。三、故に一人に縁りて、罪は世に入り、罪に縁りて、死の入りしが如く、死も亦悉くの人の中に入れり、蓋し彼の中に在りて、皆罪を犯せり。一三、律法の前にも、罪は世に在りき、惟、律法なき時には、罪の歸するなし。一四、然れども死ば、アダムより、モイセイに至るまで、アダムの如き罪を犯さざりし者にも、王たりき、アダムは乃未來の者の模なり。一五、然れども、恩寵の賜は、罪の如きに非

す、盜若し一人の罪に縁りて、多くの者の死せしならば、況や神の恩寵と一人イエス
 ハリストスの恩寵に縁る賜との多くの者に溢るゝをや。一六 且賜は罪を犯し、一
 人に縁る密判の如きに非ず、盜密判は一の罪の爲に定罪せらるゝを致し、恩寵の賜は
 多くの罪より義させらるゝを致す。一七 盜若し一人の罪を以て、死は一人に縁りて王
 たりしならば、況や溢るゝ恩寵と義の賜を受くる者は一人イエスハリストスに
 縁りて、生命に在りて王たらんをや。一八 故に一人の罪に縁りて、悉くの人に定罪の及
 びし如く、斯く一人の義に縁りても、悉くの人に義させられて、生命を獲ることは及べ
 り。一九 一人の不服に縁りて、多くの者の罪人となりし如く、斯く一人の順に縁りて
 も、多くの者は義者となりん。二〇 律法は後に來りて、罪の増すを致せり。罪の増し、時
 には恩寵溢れたり。二一 罪が王として死を致し、如く斯く恩寵も、イエスハリスト
 スに我が主に因りて、義を以て王として、永遠の生命を致さん爲なり。

第二四章 然らば何をか言はん、我等は恩寵の増さん爲に罪に止るべきか。二非らず、
 我等已に罪の爲に死せり、何ぞ復其中に生きん。三 豈知らずや、我等ハリストスイイス

スに於て洗を受けし者は皆彼の死に於て洗を受けしなり。故は我等は死に於ける
 洗を以て彼と併に葬られたり、ハリストスが父の光榮を以て死より復活せし如く、斯
 く我等も新にせられたる生命を度らん爲なり。蓋我等若し彼の死に效ふを以て彼
 と接合せられしならば、乃復活に效ふを以ても接合せらるべし。蓋我等知る我等
 の舊き人は彼と併に釘せられたり、即の身滅されて、我等復即の奴とならざらん爲な
 り、死せし者は即より釋かれしに因る。我等若しハリストスと併に死せば、則亦後
 と併に生きんことを信ず、蓋知る、ハリストスは死より復活して復死せず、死は復後
 に主たらざるを、一、彼の死せしは即の爲に一次死し彼の生くるは神の爲に生くれ
 ばなり。二、是くの如く爾等も己を以て、ハリストスと併に死すべし、我等の主
 在りて、即の爲に死し、神の爲に生くる者と意へ。一、故に即は爾等の死すべき身
 に王と爲りて、爾等其慾に徇ふことあるべからず。一、亦爾等の肢體を不義の器として、
 即に委ぬる勿れ、乃死より復生せし者の如く己を神に委れ、爾等の肢體を義の器として、
 神に獻げよ。一、即は爾等に主たる可からず、蓋爾等は律法の下に在らず、乃恩寵の下に在り。一、

然らば如何我等は律法の下に在らずして恩寵の下に在るが故に罪を犯さんか。非らず。一六 豈知らずや、爾等己を委れて僕を爲して之に順はば、爾等其順ふ者の僕たり或は罪の僕を爲りて死を致し、或は順の僕を爲りて義を致す。一七 神に感謝すべし、爾等素罪の僕たりしに、今は心より其授けられし救の籠に服ひ、一八 罪より釋かれて、義の僕を爲れり。一九 爾等が肉體の弱きに因りて、我人の情に徧ひて言ふ、爾等が曾て其肢體を不潔不法の僕を爲して不法に委れし如く、斯く今爾等の肢體を義の僕を爲して、成聖に委れよ。二〇 蓋爾等罪の僕たりし時は、義より釋かれし者なり。二一 其時爾等に何の結果有りしか、今自ら耻づる所の行爲なり、蓋其終は死なり。二三 然れども今爾等罪より釋かれて、神の僕を爲りし時は、爾等の結果は成聖なり、其終は永遠の生命なり。二四 蓋罪の報は死なり、神の賜はハリ、ストスイイス、我等の主による永遠の生命なり。

第二節

兄弟よ、蓋我律法を知る者に言ふ、爾等豈知らずや、律法は人に其生ける時に於て、主たることを。二五 蓋夫ある婦は、律法に由りて、生ける夫に繋かれたり、夫死すれ

ば彼は夫の法より釋かる。故に若し夫の生ける時他人に適かば淫婦と稱へらる然れども夫死すれば彼は法より釋かれて他人に適くさば淫婦ならず。我が兄弟も爾等も是くの如く、ハリストスの身に由りて律法の爲に死せり他の者即死より復活せし者に適きて我等神の爲に果を結ばん爲なり。蓋我等が肉に在りし時律法に由れる罪の愆は我等の肢體に動きて死の爲に果を結べり。然れども今我等を繋ぎし律法の爲に死して我等此より釋かれたり文の愆に由らず神の新なるに由りて、罪に事へん爲なり。然らば何をか言はん律法は罪なるか。非らず。乃律法に由らざれば、我罪を織らざりしならん。蓋律法懲する勿れさばされば我罪を織らざりしならん。然るに罪は誠の機に乗じて、我の中に緒の愆を生ぜり蓋律法なければ罪は死せる者なり。我昔律法なくして生きたり然れども誠の來りし時罪は生きて、一我は死せり斯く生命の爲に與へられたる誠は我に死を施せり。二罪は誠の機に乗じて、我を勝ひ之を以て我を殺せり。三故に律法は聖なり誠も亦聖なり義なり善なり。一然らば善なる者は我に死を致し、非らず。乃罪は罪と顯れん爲に善なる者を以

て我に死を致せり、誠に山りて罪の極めて罪なる者と爲らん爲なり。一四 蓋我等知る、律法は神に屬し、我は肉に屬して、罪の下に賣られたり。一五 夫れ我が行ふ所は、我之を知らず、蓋我が欲する所は、我之を行はず、我が惡む所は、我之を行ふ。一六 若し我欲せざる所を行はば、乃律法の善なるを證す。一七 然らば之を行ふ者は既に我に非ず、乃我の裏に居る罪なり。一八 蓋我知る善は我の裏、即我が肉の裏に居らず、蓋善を欲すること、我に在れども、之を行ふことを得ず。一九 我が欲する所の善は、之を行はず、我が欲せざる所の惡は、之を行ふ。二〇 若し我欲せざる所を行はば、之を行ふ者は既に我に非ず、乃我の裏に居る罪なり。二一 故に我此の法を觀る、我善を行はんと欲する時、惡は我の前に伏す。二三 蓋我は内なる人に由りて、神の律法を悦ぶ。二四 然れども、我が肢體の中に他の律法在りて、我が智慧の律法と戰ひ、我を我が肢體の中に在る罪の律法の擧と爲すを見る。二五 噫、我は困苦の人なる哉、誰か我を此の死の體より救はん。二六 我が神に感謝す、イエススハリストス、我等の主、に因りてなり。是くの如く、我自ら我が智慧を以て、神の律法に服じ、亦肉を以て、罪の律法に服す。

第八卷

故に今ハリス

ストス

イエス

スに在りて

肉に從はず

乃神に從ひて

行ふ者

には、一も定罪なし。二

死の律法より釋きたり。三 盜肉に縁りて弱みたる律法は力なかりしが故に、神は其子

を罪の肉の形を以て、罪の爲に遣して肉に於て罪を定罪せり。四 律法の義は、我等肉に

從ふに非ず、乃神に從ひて行ふ者の中に成就せん爲なり。五 盜肉に從ふ者は肉の

事を念ひ、神に從ふ者は神の事を念ふ。六 肉の念は死なり、神の念は生命なり、平安なり。

七 盜肉の念は神に對して仇なり、神の律法に服せず、且服する能はざればなり。八 故

に肉に在る者は神の悦を爲す能はず。然れども、爾等は若し神の神宿等の中に居ら

ば、肉に在らず、乃神に在り。若し人ハリストスの神を有たずば、ハリストスに關せず。

一〇 若しハリストス爾等の中に居らば、身は罪の爲に死し、神は義の爲に生く。二 若

しイエスを死より復活せしめし者の神宿等の中に居らば、乃ハリストスを死よ

り復活せしめし者は、爾等の中に居る所の其神を以て、爾等の死すべき身をも生かさ

ん。三 故に兄弟よ、我等は肉に信ありて、肉に從ひて居るべき者に非ず。一 盜 爾等

若し肉に從ひて居らば死なん若し神を以て身の行爲を殺さば生きん。一四凡そ神の神に導かる、者は神の子なればなり。一五爾等は奴たる神仍懼を懐く者を受けたるに非ず、乃子たる神我等が之に由りて「アウラ」父と呼ぶ者を受けたり。一六此の神自ら我等の神と偕に我等が神の子たるを證す。一七若し子たらば嗣たり、即神の嗣、ハリストスと共に嗣たるなり、此れ若し我等彼と偕に苦しまば亦彼と偕に榮せられん爲なり。一八蓋我意ふに、今の時の苦は、我等の中に顯れんとする光榮に比ぶるに足らず。一九夫れ受造物は甚慕ひて神の諸子の顯を俟つ。二〇蓋受造物の盛しきに服せしは、其欲する所に由るに非ず、乃之を服せしめし者に由れり、而して仍慕あり、二一即受造物、自も亦敗壞の奴より釋かれて神の諸子の光榮の自由に入らんこそ是なり。二二蓋我等知る、凡の受造物は今に至るまで共に歡き、共に苦しむ、二三第此のみならず、乃我等神の初實の果を有つ者も、中心に歡きて、子と爲ること、即我等の身の贖を俟つ。二四蓋我等が救を獲たるは、忍に在り、忍は之を見る時既に忍に非ず、人若し之を見れば、豈猶忍まんや。二五然れども我等若し見ざる所を忍まば、忍耐し

て之を俟つ。二六 神も亦我等の弱きを助く蓋我等は宜しきに合ひて何を求むべきを
 知らず然れども神自ら言ふ可からざる氣息を以て我等の爲に求む。二七 而して心を
 察する者は神の意を知る彼は神の旨に遵ひて聖徒の爲に求むればなり。二八 且我等
 知る神を愛する者其旨に依りて召されたる者には凡の事彼等を助けて善に進まし
 む。二九 蓋神は預知せし者は之を預定して其子の狀に效はしむ子が衆くの兄弟の中
 に冢于たらん爲なり。三〇 彼は預定せし者は亦之を召し召しし者は亦之を義と爲し
 義と爲しし者は亦之を榮せり。三一 然らば我等此に於て何をか言はん。若し神我等を
 佑けば誰か我等に敵せん。三二 己の子を惜まず乃我等衆人の爲に彼を付しし者は
 豈亦彼と偕に一切を我等に賜はさらんや。三三 誰か神の選びたる者を訟へん神は彼
 等を義と爲すなり。三四 誰か罪せんハリストスイエスは死せり而して又復活せり
 彼は神の右に在り彼は我等の爲に求む。三五 誰か我等を神の愛より離さん或は憂患
 或は困苦或は窘逐或は飢餓或は裸體或は艱危或は刀劍なるか。三六 録されしが如し
 云く用の爲に我等毎日殺され人の我等を視るこも居に定められたる羊の如しと。三

然れども我等を愛する者に頼りて我等悉く此等の事に勝ちて餘あり。三ハリ
 我爲く信す死も生命も天使も首領も能力も現在も未來も、高さも深さも他の何
 の受造物も我等をハリストスイイス我が主に頼る神の愛より離すこと能はず。

第四節

一

我ハリストスに在りて眞を言ひて謊らす我が良心は聖神に在りて我に
 之を離す、我に大なる愛我が心に已まざる痛あり、蓋我は我が兄弟肉に依る我が

親族即イズライリ人の爲には自らハリストスより絶たれんことを或は願ふな

り。彼等に子たる事光榮盟約律法禮儀許約は屬し、彼等に列祖は屬し、ハリストス

も肉體に由りて彼等より出でたり即萬有の上にある神世世に亂散せらるゝ者なり、

「アミン」然れども此れ神の旨の廢れたり云ふに非ず蓋イズライリよりする者

は盡くイズライリたるには非ず、亦アララムの裔よりするに由りて盡く其子た

るには非ず、乃言へるあり、イサクに在りて附の裔と稱へられんこと。是れ即肉體の

子は神の子たるに非ず惟許約の子は裔とせらるゝなり。蓋許約の旨は此くの如し、

此の期に届りて我來らん而してツラに子あらんこと。一〇此のみならず、レツツカも、

我が祖イサクに由りて同時に二子を懐みし時に是くの如きことありき。一 盗二 子未だ生れず未だ善或は悪を爲さざりし時、選ぶ所に於て神の定め行に由らず、乃召す者に由りて成らん爲に、二三 彼に謂へることあり、長子は次子に服せしむ。一 録二 然し我は我等をい言はん。神に不義あるか。非らず。一 五 彼はモイセイに謂ふ、我が矜む所の者は之を矜み、我が値む所の者は之を値まん。一 六 是くの如く怒む者に由るに非ず、越る者に由るに非ず、乃矜む所の神に由る。一 七 盜はラサンに謂ふ、我が爾を與し、は特に爾に由りて我が能を顯し、又我が名の全地に傳はらん爲なり。一 八 是くの如く其欲する所の者を矜み、其欲する所の者を顧にす。一 九 然らば爾我に謂はん、彼は何ぞ尙告むる盜執か、彼の旨に逆はん。二〇 嗟、人よ、爾は誰ぞ敢て神に抗言するか、造られし者は之を造りし者に、爾は何ぞ我を新く造りしと言はんか。二一 豈、爾人が同じき塊を以て、一の器を貴き用の爲に、一の器を賤しき用の爲に造るは、粘土の上に權あるに非ずや。二三 若し神は其怒を彰し、其能を示さん、欲して、滅に備はりたる怒の器を、大なる恒忍を以て

忍び、二三又光榮に預備せし矜恤の器、二四即我等彼がイカテヤ人のみならず異邦人
 の中よりも召し、者に其光榮の豊なるを示さんさせば、何ぞや。二五彼がオシヤの書
 にも言ふが如し、云く我は我が民に非りし者を我が民と稱へ愛せられざりし者を愛
 せらるゝ者と稱へん。二六又曾て彼等に爾等が我が民に非ずと言はれし處に、彼處に
 は彼等活ける神の子と稱へられん。二七イサイヤもイスラエルの事を呼びて曰く、
 イスラエルの子の数は海の沙の如くなれども、唯遺餘は教はれん。二八盗主は事を終
 へ、義に遂びて之を斷ぜん、斷じたる事を地に行はん。二九又イサイヤの預言せしが如
 し、云く若し主サワオア我等に裔を遺さざりしならば、我等はソドムに似、ゴモラの如
 くなりしならん。三〇然らば我等何をか言はん、義を追はざる異邦人は、義即信に由
 る義を得たり。三一然れども義の律法を追ふイスラエリは、義の律法に及ばざりき。三二
 何の故ぞ信に由らずして、律法の行に由りたればなり、蓋、賤の石に踏きたり、三三
 踏されしが如し、云く視よ、我賤の石、賤の餘をシオンに置く、凡そ彼を信する者は、義を
 得ざらん。

第一卷

兄弟よ、我がイスラエリの爲に心に願ふ所と神に請ふ所とは其救を得るに在り。二

盗我彼等の爲に証を作す彼等は神に於ける熱心あり然れども智識に奮ふに非ず。三

盗律法の終はかりストスなり凡の信する者義させらるゝを致す。五

律法に由る義を指して録せり之を行ひし人は之に由りて生きん。六

由る義は斯く云く爾の心に言ふ勿れ孰か天に升らん即ハリストスを降さん爲なり。七

或は孰か淵に下らん即ハリストスを死より上せん爲なり。八

然るに書は何をか言ふ言は爾に近し爾の口に在り爾の心に在り是れ即信の言我等が傳ふる所の者なり。九

盗若し爾の口に主イエスを承け認め爾の心に神が彼を死より復活せしめしこゝを信せば則救はれん。一〇

盗人心を以て信じて義させらるゝを致し口を以て承け認めて救はるゝを致す。一一

盗書に云く凡そ彼を信する者は差を得ざらん。一二

イウテヤ人ミヨリン人ミは區別なし盗來人の主は同一なり凡そ彼を願ふ者の爲に豊盛なる者なり。一三

盗凡そ主の名を願ふ者は救はれん。一四

然れども未だ信ぜざる

者ものを如何いかにして罰よを得えん未いまだ聞きかざる者ものを如何いかにして償しんするを得えん償つたふる者ものな
 くば如何いかにして聞きくを得えん、一五若もしし使つかを奉ほうぜずば如何いかにして償つたふるを得えん録しるされ
 しが如ごとし云いく不安へいあんを福音ふくいんし、録しる事を福音ふくいんする者ものの足あしは美うらはしき哉かな。一六償つたふる者ものに聴き
 従したがふには非あらず。蓋りだしイサイヤ云いは、主しゆよ誰たれか我われ等らより聞きしことを償しんじたること。一七是しかく
 の如ごとし償しんは聞きくことに由より聞きく所ところは、録しるの音こゑに由よる。一八然しかれども我われ曰いふ、彼かれ等ら豈あに聞きかざり
 しか。然しからず。其その聲こゑは全ぜん地に傳つたはり其その言ことばは地ちの極はてに至いたり。一九又また曰いふ、イスラエリ人ひとに
 らざりしか。初はじめにモイセイ云いは、我われは民たみに非あらざる者ものを以もつて爾等なんぢらを嫉ねたましめ、無む知ちなる民たみを
 以もつて爾等なんぢらを怒いからしめんこと。二〇イサイヤは毅然きぜんとして云いは、我われを尋たづねざる者ものには我遇われあ
 ひ、我われを問こはざる者ものには我顯われあらはたり。二一又またイスラエリを指さして云いは、我終日われしゅうじつ我が手てを
 順したがはずして、頑かたなる民たみに伸のべたりこと。

第二十三章 是こゝの故ゆゑに我曰われいふ、神かみは其民そのたみを棄すてしこと。非しからず。蓋りだし我も亦またイスラエリ人じんに
 して、アツラムの裔えい、アブミンの支派しはいに屬ぞくす。二神かみは其預知そのよちせし所ところの民たみを棄すてざり
 しか。爾等なんぢら豈あに聖せい書しょがイリヤの事ことを言いふことを知らずや、即すなはち彼かれはイスラエリを神かみに認うづつたへて曰いふ、

三、主よ、彼等は皆の預言者を殺し、爾の祭壇を毀てり、我獨遺りしに、彼等は我が生命をも取らんぞ謀る。然れども神の應は何を、彼に言ふ、我已の爲に七千人を遣せり、アルの前に膝を屈めざりし者なり。是の如く今の時にも、恩寵の選に依りて、遣れる者あり。然れども若し恩寵に由らば、則功に由らず、否らされば、恩寵は既に恩寵ならず。若し功に由らば、則此れ恩寵に非ず、否らされば、功は既に功に非ず。然らば何ぞや、イスライリは求むる所を得ざりき、選ばれたる者は之を得て、其餘の者は預になり、録されしが、如し云く、神は彼等に曠野の心見ざる目開かざる耳を與へて、今日に至れり。ルダワドも亦云く、願はくは彼等の席は網と爲り、機と爲り、穢と爲りて、彼等に報を爲さん。一、願はくは彼等の目は昏みて、見るを得ず、彼等の背は常に風まん。二、故に我曰ふ、彼等の腹きは倒れん爲なるか、非らず。然れども、彼等の腹に由りて、救は異邦人に及べり、彼等を嫉ましめん爲なり。三、若し彼等の腹は世界の富と爲り、彼等の乏しきは異邦人の富と爲らば、況や彼等の充満をや。一、我、爾等異邦人に言ふ、我は異邦人の使徒として、我が職を榮す。二、或は如何にしてか、我が骨肉の親屬

の城を起して其中の或者を救ふを得ん。一五 盜若し彼等の聚てらるゝことが世界の
 復和を爲らば彼等の納れらるゝことば死よりする生命に非ずして何ぞや。一六 若し
 初獲聖ならば全園も亦然り若し根聖ならば枝も亦然り。一七 若し或枝は折られ爾野
 の橄欖たる者其中に接がれて橄欖の根と汁とに與る者さ爲りたらば。一八 枝に對し
 て誇る勿れ若し誇らば爾は根を保つに非ずして根は爾を保つを思へ。一九 爾曰はん
 枝の折られたるは我が接がれん爲なりき。二〇 蓋し彼等は不信に由りて折られ爾は
 信に由りて立てり高ぶる勿れ乃懼れよ。二一 蓋神若し本性の枝を惜まざりしなら
 ば爾をも亦惜まざらん。二三 故に神の慈と嚴しきとを觀よ、即 躓きし者には嚴し
 きなり爾若し神の慈に止らば爾には慈なり否らずば爾も折り離されん。二四 彼等
 も亦若し不信に止まらずば接がれん神は復彼等を接ぐを能すればなり。二五 蓋若し
 爾本性の野の橄欖より折られ本性に反して嘉き橄欖に接がれしならば況や是の本
 性の者が木の橄欖に接がれんをや。二六 兄弟よ、蓋我爾等が此の奧義を知らざるを
 欲せず爾等が己を待みて智なりさせざらん爲なり、即 頑なる心がイスラエルの機

分にか及びしは、異邦人の猪数の入る時に至らんのみ。二六かここく、斯く悉くのイズライリは
 救はれん、除されしが如し、云く、救ふ者はシオンより來りて、不虔をイアコフより退け
 ん。二七か、我が彼等の罪を除かん時、我が彼等と立つる所の約は、乃此なり。二八か、
 昔に對しては、彼等は爾等に縁りて敵なり、遂に對しては、先祖に縁りて愛せらるゝ者
 なり。二九か、盜神の賜を召さば易らざるなり。三〇か、昔、爾等神に願ならざりしが、今彼
 等の不順に由りて、矜恤を得しが如く、三一か、斯く彼等も、今爾等が矜恤を得ん爲に、不順
 なり、自ら後に矜恤を得ん爲なり。三二か、盜神は衆人を不順の中に閉せり、衆人に矜恤
 を施さん爲なり。三三か、嗚呼、深い哉、神の富と智慧と知識と、其定は如何に測り難く、其道
 は如何に究め難き。三四か、盜神の主の智慧を知りたる、或は孰か彼と共に議る者たりし、
 三五か、抑孰か先づ彼に與へて、其報を受くべき。三六か、盜、萬物は彼に本づき、彼に倚り、
 彼に屬す。光榮は彼に世世に歸す、「アミン」。
 故に兄弟よ、我神の慈憐を以て、爾等に求む、爾等の身を清ける聖なる祭、
 神に悦ばるゝ者として、獻げて、爾等の靈智なる役を爲せ、且此の世に救ふ勿れ、乃

爾等が憤怒の類なるを以て自ら變化せし神の善にして悦ぶべき純全なる旨の何たるを辨へん爲なり。三我に與へられし恩寵に辨りて我爾等各人に言ふ思ふべき所に過ぎて己の事を思ふ勿れ。乃縁通を以て辨が各人に頌ちたる信の量に循ひて思へ。四我等には一の體に多くの肢あり而して肢皆其用を同じくせざるが如く、斯く我等多くの者は、ハリストスに於て一の體にして、各互に肢なり。我等に與へられし恩寵に依りて我等賜を得ること齊しからざるが故に、預言を得ば信の度に依りて預言せよ、役事を得ば、役事に居れ、效ふる者ならば、效べよ、勸慰を爲す者ならば、勸慰を爲せ、施す者は、朴直にして施せ、理むる者は、心を竭くして理めよ、矜恤を爲す者は、歡びて矜めよ、愛は偽なかるべし、惡を惡み、善を親め、一兄弟の愛を以て相愛し、爾等を以て相愛れ。二勸に惑る勿れ、神を敬せ、主に事へよ。三怒を以て喜べ、患難に遇ひて忍べ、所轄に恒なれ。一聖徒の循むる所に供せよ、務めて、遠人を迎へよ。二爾等を發送する者を祝福せよ、祝福して、組ふ勿れ。一喜ぶ者と共に喜べ、哭く者と共に哭け。一六相互に意を同じくせよ、思を高きに營する勿れ、乃謙卑に順へ己を以て智なり。

とす勿れ。一七なんびと。何人にも悪を以て悪に報ゆる勿れ。務めて衆人の前に善なる事を爲せ。一八若し能くすべくば、爾等の力を竭して衆人と相和せよ。一九至愛の者よ己の讎を復す勿れ。乃退きて神の怒を待て。蓋縁して云へるあり。主曰く、讎を復すは我に在り。我報いんこ。二〇ゆえ。故に若し爾の敵仇をば、之に食せ。若し渴かば、之に飲ませよ。蓋爾は之を行ひて、蒸炭を其首に集むるなり。二一悪に勝たる、勿れ。乃善を以て悪に勝て。

凡の人は上に在る權に服すべし。蓋神よりせざる權なし。有る所の權は神より立てられたるなり。故に權に服せざる者は神の命に逆ふなり。逆ふ者は自ら其罪を定む。有司の畏るべきは善き行の爲に非ず。乃惡しき行の爲なり。爾權を乗る者を畏れざらんことを欲するか。善を行へ。然らば彼より獲ん。蓋彼は神の僕にして、爾の益の爲に立てられたり。然るに爾若し惡を行はば、畏れよ。蓋彼が劍を佩ぶるは徒然ならず。彼は神の僕にして、怒を以て惡を行ふ人に報ゆる者なり。故に服すべきは、惟怒の爲のみならず。乃良心に縁るなり。爾等此が爲に税をも納む。蓋彼等は神の役者にして、常に此の職に居るなり。故に各人に與ふべき所を與へよ。税すべ

きには税し買すべきには買し畏るべきには畏れ敬ふべきには敬へ。何人にも何を
 も負ふ勿れ唯相愛するを以て償ひを爲せ蓋人を愛する者は律法を盡すなり。蓋淫す
 る毋れ殺す毋れ姦む毋れ妄證する毋れ食する毋れ及び其他の事は皆此の言の中に包
 れり曰く爾の罪を愛するこそ己の如くせよ。一〇 愛は罪に惡を爲さず故に愛は律
 法を盡すなり。一一 斯く行ふべし今は我等が罪より解むる時既に至りしを知らばな
 り蓋今は我等が初めて信じし時に較ぶれば救は更に我等に近し。一二 夜過ぎて晝過
 づけり故に我等昏昧の行を除きて光明の甲を衣るべし。一三 我等晝に在るが如く行
 を美しくすべし蓋淫及び沈溺好色及び邪淫争闘及び嫉妬すべからず。一四 乃爾等は
 我が主イエスハリストスを衣よ肉體の感を怨に變ずる勿れ。

第四節 一 信の弱き者は意見を踏らすして之を納れよ。二 蓋或人は凡の物食ふべ

しと信じ弱き者は野菜を食ふ。三 食ふ者は食はざる者を解る勿れ食はざる者は食ふ
 者を踏する勿れ蓋神は彼を納れたり。四 爾は何人にして他人の俛を踏するか彼は己
 の主の前に立ち或は倒る。且彼は立てられん蓋神は之を立つるを能す。或人は此の

日を彼の日より異にし或人は諸日を相同じと爲す。各其良智に順ふべし。日を別つ
者は主の爲に別ち日を別たさる者も主の爲に別たす。食ふ者は主の爲に食ふ。盜竊に
感謝するなり。食はざる者も主の爲に食はず。亦神に感謝するなり。竊我等の中には
己の爲に生くる者なく亦己の爲に死する者なし。卽我等生くるも主の爲に生き
死するも主の爲に死す。故に我等或は生き或は死する。並に主に屬す。九。盜ハリスト
スの死し復活し生きしは特に死せし者と生ける者との主たらんが爲なり。一〇。然る
に爾は何爲れぞ爾の兄弟を讒する。或は爾も亦何爲れぞ爾の兄弟を讒る。我等は皆ハ
リストスの墓前に立たん。一。盜殺せるあり主曰く我ぞ凡の膝は我の前に屈み凡
の舌は神を承け認めん。二。是くの如く我等は各己の事を神に陳べん。三。故に我
等復互に相讒すべからず。爾等兄弟の前に。賊。或は癩を置かざらんことを是れ讒
せよ。一。我は主イエイススハリストスに由りて知り且確に信ず。物は本潔からざるな
し。惟何物か潔からずと意ふ人の爲には此の物潔からざるなり。一。然れども若し爾
の兄弟食の爲に憂へば爾既に愛に順ひて行ふに非ず。ハリストスが爲に死せし者を

爾の食を以て減す勿れ。一六 爾等の善は毀らる可からず。一七 盜神の國は飲食に在らず。乃義と和平と聖神に由る喜に在るなり。一八 此等を以てハリストスに役むる者は神に悦ばれ人に喜せらるゝなり。一九 是を以て我等は和平と互に徳を建つることとを迫ひ求むべし。二〇 食の故を以て神の工を毀つ勿れ。物皆潔し然れども食ひて人を賤かしむる者の爲には惡しきなり。二一 肉を食はず酒を飲まず及び凡そ爾の兄弟を賤かせ或は惑はせ或は弱らしむること爲さざらん。二三 爾信あるか之を己の裏に神の前に存せよ。自ら醉す所に於て己を罪せざる者は福なり。二四 然れども疑ふ者は食へば定期せらる信に由らざるが故なり。凡そ信に由らざることは罪なり。二五 我が福音及びイエスハリストスの教訓に循ひ永世より隠され、今顯されて預言者の書に符ひて永遠の神の命に由りて萬民を信に服せしめん爲に之に知らせられたる奥義の顯示に循ひて爾等を望むること能する。二六 獨一睿智の神に、イエスハリストスに由りて光榮は世世に歸す「アミン」。

【口マ書】

我等強き者は強からざる者の弱きを負ひて己を悦ばしむ可からず。二

我等各其罪を悦ばしめ、善を以て其徳を建つるを致すべし。蓋ハリストスも己
を悦ばしめざりき、乃録されしが如し云く、爾を辱しむる者は我に及べり。凡そ昔
録されし者は、皆我等を罰へん爲に録されたり、我等が忍耐と聖書の慰藉を以て忍
を守らん爲なり。願はくは忍耐と慰藉を施す神は爾等にハリストスイエイスに
循ひて互に意を同じくすること、賜はん、爾等が心を一にし、口を一にして、我が
主イエイスハリストスの父を讃祭せん爲なり。故に爾等相納るゝこと、ハリストス
が神の光榮の爲に爾等を納れしが如くせよ。我言ふ、イエイスハリストスが役者と
爲りしは、御廟の者に於ては神の眞實に由りてなり、先祖に與へし許約を成就せん爲
なり、異邦人に於ては、矜恤に由りてなり、彼等が神を讃祭せん爲なり、録されしが如
し云く、主よ、故に我等を異邦の中に讃め揚げ、爾の名に歌はん。又云く、異邦民よ、彼
の民と偕に樂め。又云く、諸異邦民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。三
イサイヤも亦云く、イマセいの根あらん起きて、異邦民を治め、異邦民は彼を頼まん。一
願はくは、忍を施す神は爾等を偕に由りて、凡の喜と平安とに充たさん、爾等が聖

神の能に縁りて望に望ならん爲なり。一四
 我が兄弟よ我爾等に於ては爾等自も仁
 愛に満ち凡の知識に充てられ互に相訓ふるを能すること能に信す。一五
 然れども
 兄弟よ我が憚る所なく略奪して爾等に送するは物爾等に記念せしめん爲なり是
 れ我に神より與へられたる恩寵に因りてなり。一六
 即我をして異邦民の中にイ
 ススハリストスの役者と爲り神の福音の聖務を行ひて異邦民の禮物が聖神に成聖
 せられて神に悦び納れらるべき者と爲るを致さしむる恩寵なり。一七
 故に神に屬す
 る事に於ては我ハリストスイエイスに由りて誇る可き所あり。一八
 蓋ハリストス
 が我を用ゐて異邦人を信に服せしめん爲に言さるべきを以て。一九
 奇蹟の能神の
 神の能に頼りて行ひし事の外は我一も敢て言はず。ハリストスの福音は我に由りて、
 イエルサリム及び其近傍よりメリクに及ぶまで滿つるに至れり。二〇
 且我が勤め
 て福音せしはハリストスの名の已に稱へられし處に在らず他人の基に建てざらん
 爲なり。二一
 即録されしが如し云く彼の事に於て未だ示を得ざりし者は見ん未だ
 聞かざりし者は悟らん。二二
 此に縁りて我屢阻まれて爾等に語るを得ざりき。二

然れども今既に此の方に斯る處なく、且多年以來我爾等に詣らんことを願へるに
 由りて、^{二四} イスバニヤに赴かん時爾等に至らん。蓋我過ぐる時爾等を見先づ爾等と
 偕にして略満足したる後爾等が我を彼處に送らんことを認む。^{二五} 然れども今我聖
 徒に供事せん爲にイエルサリムに往く。^{二六} 蓋マケドニヤ及びアハイヤはイエル
 サリムの聖徒の賢者に或る供給を爲さんことを喜せり。^{二七} 是を爲すを喜せり、
 且新く爲す貢あり。蓋異邦人既に彼等の屬神の事に與る者となりたれば、乃身に屬す
 る事に於て彼等にも亦供せざるべからず。^{二八} 故に我此の事を舉へ、爾に此の果を彼
 等に付して後爾等に寄りてイスバニヤに往かん。^{二九} 我知る爾等に至らん時ハリス
 トスの福音の滿ちたる祝福を以て至らんことを。^{三〇} 兄弟よ、我等の主イエスハリス
 トスに緣り、又聖神の愛に緣りて、我爾等に求む、我と共に力を竭くして我が爲に神
 に祈れ。^{三一} 我がイウテヤに在る不信者より拯はれ、且我がイエルサリムに於ける供
 事の聖徒に悦び納れらるべき者と爲らん爲。^{三二} 又我が神の旨に留ひ、歡びて爾等に
 詣り、爾等と偕に安息を得ん爲なり。^{三三} 願はくは平安の神は爾等衆人と偕に在らん

ことを「アミン」。

第二節 我爾等に我等の姉妹ケンフレアに在る教會の女執事たるスワを薦む。

爾等主に縁りて、聖徒に宜しき所の如く彼を接け其爾等に薦むる所あらば彼に助

けよ蓋彼も多くの者を助け亦我をも助けたり。請ふプリズキヲ及びアキラに安を

問へ、即ハリストスイニスに於て我の同勞者、我が生命の爲に其頭を置きし者我

のみならず凡そ異邦人の諸教會が感謝する所の者なり、又其家の教會に安を問へ。

我が至愛なるエベチトハリストスの爲にアハイヤの初實の果たる者に安を問へ。

我等の爲に多く勞せしマリウムに安を問へ。セアンドロニク及びユニヤに安を問へ。

即ち我の親族我と偕に囚たりし者諸使徒の中に名ある者我に先だちてハリストス

を信ぜし者なり。主に於て我が愛する所のアムプリーに安を問へ。ハリストスに

於て我等の同勞者たるウルバン及び我が至愛なるスタヒイに安を問へ。ハリ

トスに於て熟練なるアヘルレスに安を問へ。プリストウルの家の者に安を問へ。二

我が親族イロテチンに安を問へ。ナルキスの家の主を信する者に安を問へ。二三主の

爲に勞するトリスマナ及びトリスマサに安を問へ。至愛なるヘルシダ主の爲に多く勞せし者に安を問へ。一三 主に於て選ばれたるルフ及び彼亦我の母に安を問へ。一四 アシシクリト、ブレゴント、エルム、パトロフ、エルミイ及び彼等と倍に在る諸兄弟に安を問へ。一五 フロロケ及びユリヤ、ニレイ及び其姉妹、又チャリンバン及び彼等と倍に在る諸聖徒に安を問へ。一六 聖なる接吻を以て互に安を問へ。ハリストスの諸教會は爾等の安を問ふ。一七 兄弟よ、我爾等に求む爾等が學びたる故に反して、分争と誘惑とを爲す者を注視して之を避けよ。一八 盜此くの如き者は我等の主イエスハリストスに事へずして己の腹に事へ、巧言細語を以て賢朴なる者の心を欺く。一九 爾等の順従は衆に聞わたり、故に我爾等の爲に喜ぶ惟願ふ爾等善に智にして、恐に惡ならんことを。二〇 平安の神は速にサタナを爾等の足下に倒さん。願はくは我等の主イエスハリストスの恩寵は爾等と倍に在らんことを「アミン」。

二 我の同勞者ヲモスイ及び我の親族ルキイ、イブソシ、ソシバトル、爾等の安を問ふ。二三 我タルヲイ此の書を筆せし者は主に於て爾等の安を問ふ。二四 我と全教會との旅館主ガイ爾等の安を問ふ。邑の司

庫づかま エラストおえ 及びけいてい 兄弟クワルト 用符なんぢら の安あん を問こ ふ。 二四は 願ねが はくは我等われら の主しゅ イエススハリ ストスおんちよう の恩寵なんぢら は用符しやうけん 衆人ごら と倍あ に在あ りんこ こを「アミン」。

聖使徒パウロがコリント人に達する前書

【第一】 パウル、神の言に由りて召されたるイエススハリストスの使徒及び兄弟
リススンは、書して、コリントに在る神の教會、即ハリストスイエススに於て成聖
せられし召されたる聖徒及び悉くの人何の處に在りても、我等の主イエススハリス
トス唯我等のみならず亦彼等の主の名を顯ぶ者に達す。願はくは恩寵と平安とは、
神我等の父及び主イエススハリストスより爾等に賜はらんことを。我恒に爾等の
爲に我が神に感謝す。ハリストスイエススに於て爾等に與へられたる神の恩寵に縁
りてなり。蓋爾等は彼に於て凡の事、即凡の言と凡の知識に富める者と爲りた
り、ハリストスの贖罪等の中に堅められしに因る。故に爾等は一の賜にも映くる
なくして、我等の主イエススハリストスの顯現を俟つ。彼は爾等を終に至るまで堅
めん、爾等が我等の主イエススハリストスの日に於て賞なからん爲なり。爾等を召
して、其子イエススハリストス我等の主と共に與せしめたる神は倍なり。兄弟よ、我

等の主イエスハリストスの名に由りて我爾等に求む爾等皆言ふ所を同じくし且
 爾等の中に分争なく乃爾等心を一にし意を一にして相合ふべし。一 盗我が兄弟
 爾等に就きてハロヤの家人より我に爾等の中に争のあることを告げられたり。一
 二 我が言ふ所は即爾等各言へるあり我はバアルに屬す我はアポロスに屬す我
 はキスに屬す我はハリストスに屬す。一三 豈ハリストスは分れしか豈バアルは爾
 等の爲に十字架に釘せられしか抑爾等はバアルの名に藉りて洗を受けしか。一四
 神に感謝す我はクリスプ及びガイの外爾等の中誰にも洗を授けしことなし。一五 人
 或は我は我が名に藉りて洗を授けたりと言はざらん爲なり。一六 我亦ステランの家
 に洗を授けたり此の外何人に授けたりや否やを知らず。一七 蓋ハリストスの我を
 遣しは洗を授けん爲に非ず乃福音を傳へん爲なり又言の智慧を用ひしめずハ
 リストスの十字架の虚しくならざらん爲なり。一八 蓋十字架の言は滅ぶる者の爲に
 は愚なり我等救はる者の爲には神の能なり。一九 蓋録して云へるあり我智者の智
 を滅し識者の識を廢せん。二〇 智者は安にか在る士は安にか在る此の世の辯論者

は安にか在る神は此の世の智慧を愚と爲らしめしに非ずや。二一七 蓋世は其智慧を以て神の智慧に於て識らざりしに由りて神は傳道の愚を以て信する者を救はんことを喜べり。二一八 蓋 イウテヤ人は休徴を乞ひ、クリン人は智慧を覓む。二一九 然れども我等は十字架に釘せられしハリストスを傳ふ此れイウテヤ人の爲には、クリン人の爲には愚、惟召されたる者の爲にはイウテヤ人及びクリン人を論ぜず、ハリストスは神の能及び神の智慧なり。二二〇 蓋神の愚は人の智慧に過ぎ、神の弱は人の強に過ぎ。二二一 兄弟よ、爾等召されたる者の如何なる人たるを觀よ、肉に循ひて智慧ある者多からず、能ある者多からず、貧乏者多からず。二二二 然れども神は世の愚なる者を選べり、智なる者を愧しめん爲なり、神は世の弱き者を選べり、強き者を愧しめん爲なり。二二三 神は世の賤しき者、賤んぜらるゝ者有るなきが如き者を選べり、有る者を廢せん爲なり。二二四 此れ凡の肉が神の前に誇らざらん爲なり。二二五 爾等は神よりす、パリストスイイスに在りてなり、蓋ハリストスは我等の爲に神に由る智慧と爲り、義及び成聖と爲り、願と爲れり。二二六 蓋して誇る者は主を以て誇るべしと云へるが如くな

らん爲なり。

第三節 一兄弟よ、我が嘗て爾等に至りしは爾等に言或は智慧の勝れたるを以て神の體を傳へん爲に至りしに非ず。蓋我爾等の中に在りて、イエススハリストス且其十字架に釘せられし事の外は何をも知らざらんことを定めたり。我且爾等と併にせし時弱に居り懼に居り多くの職係に居りたり。又我が首ひし所我が傳へし所は人の智慧の感動せしむる言を以てせずして神の能の顯示を以てせり。爾等の信が人の智慧に由らずして神の能に由らん爲なり。然れども我等は智慧を練達者の串に穿る。惟斯の世の智慧亦斯の世の過ぎ易き有司の智慧に非ず。乃神の奥妙にして秘密なる智慧を顯る神が世の先より我等の光榮の爲に預定せし者、斯の世の有司の一も識らざりし者なり。蓋彼等若し之を識りしならば光榮の主を十字架に釘せざりしならん。然れども録して云へるが如し神が彼を愛する者の爲に備へし事は、目未だ見ず耳未だ聞かず人の心に未だ入らず。一唯我等には神己の神を以て之を顯せり。蓋神は察せざる所なし神の深きをも察するなり。蓋人の事は、人

の内に居る神の外、人誰か之を知らん、是くの如く神の事は神の神の外之を知る者なし。二三、然れども我等は斯の世の神を受けしに非ず、乃神よりする神を受けたり、神より我等に賜はりし事を知らん爲なり。一三、且我等斯の事を語るに、人の智慧の教ふる所の言を以てせずして、聖神の教ふる所を以てし、神に属する言を以て神に属する事に當つるなり。一四、蓋に属する人は神の神の事を受けず、其彼の爲に愚たるが故なり、且之を盡る能はず、蓋此れ神に由りて度らるゝなり。一五、然れども神に属する人は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず。一六、蓋誰か主の智慧を知りて、之を踏するを得ん、我等に在りては、ハリストスの智慧を有てり。

第二三章 兄弟よ、我も爾等に語りしこと、神に属する者に於けるが如くするを得ずして、肉に属する者に於けるが如く、ハリストスに在る赤子に於けるが如くせり。二、我等を養ふに乳を以てして、糧を以てせざりき、蓋爾等之を受くる能はざりき、今も亦能はず、爾等尙肉に属すればなり。蓋爾等の中に、姉妹と争闘と分離とあれば、爾等は肉に属し、人に循ひて行ふに非ずや。蓋一は我マアルに属すと誓ひ、他は我マカ

ロスに屬す言ふ時は爾等肉に屬するに非ずや。パウロは誰たるアガロスは誰たる。彼等は役者のみ、主の彼等各人に與へし所に隨ひて、爾等が信を得ることに勤めし者なり。我は種まアガロスは蒔けり然れども神は長ぜしめたり。故に種うる者も蒔ぐ者も何か有らん惟長ぜしむる神に在り。種うる者及び蒔ぐ者は一なり然れども各己の勞に循ひて其値を得ん。蓋我等は神の同勞者なり爾等は神の耕へし所の田、神の建つる所の屋なり。我は神より我に與へられし恩寵に循ひて、智なる工師の如く基を置けり、他人は其上に建つ然れども各如何に建つるかを慎め。一、蓋置かれたる基なるイイススハリストスの外誰も他の基を置く能はず。二、人若し斯の基の上に金、銀、寶石、木、草、稈を以て建てば、一、各人の工は顯れん、夫の日は之を表さん、さすればなり、蓋火に因りて明ならん、火は各人の工の如何なるを試みん。一、若し人の建てし所の工存せば値を得ん。一、若し其工焚けば損を受けん、然れども己は火より脱るゝが如く救はれん。一、爾等豈知らずや、爾等は神の殿にして、神の神爾等の中に居ることな。一、若し人神の殿を毀たば神は彼を毀たん、蓋神の殿は聖なり、此の殿

は爾等なり。一八何人も自ら欺く勿れ若し爾等の中に斯の世に於て智なりと意ふ者あらば、智と爲らん爲に愚と爲るべし。一九此の世の智慧は神の前に愚なればなり。蓋して云く、彼は智者を其陰計の中に拘ふ。二〇又云く、主は智者の思念の盡しきを知る。二一故に誰も人を以て誇と爲す勿れ。蓋若爾等に屬す。二三或はパウロ或はアポロ、或はキル、或は世界、或は生命、或は死、或は現在、或は未來、皆爾等に屬す。二四爾等はハリストスに屬し、ハリストスは神に屬す。

第四章

一 人我等を以て、ハリストスの使者、神の機密の家宰と爲すべし。二 家宰に求むる所は、其思ならんことなり。三 我は爾等、或は他人が如何にか、我を度るを極めて小

き事と爲す、我自らも己を度らす。四 蓋我は内に貧みて貧む可きなし。雖此を以て發せせられず、我を度る者は主なり。五 故に爾等時未だ至らざる間は、何事も議判せずして、主の來るを待て、彼は幽暗に隠れたる事を照し心の謀を顯さん。其時各、辨り察を得ん。六 兄弟よ、我は爾等の爲に、此を以て己及びアポロに擬へたり。爾等が録されし所に過ぎて思ひ議らざることを、我等に學ばん爲、又各相駭らさらん爲なり。

七 誰か爾を異にする。爾は何の未だ受けざりし者を有つか。若し受けしならば何ぞ
 受けざりし者の如く誇る。ハ爾等已に飽き足れり。爾等已に富めり。爾等は我等と僭に
 せずして王と爲れり。嗚呼。願はくは爾等の實に王たらんことを、我等も爾等と僭に王
 たらん爲なり。蓋我意ふに、神は我等使徒を未なる者と爲して、死に定められたる者
 の如く顯せり。我等は世界の爲、天使等及び人人の爲に、觀玩と爲りたればなり。一〇 我
 等はハリストスに因りて愚なり。爾等はハリストスに於て智なり。我等は弱く、爾等は
 強し。爾等は祭を享け、我等は辱に處るなり。二 今に迄るまで我等は飢ゑ、渴き、裸體に
 なり、撻たれ、定めり居る處なく、三 勞して手づから工を作す。我等罵られては觀福し、答
 返せられては忍び、四 謗られては諍る。我等は世の汚穢の如く、衆の踐む所の塵垢の
 如くせられて今に至れり。五 我は爾等を愧しめんと欲して、此を書するに非ず。乃我
 が愛する所の子の如く、爾等を罰ふるなり。六 蓋爾等には、ハリストスに於て福音を以て、爾等を生
 師傳あり。七 多くの父あるなし。我ハリストスイイススに於て福音を以て、爾等を生
 みたればなり。八 故に我等等に求む。我に救ひて、我のハリストスに於けるが如くせ

よ。一七これ 此に縁りて我爾等に我が至愛にして主に於て忠なる子ヲモスイを遣せり彼
は爾等に我がハリストスに於ける諸道即我が徧く各教會に教ふる事の如何を記念
せしめん。一八われ等々に往かざるに因りて爾等の中の或者は誇れり。一九然れども主
の旨に適はば我速に爾等に至らん而して誇る者の言に非ず乃其能を試みん。二〇
靈神の國は言に在らず乃能に在り。二一爾等何を欲する我杖を以て爾等に臨ま
んか抑愛の溫柔の神を以てせんか。

第四章

一 確に聞ゆ爾等の中に淫行あり異邦人の中にも言はざる所の淫行なり即
或者其父の妻を有てるなり。二 爾等誇りて尙痛哭せず此の事を行ひし者の爾等の中
より餘かるゝを致さるるか。三 然れども我は肉體を以て爾等の中に在らずと雖神

を以て在りて彼處に居るが如く斯る事を行ひし者を我等の主イエスハリスト
スの名に於て爾等及び我の神は會して我等の主イエスハリストスの能に頼りて
已にサタナに付さんこを定めたり其肉體の憫され其神の我等の主イエスハ
リストスの日に於て救はれん爲なり。爾等の矜誇は善からざるなり。豈知らずや僅

なる酔は盛くの波を醸くするを。故に爾等弱き酔を除き、新なる波を醸くならん爲
なり。爾等酔なき者なればなり。蓋我等の逾越節羔なるハリストスは我等の爲に幸ら
れたり。然らば我等親ふに、弱き酔を以てせず、強き酔を以てせず、乃、潔
淨き眞實きの酔なき餅を以てすべし。我等を爾等に遠して淫行者と交る勿らんこ
こを勧めたり。一〇、然れども、概して此の世の淫行者或は貪婪者或は強奪者或は拜偶
像者を指すには非ず。若し然らば爾等世を出でざるべからず。一、乃、我が世して爾
等に遠せしは若し人兄弟と稱へられて或は淫行者或は貪婪者或は拜偶像者或は強
奪者或は沈溺者或は強奪者たらば、彼と交る勿く、此る者と偕に食ふだに勿らんこ
なり。一、蓋外の者をも擬定するは、我に於て何ぞ與らん、爾等内の者を擬定するに非
ずや。一、外の者は神之を擬定す。故に惡者を爾等の中より除け。一、
顯 爾等の中に相争ふ事ある時、何ぞ敢て不義者の前に訟へて、聖徒の前に於
てせざる。二、爾等豈知らずや、聖徒が世界を審判せんことを。若し世界爾等に審判せら
れんこそば、爾等は小き事を審判するに堪へざるか。三、豈知らずや、我等が天使等を審

判せんことを況や世の事をや。然れども爾等世の事を密判せんとする時は、教會の中にも卑しめらるる者を密判座に坐せしむ。我爾等の愧の爲に曰ふ、爾等の中には、兄弟の間の事を密断するを能する智者もなきか。乃兄弟は兄弟と相訟へ、且此の事を不信者の前に爲すか。爾等相訟ふることをあるは、此れ已に爾等の爲に大なる疵なり。爾等何ぞ辱せられて忍ばざる何ぞ辱損害を受けて耐ふることをせざる。然れども爾等自ら辱し及び損害を爲す、且兄弟に對して之を爲すなり。爾等豈知らずや、不義の者は神の國を閉ぐを得ざらんことを自ら欺く勿れ、凡そ淫行拜偶像、盜竊、淫褻、賣男色、盜竊、貪婪、沈溺、斷斷強奪を爲す者は、神の國を閉ぐを得ず。一、爾等の中に、曾て此くの如き者ありき、然れども我等の主イエスハリストスの名及び我等の神の御を以て洗はれ成聖せられ、義とせられたり。二、凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我に許されたり、然れども其の一も我に主たるべからず。一、食は腹の爲、腹は食の爲なり、然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身の爲なり。一、神は主を復活せしめたり、其能を以て我

等をも復活せしめん。一。豈知らずや、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて淫婦の肢と爲さんか、然すべからず。一。或は知らずや、淫婦に附く者は此れと一體と爲るを、豈云へるあり、二の者は一體と爲らん。一。然れども主に附く者は主と一體と爲るなり。一。淫行を避けよ、凡そ人の行ふ罪は身の外に在り、然れども淫を行ふ者は己の身を犯すなり。一。豈知らずや、爾等の身は爾等の裏に居る聖神、爾等が神より受けし者の殿にして、爾等己に屬するに非るを。一。蓋、爾等は價を以て買はれたり、故に均しく神に屬する、爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

一。爾等が書して我に達せし事に至りては、男は女に觸れざるを善とす。二。然れども淫行を免るゝ爲に、人各其妻を有ち、女各其夫を有つべし。夫は當然の親愛を其妻に與へ、妻も其夫に然すべし。三。妻は己の身に主たるに非ず、乃夫なり、同じく夫も亦己の身に主たるに非ず、乃妻なり。四。互に相違くる勿れ、惟共に意を合せて、密に所屬をなす爲に、暫時なるは可なり、後復相合ふべし、サタナが爾等の情の禁

せざるに乗じて、爾等を誘はざらん爲なり。然れども我が此を言ふは許すなり、命ずるに非ざるなり。蓋我は人皆我の如くならんことを願ふ、然れども各其恩賜を辨より受けたり、一は此の如く、一は彼の如し。我未だ婚姻せざる者及び姪婦に謂ふ、若し我の如くして居らば、彼等に善し。然れども若し自ら制する能はずば、婚姻すべし、蓋婚姻するは慾の熾ゆるに愈れり。一曰に婚姻せし者に命ず、是れ我に非ず、乃主の命なり、妻は夫に離るべからず、一若し離れたらば、嫁がすして居るべし、或は其夫と和ぐべし、夫も亦其妻と別る可からず。一三の者には我之を言ふ、主に非ず、若し兄弟信ぜざる妻を有ち、妻後と偕に居らんことを請はば、之と別るべからず。一三若し妻も信ぜざる夫を有ち、夫後と偕に居らんことを請はば、之と別る可からず。一四若し信ぜざる夫は信する妻に由りて聖にせられ、信ぜざる妻は信する夫に由りて聖にせらる。然らずば、爾等の子女は潔からざらん、今は乃聖なり。一五若し信ぜざる者離れんことを欲せば、離る可し、兄弟或は姉妹は此くの如き事に於て繋がるいなし、神は和平の爲に我等を召したり。一六妻よ、爾焉ぞ夫を救はざるを知らん、或は爾焉ぞ夫を

救はざるを知らん。一七 惟神が各人に預ちし所に循ひ主が各人を召しし所に循ひて行ふべし。我是くの如く諸教會に命す。一八 人已に割禮を受けて召されしか之を廢する勿れ人未だ割禮を受けずして召されしか之を受くる勿れ。一九 割禮は益なく無割禮も益なし唯神の誠を守らんのみ。二〇 各其召されし時に在りし分に止るべし。二一 爾奴僕にして召されしか、慮さ爲す勿れ若し釋さるゝを得とも感之に従へ。二三 蓋主に於て召されたる奴僕は主の自主なる者なり斯く亦自主にして召されたる者は、ハリストスの奴僕なり。二四 爾等は價を以て買はれたり人の奴僕と爲る勿れ。二五 兄弟よ、各其召されし時に在りし分に於て神の前に止るべし。二六 童貞に至りては、我に主の命なし、然れども主に忠ならんこと、矜愍を蒙れる者として、我勸諭を與ふ。二七 今の時の危難に因りて、我此を營とす人斯く居るは善し。二八 爾等に繋かれしか、釋くことを求むる勿れ、妻の繋なきか、妻を求むる勿れ。二九 然れども爾娶ることも、罪を獲ず、亦處女は嫁ぐことも、罪を獲ざらん。惟此くの如き者は、其身雖に遣はん、我之を用等の爲に惜む。三〇 兄弟よ、我爾等に告ぐ時は、已に感れり、故に妻ある者は、無きが如く

し、三〇 哭く者は、三二 哭かざるが如くし、喜ぶ者は、喜ばざるが如くし、買ふ者は、得ざるが如くし。三一 此の世を用ゐる者は、用ゐざるが如くすべし。蓋此の世の形状は、逝ぐるなり。
三二 我は爾等が、慮る所なきを欲す。娶らざる者は、主に屬する事、如何に主を悦ばしめんと欲り、三三 娶りたる者は、世に屬する事、如何に娶を悦ばしめんと欲り。三四
 嫁きたる者と、處女とは別あり、嫁がさる者は、主に屬する事、如何に主を悦ばしめて、身と神との聖なるを得んと欲り、嫁きたる者は、世に屬する事、如何に夫を悦ばしめんと欲る。三五 我之を看ふは、爾等の益の爲にして、爾等に絆を置かんとするに非ず、乃爾等が宜しきに合ひ、紛擾なく、熱心に、主に事へん爲なり。三六 若し、人己の處女の爲に、其年已に買るに及びて、斯く居ること、宜しきに合はず、意はば、其欲する所を行ふべし、罪を獲ざらん、此くの如き者は、嫁ぐべし。三七 然れども、人若し、其心を堅固にし、已むを得ざる事なく、乃其志を爲すに、權ありて、己の處女を守らん、こゝを中心に、決定せば、其行ふ所善し。三八 故に、其處女を嫁がしむる者は、行ふ所善し、嫁がしめざる者は、行ふ所更に善し。三九 娶は、夫の生ける時に於て、法に繋がれたり、然れども、夫死せば、

自由に其欲する所の者に嫁ぐべし。但主に於てすべきのみ。然れども彼若し斯く止らば更に相なり。此れ我の勲驗なり。意ふに我も亦神の神を有てり。

第八節

偶像に獻げし物に至りては、我等知る。蓋我等皆知識あり。然れども知識は

誇を致す。惟愛は徳を建つ。若し人自ら知る意はば、彼は一も知るべき如く知る所

なし。然れども若し人神を愛せば、此の入彼に知られたるなり。故に偶像に獻げし

物を食ふことに至りては、我等知る。偶像は世に虚無にして、惟一の神の外に他の神な

し。蓋 所謂諸神、或は天に或は地に多くの神、多くの主の如き者あり。雖、然れど

も我等には一の神あり。萬物彼自りし我等彼に歸す。又一の主、イエススハリストス

あり。萬物は彼に由り、我等も彼に由る。然れども人皆此くの如き知識あるに非ず。或

者は今に至るまで、偶像を認むる良心ありて、之を偶像に獻げし物として食へば、彼等

の良心は弱きに因りて汚さる。食物は我等を神の前に立たしめず。蓋我等は食ふと

も得る所なく、食はずとも失ふ所なし。然れども慎め、恐らくは此の爾等の自由は弱

き者の眼を爲らん。蓋若し人爾知識ある者が、偶像の廟に坐して食ふを見れば、彼弱

き者の良心は彼にも偶像に獻げし物を食ふを勧めざらんや。一 然らば爾の知識に因りて、弱き兄弟ハリストスの之が爲に死せし所の者ば亡びん。二三 爾等此くの如く兄弟に對して罪を獲、彼等の弱き良心に傷つけて、ハリストスに對して罪を獲るなり。一三 故に若し食物我が兄弟を誘はば、我永く肉を食はざらん、我が兄弟を誘はざらん爲なり。

第四章 一 我使徒たるに非ずや。我自主たるに非ずや。我イイススハリストス我等の主を見しに非ずや。爾等は主に於て私の工たるに非ずや。二 敢ひ我他人の爲に使徒たらずとも、爾等の爲には是なり、蓋爾等は主に於て私の使徒職の印なり。三 我を讃する者に我が答ふる所是なり。四 我等豈食ひ飲むに極なきか。五 我等豈姉妹なる妻を搦ふること、他の使徒及び私の兄弟及びキスの如く然る極なきか。六 抑 我ミナルナラば、は工作せざる極なきか。七 誰か軍士と爲りて、己の給養を以て勤むるをせん。誰か葡萄を樹みて、其果を食はざらん。誰か群を牧して、羊の乳を食はざらん。八 我唯人の信に頼ひて之を言ふか。律法も亦斯く言ふに非ずや。九 蓋モイセイの律法に録して云く、

穀物を踐み落す牛には口を閉づる勿れ。神は牛の爲に慮る。一〇 抑之を言ふは、特に我等の爲にするか。是れ我等の爲に録されたり。蓋耕す者は望ありて耕すべし。穀物を踐み落す者は其希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。一一 若し我等田稼の中に神に屬する物を播きたらば、爾等の身に屬する物を獲るは、豈大事ならんや。一二 若し他人此の權を爾等の中に獲ば、況や我等をや。然れども我等は此の權を用ひざりき。乃凡の事を忍ぶ、ハリストスの福音に聊も阻礙を置かざらん爲なり。一三 爾等豈知らずや、聖事を務むる者は殿に由りて食を得、祭壇に事ふる者は祭壇より其分を取るか。一四 是くの如く、主も福音を傳ふる者に福音に由りて生活するを命じたり。一五 然れども我は此等の事を一も用ひざりき。亦此を告せしは、此くの如く、我に行はしめん爲に非ず。蓋我寧死すとも、人をして我が誇る所を虚しきに歸せざらしめん。一六 我若し福音を傳へば、我に誇るべき所なし、此れ我が分の爲すべき所なればなり。若し福音を傳へずば、我禍なる也。一七 蓋若し我甘んじて此を行はば、賞を得ん、若し甘んぜずば、乃我に託せられし職を行ふのみ。一八 然らば我が賞は何に由るか。我福

音を傳へて、人をして我なくハリストスの福音を得しめ福音する時我が權を用ゐざるに由る。一九リたしわし、我衆に對して自主なりと雖、己を衆に服役せしめたり更に多くの者を獲ん爲なり。二〇われ、我イリテヤ人の爲には、イウテヤ人の如く爲れり、イウテヤ人を獲ん爲なり、律法下の人の爲には、律法下の人の如く爲れり、律法下の人を獲ん爲なり。二一われ、我神の前に律法無きに非ずじて、ハリストスの律法下に在る者は、律法無き人の如く爲れり、律法無き人を獲ん爲なり。二二われ、弱き人の爲には、弱き人の如く爲れり、弱き人を獲ん爲なり、凡の人の爲には、凡の者と爲れり、凡の法を以て或人人を救はん爲なり。二三われ、我が福音の爲に此を行ふは、共に之に與る者と爲らん爲なり。二四われ、爾等豈知らずや、塵揚に越る者は若くも、唯一人貧を獲るを、爾等獲んことを期して越れ。二五われ、凡そ勝を争ふ者は、諸事を節制す、彼等は壞れ易き冕を受けん爲、我等は壞れざる冕の爲なり。二六われ、故に我が越るは、定向なきが如きに非ず、我が越るは、空気を撃つが如きに非ず。二七われ、乃、我が體を制して之を服せしむ、他人を救へて、自ら棄てらるゝ者と爲らざらん爲なり。

第二節

兄弟よ、我爾等が知らざるを欲せず、我等の先祖は皆彼の下に在り、皆海を過れり。皆モイセイに於て鹽と海とに洗を受けたり、皆同じき屬神の食を食ひ、皆同じき屬神の飲料を飲めり、蓋屬神の後來の弊より飲めり、此の弊は卽ハリストスなり。然れども神は彼等の中の多くの者を悦びしに非ず、蓋彼等は野に於て滅されたり。此等の事は我等の爲に鹽と爲れり、我等が悪を嗜むこと彼等の嗜みし如くならずらん爲なり。爾等偶像を拜すること、彼等の中の或者の如くする勿れ、彼等を指して録せるが如し、云く民は坐して食ひ、飲み、起ちて舞へり。我等淫を行ふこと、彼等の中の或者が淫を行ひて、一日間に二萬三千人殞れしが如くす可からず。ハリストスを試みること、彼等の中の或者が試みて、蛇に由りて滅びしが如くす可からず。一、怨言を言ふこと、彼等の中の或者が怨言して、録滅者に由りて滅びしが如くする勿れ。二、此の諸事は彼等に遇ひて、鹽と爲れり、此等の録されしは、我等世の末に及びし者の替と爲らん爲なり。三、故に自ら立てり、意ふ者は慎むべし、恐らくは倒れん。一、爾等が遇ひたる試験は人の常ならず、神は信なり、爾等が勝はるること。

等の能する所に過ぐるを容さず、乃、試誘さ借に逃るべき法を備へん爾等の堪ふるを得ん爲なり。一四、故に我が至愛の者、偶像を拜することを選げよ。一五、我智者に於けるが如く爾等に言ふ、我が言ふ所を判断せよ。一六、我等が祝禱する所の祝杯は、ハリストスの血に與ることに非ずや、我等が撃く所の餅は、ハリストスの體に與ることに非ずや。一七、餅は一なるが故に、我等多くの者も一の體を成す、蓋皆共に一の餅より領くるなり。一八、肉に與るイズライリを觀よ、祭物を食する者は、祭壇に與る者に非ずや。一九、然らば我何をか言ふ、偶像は有る者なりと言ふか、抑、偶像に獻げし物は有る者なりと言ふか、然らず。二〇、乃、異邦人が祭を獻ぐるは、冤鬼に獻ぐる者にして、辨に於てするに非ざるを言ふなり。然れども我は爾等が冤鬼に與る者と爲るを欲せず。二一、爾等は主の杯と冤鬼の杯とを兼れて飲む能はず、主の席と冤鬼の席とに兼れて與る能はず。二二、我等主の嫉を激せんか、豈我等は彼より強きか。二三、凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我に許されたり、然れども凡の物徳を建つるには非ず。二四、人皆己の益を求むる勿れ、乃、各、他人の益を求めよ。二五、凡そ市

に售る者は之を食ひて、間ふ勿れ、良心の爲の故なり。蓋地さ之に滿つる者さば皆主に屬す。二七 若し不備者の中の人爾等を遊へ、爾等往かんと欲せば、凡そ爾等に遊むる所の者は之を食ひて、間ふ勿れ、良心の爲の故なり。然れども若し人爾等に此れは偶像に獻げし物なりと誓はば、食ふ勿れ、之を告げし者の爲及び良心の爲の故なり。蓋地さ之に滿つる者さば皆主に屬す。二九 良心さは己の者に非ずして、他人の者を言ふなり。蓋我の自由は何ぞ他の良心に讓せられん。三〇 若し我恩寵に由りて食はば、何ぞ我が感謝する所の者に縁りて、厭を受けん。三一 故に爾等或は食ひ或は飲み或は何事を行ふに論なく、皆神の光榮の爲に行へ。三二 イウテヤ人にも、クリン人にも、神の教會にも、眼と爲る勿れ。三三 卽ち我が凡の事に於て衆を悦ばしめ己の利益を求めずして、多くの者の利益を其致を得ん爲に求むるが如くすべし。

第四章 一 爾等我に效ふ者さ爲れ、我がハリストスに效ふが如し。二 兄弟よ、我爾等を傲す、爾等我が凡の事を記念し、且我が爾等に傷へし如く、諸傳を守るに因りてなり。三 我爾等が知らんことを欲す、凡の男の首はハリストスなり、女の首は男なり、ハリ

ストスの首は神なり。凡の男首に榮りて所禱し或は預言する者は己の首を辱しむ。又凡の女首に榮らずして所禱し或は預言する者は己の首を辱しむ。蓋此れ髪と異なるなし。女若し榮らずば髪を剃るべし然れども女若し剃り或は避るを辱させば榮るべし。是を以て男は首に榮る可からず其神の像及び光榮なるが故なり。女は男の光榮なり。蓋男は女よりせしに非ず、乃女は男よりせしなり。又男は女の爲に遣られしに非ず、乃女は男の爲に遣られしなり。故に女は其上に在る權の號を首に戴くべし、天使等の爲の故なり。然れども主に在りては男も女に由らざるなく、女も男に由らざるなし。蓋女の男よりせしが如く男も亦女に由りてなり、然れども皆神よりするなり。爾等自ら度れ、女榮らずして神に祈るは宜しき事。本性自ら爾等に、男若し髪を長ぜしめば彼の爲に辱なるを示すに非ずや、然れども女若し髪を長ぜしめば彼の爲に榮なり、蓋髪は榮に代へて彼に與へられたり。惟若し爭論せんと欲する者あらば我等に此くの如き例なし、神の諸教會にも亦然り。然れども我之を勸めて爾等を賞せざるは爾等が益の爲に非ずし

て、損の爲に集るを以てなり。一八 蓋先我は、爾等が教會に集る時爾等の中に分争あり
と聞けり、我畧之を憚す。一九 けだしなんぢら、蓋爾等の中には、異説も無き能はず、練達者が爾等の中
に顯れん爲なり。二〇 またなんぢら、いつしよ、あつまは、主の晩餐を食するの宜しきに合はず。二二
蓋、各先だちて己の食を食ふ是を以て飢うる者もあり、酔へる者もあり。二三 なんぢら
豈食飲する爲に來なきか。抑爾等神の教會を憚り、又乏しき者を辱しむるか。我爾等
に何をか言はん。此が爲に爾等を賞せんか。我賞せず。二四 蓋我が爾等に傳へし事は、我
の主より受けし所なり、即主イエスは付さるゝ其夜に餅を取り、二五 感謝して、之
を擘きて曰へり、取りて食へ、此れ我の體、爾等の爲に擘かるゝ者なり、爾等此を行ひて
我を記念せよ。二六 同じく晩餐の後に爵を執りて曰へり、此の爵は、乃新約、我が血を
以て立つる者なり、爾等此を行ひて、飲む毎に我を記念せよ。二七 蓋爾等此の餅を食
ひ、此の爵を飲む毎に、主の死を示して、其來る時に及ばん。二八 故に宜しきに合はずし
て、此の餅を食ひ、或は主の爵を飲む者は、主の體と血とに罪を負ふなり。二九 人自ら審
みて、然る後此の餅より食ひ、此の爵より飲むべし。三〇 蓋宜しきに合はずして食ひ

飲む者は己の爲に定罪を食ひ飲むなり、主の體を辨へざるを以てなり。三〇此に緣りて爾等の中に弱き者及び病む者多く、賤る者も少からず。三一若し我等己を辨へしならば、密を受けざりしならん。三二然れども密せられて、主より懲を受く、世と與に定罪せられざらん爲なり。三三我が兄弟よ、故に爾等集りて食せん時、互に相待て。三四若し飢うる者あらば、其家に食すべし、爾等集りて定罪を受けざらん爲なり。其餘の事は、我至る時之を理めん。

一、兄弟よ、屬神の賜に至りては、我爾等が知らざるを欲せず。二、爾等が異邦人たりし時、言なき偶像に往きしこと、奉かれたる者の如くなり、は爾等の知る所なり。三、故に我爾等に告ぐ、神の神に由りて語る者は、一人もイエスを對して「アナタ」を言はず、又聖神に由らざれば、一人もイエスを主と稱ふる能はず。四、恩賜は殊なるあり、然れども神は同一なり、職務も殊なるあり、然れども主は同一なり、行爲も殊なるあり、然れども凡の事を凡の人の中に行ふ神は同一なり。五、神の國は各人に與へらる、益の爲なり。此の人には神より智慧の言は與へられ、彼の人には同一の神より

知^ち識^しの言^{ことば}は與^あへられ、或^{ある}には同^{どう}一^{いつ}の神^{しん}より信^{しん}徳^{とく}は與^あへられ、或^{ある}には同^{どう}一^{いつ}の神^{しん}より啓^{けい}を施^ほす恩^{おん}賜^みは與^あへられ、一〇あるは、或^{ある}には乳^い能^{のう}、或^{ある}には預^よ言^{げん}、或^{ある}には諸^{しよ}神^{しん}の辨^{べん}別^{べつ}、或^{ある}には方^{ほう}言^{げん}、或^{ある}には方^{ほう}言^{げん}の解^{かい}は與^あへらる。一一然^{しか}れども凡^{およ}そ此^{これ}等^らの事^{こと}を行^なふ者^{もの}は同^{どう}じく一^{いつ}の神^{しん}なり、彼^{かれ}は己^{おのれ}の欲^{ぼつ}する所^{ところ}に隨^{したが}ひて、各^{かく}人^{じん}に領^わち與^あふ。一二けだし、或^{ある}は一^{いつ}にして多^{おほ}くの肢^{えだ}あり、其^{その}一^{いつ}の體^{たい}の悉^{ことごと}くの肢^{えだ}は多^{おほ}しと、或^{ある}は一^{いつ}の體^{たい}を爲^なすが如^{ごと}く、ハリストスも是^かくの若^{ごと}し。一三我^{われ}等^ら、或^{ある}はイウテヤ人^{じん}、或^{ある}はエリン人^{じん}、或^{ある}は奴^ぬ隸^{れい}、或^{ある}は自^じ主^{しゆ}なる者^{もの}、皆^{みな}一^{いつ}の神^{しん}に由^よりて洗^{せん}せられて、一^{いつ}の體^{たい}を爲^なり、又^{また}一^{いつ}の神^{しん}に飲^のませられたり。一四夫^{おの}れ體^{たい}は第一^{だいいつ}の肢^{えだ}のみならず、乃^{すなは}ち多^{おほ}くあり。一五若^{ごと}し足^{あし}は、我^{われ}手^てに非^{あら}ざるが故^{ゆゑ}に、體^{たい}に屬^{ぞく}せずと云^いはば、果^{はた}して此^{これ}に因^よりて、體^{たい}に屬^{ぞく}せざるか。一六又^{また}若^{ごと}し耳^{みみ}は、我^{われ}目^めに非^{あら}ざるが故^{ゆゑ}に、體^{たい}に屬^{ぞく}せずと云^いはば、果^{はた}して此^{これ}に因^よりて、體^{たい}に屬^{ぞく}せざるか。一七若^{ごと}し全^{ぜん}體^{たい}目^めならば、聽^きくこと安^{やす}に在^あるか。若^{ごと}し全^{ぜん}體^{たい}耳^{みみ}ならば、嗅^かぐこと安^{やす}に在^あるか。一八然^{しか}れども神^{かみ}は其^{その}欲^{ぼつ}せし如^{ごと}く、肢^{えだ}を以^{もつ}て各^{かく}體^{たい}に置^おけり。一九若^{ごと}し皆^{みな}一^{いつ}の肢^{えだ}ならば、體^{たい}は安^{やす}に在^あるか。二〇今^{いま}肢^{えだ}は多^{おほ}しと雖^{いへ}も、體^{たい}は一^{いつ}なり。二一目^めは手^てに、我^{われ}爾^{なんぢ}を要^えせずと、或^{ある}は又^{また}首^{かうべ}は足^{あし}に、我^{われ}爾^{なんぢ}を要^えせずと、爾^{なんぢ}を得^え

す。二三 惟是のみならず體の中に弱しと意はる、肢は更に切要なり。二三 又體の中に我等の視て取からずと爲る者は之を保護すること愈厚し。二四 且我等の美しからざる者は更に美しく蔽はる然るに我等の美しき者は之を要せず乃神は體を調和して劣れる者に更に尊きを賜へり。二五 體の中に分争なくして肢皆同じく相慮らん爲なり。二六 故に若し一の肢苦しまば悉くの肢は之と共に苦しむ若し一の肢榮を得ば悉くの肢は之と共に喜ぶ。二七 爾等はハリストスの體にして亦各其肢なり。二八 神が教會に立てし所の者第一は使徒第二は預言者第三は教師後は異能次は醫を施す恩賜佐くる者治むる者方言を言ふ者なり。二九 豈皆使徒たらんや。皆預言者たらんや。皆教師たらんや。皆異能を行ふ者たらんや。三〇 皆醫を施す恩賜を有たんや。皆方言を言はんや。皆譯解せんや。三一 爾等更に大なる恩賜を切望せよ然らば我尤善き道を爾等に示さん。

第三三章 一 我諸人の方言及び天使等の言を爾らも若し愛なくば我鳴る銅或は響く鐵の如し。二 我預言の能あり凡の奥義と凡の知識とを明にするあり且凡の信能

く山を移すありと雖若し愛なくば我無きが如し。我悉く我が所有を施し又我が
 藍を焚くに委ねども若し愛なくば我一も益なし。愛は寛忍し矜恤し愛は妒ます
 愛は誇らず驕らず。非禮を行はず己の利を求めず怒を發せず惡を念はず。不義を
 喜ばずして眞實を喜び。凡の事を庇ひ凡の事を信じ凡の事を望み凡の事を忍ぶ。八
 愛は永く隨ちず。然れども預言は息み方音は絶え知識は息まん。蓋我等は知ること
 全からず預言すること全からず。一〇全き名の來る時全からざる者は息まん。一
 童子たりし時童子の如く言ひ童子の如く思ひ童子の如く諒れり人成りて後は童
 子の事を息めたり。一二今は我等鏡に緣りて見るが如く見ること朦朧なり其時は面
 を合せて觀ん今は我知ること全からず其時は我が知られしが如く知らん。一三今は
 信望愛此の三の者存す其中に最大なる者は愛なり。

節四 一爾等愛を迫ひ求め屬神の賜を盡へ殊に切要なるは預言することなり。
 二蓋方音を言ふ者は人に言ふに非ずして神に言ふ人之を曉らざるに因る彼は神を
 以て奧義を言ふなり。三然れども預言する者は人に言ひて其徳を建て勩勉を爲し安

歌を興ふ。方言を言ふ者は己の徳を越て預言する者は教會の徳を越つ。我爾等皆方言を言ふを願へども殊に切要なる者は爾等が預言することなり。蓋方言を言ふ者若し瞭解して教會の徳を越つるを致さずば預言する者は彼より勝るなり。兄弟よ我若し今爾等に語り方言を言ひて或は默示或は知識或は預言或は效効を以て言はずば爾等に何の益かあらん。夫れ益なくして聲を出す者或は笛或は琴若し其音別なくば湯ぞ吹く所或は鼓く所の何なるを知らん。若し無定まりなき聲を出さば誰か戦の備を爲さん。是くの如く爾等も若し舌を以て明ならざる言を出さば湯ぞ言ふ所の何なるを知らん。爾等空氣に言はんのみ。一〇世界には土音の類幾何か多き而して其一も義あらざるはなし。二然れども我若し其音の義を識らずば我は言ふ者の爲に異國人なり。言ふ者も我の爲に異國人なり。一三是くの如く爾等も神の賜を慕ふに因りて教會の徳を越つるに務むべき賜に饒ならんことを求めよ。一四故に方言を言ふ者は之を瞭解せん爲に祈るべし。一五蓋我若し方言を以て祈らば我が神は祈れども我が智は結果なし。一六然らば若何にせん。我神を以て祈り亦智を以て祈ら

一六 我神を以て歌ひ、亦智を以て歌はん。一七 益者し爾神を以て祝歌せば、俗人の列に立
 てる者は、焉そ爾が感謝の時に「アミン」と言はん。彼爾の言ふ所を知らざればなり。一八
 爾は善く感謝す、然れども他人は徳を越つる所なし。一九 我が神に感謝す、我は方言を
 言ふふこそ爾衆より多し、然れども教會の中に在りては、我方言を以て萬言を言は
 んより、寧ろ我が智を以て五言を言はん、他人を訓へん爲なり。二〇 兄弟よ、智慧に於ては
 幼兒と作る勿れ、乃、愚に於ては、赤子と作れ、惟智慧に於ては、成人と作れ。二一 律法に
 録されたり、主曰く、我異なる舌異なる唇を以て、斯の民に語らん、然れども、彼等は猶我
 に聽かざらん。二二 故に方言は信する者の爲に非ず、乃、信せざる者の爲にする休
 徴なり、然れども預言は信せざる者の爲に非ず、乃、信する者の爲なり。二三 若し全教
 會一處に集りて、皆方言を言はん、心に知らざる者、或は信せざる者入らば、爾等狂へり、と
 言はざらんや。二四 然れども若し皆預言せんに、信せざる者、或は知らざる者入らば、彼
 衆に費められ、衆に聽せらる。二五 是くの如く、其心の隠れたることは、顯れ、彼俯伏して、
 神を拜し、誠に神は爾等と僭に在りと言はん。二六 兄弟よ、然らば何ぞ、爾等が集れる時、

各人に聖詠あり、教訓あり、方言あり、默示あり、譯解あり、皆之を徳を述つる爲に用ゐるべし。二七〇 若し方言を言ふ者あらば、二人或は多くとも三人序を以て言ひ、一人之を譯解すべし。二八一 若し譯解する者なくば、教會の中に默して己と稱さば言ふべし。二八二 預言する者は、二人或は三人言ひ其餘の人ば之を判断すべし。二八三 若し他の坐する者默示を得ば、先の者は默すべし。二八四 蓋爾等皆一一預言するを得密教へられ皆默められん爲なり。二八五 預言者の神も亦預言者に順ふ、二八六 蓋爾は亂の神に非ず、乃平安の神なり。斯く聖徒の悉くの教會に在るなり。二八七 爾等の婦女は教會の中に默すべし、蓋言ふことは彼等に許されず、乃順ふべし、律法にも言ふ所の知し。二八八 若し彼等事ばんと欲する所あらば、家に在りて其夫に問ふべし、蓋婦女の教會の中に言ふは耻づべきことなり。二八九 神の言は爾等より出でしか、抑爾等にのみ至りしか。二九〇 人若し己を預言者或は屬神の者と爲さば、我が爾等に當する所を知るべし、蓋是れ主の試なり。二九一人若し知らずば、其知らざるに任すべし。二九二 是を以て兄弟よ、預言することゝ慕へが言を言ふことゝなをも禁する勿れ。二九三 惟凡の事端正にして、秩序を以て行ふべし。

兄弟よ、我が嘗て爾等に傳へし福音を復爾等に告ぐ、乃爾等が受けし所之を以て立ちし所なり。爾等若し之を我が福音せし如く守り、且徒に信するこさなくば、之に由りて救を得ん。蓋我が初に爾等に傳へし所は、我自らも受けし所なり、即ハリストスは我等の罪の爲に死せり、聖書に録せるが如し。又彼は葬られ、三日に復活せり、聖書に録せるが如し。又キリスに後十二人に現れ、其後五百餘の兄弟の共に在るに現れたり、其中多くの者は今に至るまで猶存す、已に歿りたる者もあり。其後イアコフに又悉くの使徒に現れ、卒に我月足らぬ如き者にも現れたり。蓋我が使徒の中に於て、最小き者にして、使徒と名づけらるゝに堪へず、神の教會を容運せしが故なり。一〇しか、然れども神の恩寵に由りて、我は我たるを得たり、且我に存する神の恩寵は空しからざりき、乃我は彼等衆よりも多く勞せり、然るに我に非ず、乃我を倍にする神の恩寵なり。一〇二故に我と彼等とを論ぜず、我等是くの如く傳ふ、爾等も是くの如く信ぜり。一〇三然れども若しハリストスの事彼は死より復活せりと傳へられば、如何ぞ爾等の中に在る者は死者の復活なしと言ふ。一〇四若し死者の復活なく

ば、ハリストスも復活せざりしならん。一四 若しハリストス復活せざりしならんば、我等
 の傳ふる所空しく、爾等の信も亦空し。一五 且我等は神の事を妄證する者なりしなら
 ん蓋神の事を證して、彼はハリストスを復活せしめたりと言へり然れども若し死者
 復活せずば、彼は之を復活せしめざりじなり。一六 盜若し死者復活せずば、ハリストス
 も復活せざりしならん。一七 若しハリストス復活せざりしならんば、爾等の信は空し、爾
 等は騙陣の中に在るなり。一八 故にハリストスに於て寢りし者も亡びしなり。一九 且
 我等若し新の生命にのみハリストスを恃まば、我等は悉くの人より不幸の者たるな
 り。二〇 然れども今ハリストスは死より復活し死せし者の中に初實と爲れり。二一 盜
 死の人に因るが如く死者の復活も亦人に因るなり。二二 アダムに在りて皆死するが
 如く、斯くハリストスに在りて皆復活せん。二三 唯各其序あり初實は、即ちハリスト
 ス、次はハリストスに屬する者彼の來らん時に在り。二四 其後は終なり、彼が國を神父
 に付さん時、即ち凡の首領、凡の權柄、能力を廢せんとする時なり。二五 盜彼、必
 ず悉くの敵を其足下に置くに至るまで、王たるべし。二六 最後に滅されんとする敵は

死なり。二七 蓋萬有を其足下に服せしめたり。惟萬有の彼に服せしめられたり云ふ
時は萬有を彼に服せしめし者の其内に在らざるこそ明なり。二八 萬有を彼に服せし
めん時子も亦親ら萬有を彼に服せしめし者に服せん神が萬有の中に萬事たらん爲
なり。二九 然らずば死者の爲に洗を受くる者は何をか爲す。若し死者敢て復活せずば、
何ぞ死者の爲に洗を受くる。三〇 何ぞ我等も時毎に危険に遇ふ。三一 我毎日死す兄弟
よ、我ハリストスイイスス我等の主に於て有つ所の爾等の罪を以て之を贖す。三二 人
の情に循ひて言はば我エヌスに在りて猛獸と闘ひしこと若し死者復活せずば、我に
何の益かあらん。食飲すべし、盜明日死なん。三三 自ら欺く毋れ惡しき交は善き習を
壞る。三四 義に醒めよ罪を犯す勿れ 盜 爾等の中に神を識らざる者あり、我等等の魂
の爲に之を言ふ。三五 然れども人或は曰はん、死者は如何に復活せんか、何の身を以て
來らんか。三六 無知なる者よ、爾の播く所の者若し死なずば、生きざらん。三七 且爾が
播く所は將來の體を播くに非ず、乃在る所の粒のみ或は麥或は他の穀なり。三八 然
れども神は欲する所に隨ひて之に體を與へ種毎に其本體を興ふるなり。三九 凡の肉

は同じき肉に非ず、乃人には其肉あり、魚には其肉あり、鳥には其肉あり。又天の體あり、地の體あり、而して天の體の榮は地の體の榮と異なり。日には其榮あり、月には其榮あり、星には其榮あり、又星と星と其榮を異にす。死者の復活も亦斯くの如し。朽つる者として播かれ、朽ちざる者として起く、種からざる者として播かれ、榮ゆる者として起く、剛き者として播かれ、強き者として起く。靈に屬する體として播かれ、神に屬する體として起く。靈に屬する體あり。若く録す所あり、云く、始の人アダムは生くる靈と爲れり、終のアダムは乃生かす神なり。然れども神に屬する者先に在らず、乃靈に屬する者先なり、後は神に屬する者なり。第一の人は地よりして土に屬し、第二の人は天よりして主に屬し、土に屬する者は若何、凡の土に屬する者も此くの如し、天に屬する者は若何、凡の天に屬する者も此くの如し。我等は土に屬する者の狀を衣たるが如く、亦天に屬する者の狀を衣ん。兄弟よ、我之を爾等に言ふ、血肉は神の國を嗣ぐ能はず、朽つる者は不朽を嗣がざらん。我爾等に與義を言ふ、我等皆寢らんとするには非

す然れども皆變ぜん。 五二に俄頃、瞬間の間に、末の無の時に於て、盜は鳴らん。而して死者は不朽の者として復活し、我等は變ぜん。 五三此の朽つる者は不朽を衣、此の死する者は不死を衣るべければなり。 五四此の朽つる者は不朽を衣、此の死する者は不朽を衣、時餘されし言は應はん、云く死は勝に香まれたり。 五五死、爾の刺は安にか在る地獄よ、爾の勝は安にか在る。 五六死の刺は勝に香まれたり。 五七神に在る地獄よ、爾の勝は安にか在る。 五八是を感謝す、其我等に、我が主イエス、ハリストスに由りて勝を賜ひしが故なり。

以て我が至愛の兄弟よ、爾等堅固にして搖かず、恒に勵みて主の事に進め、爾等の勞の主の前に空からざるを知らばなり。

第五節

一聖徒の爲に施金を集むることに至りては、我がガラサヤの諸教會に命ぜし如く、爾等も斯く行へ。 七日の首の日毎に、爾等各其得る所に備ひ之を積み、自ら蓄ふべし、我が来る時に始めて集むることなせざらん爲なり。 我れ来る時、爾等が擇ぶ所の者に遺を託して、爾等の惠施をイエルサリムに送る爲に之を遣さん。 若し我も亦往くこと適はば、彼等は我と偕に往かん。 我マケドニヤを経て、爾等に至ら

人、蓋マクドニヤを経て往くなり。便宜を得ば、我爾等の中に留り或は冬をも過さん。
爾等が我を往くべき所に送らん爲なり。蓋彼今途次爾等を見んことを欲せず、乃
主若し許さば暫く爾等の中に居らんことを忍む。我エヌスに留りて、五旬節に迄ら
ん。蓋我の爲に大にして廣き門は啓かれ敵する者も亦多し。一〇若しキモスイ來ら
ば爾等慎みて彼が戻なく爾等の中に居るを致せ蓋彼は主の事を爲すこと我の如し。
一〇故に何人も彼を頼んすべからず、乃平安に彼を送りて我に來らしめ、蓋我は
彼が兄弟等と偕に來るを待つ。一三兄弟アボロスに至りては、我大に彼が兄弟等と偕
に爾等に往かんことを勧めたれども、彼敢て今往くを欲せざりき、然れども便宜を得
たる時に往かん。一三爾等微塵せよ信に立て、勇め堅固なれ。一四凡の事愛を以て行へ。
一五兄弟よ、ステラスンの家はアハイヤの初實にして、且己を聖徒に務むることに獻げ
しは、爾等の知る所なり。一六我爾等に求む、爾等も此くの如き者及び凡そ助力する者
と勤勞する者と共に服せよ。一七我はステラスンナルト、ナト及びアハイクの來りしを喜
ぶ、彼等は我が爲に爾等の缺くる所を補へり。一八蓋彼等は我と爾等との心を安んじ

たり。此くの如き者を敬へ。一九 アシヤの諸教會は爾等の安を問ふ。アキラ及びプリ
 キラは其家の教會と併に主に在りて切に爾等の安を問ふ。二〇 衆兄弟、爾等の安を
 問ふ。爾等聖なる接吻を以て互に安を問へ。二一 われ、手づから爾等の安を問ふ。二
 二 主イエイススハリストスを愛せざる者は「アナヌマ」たるべし、「マラニヤ」也。二
 三 願はくは我等の主イエイススハリストスの恩寵は爾等と併に在らんことを。二四 わ
 我が愛もハリストスイエイススに於て爾等衆人と併に在るなり、「アミン」。

聖使徒パウロがコリント人に送る後書

第一

一

パウロ神の旨に由りてイエススハリストスの使徒と爲れる者及び兄弟

ヲモス。イハコリントに在る神の教會及び週くアハイヤに在る悉くの聖徒に書を送

す。二。願はくは恩寵と平安とは神我等の父及び主イエススハリストスより爾等に賜

はらんことを。祝讃せらるる哉神我等の主イエススハリストスの父慈悲の父凡の

慰の神。彼は我等の凡の苦難に於て我等を慰む。我等が自ら神より慰めらるる慰を

以て凡の苦難に在る者を慰むるを得ん爲なり。蓋ハリストスの苦の我等の中に

増加するが如く是くの如くハリストスに由りて我等の慰も増加するなり。我等が

苦難を受くるも爾等の慰と救との爲なり。即ち我等も苦しむが如き苦を爾等忍ぶに

由りて行はるる救なり。且爾等に於ける我等の望は堅し。我等が慰を受くるも爾等

の慰と救との爲なり。蓋爾等が我等の苦に與るが如く慰にも亦與ることを知れ

ばなり。兄弟よ。我等は爾等が我等のアシヤに於て遣ひし所の苦難を知らざるを欲

せず蓋我等は壓せられしこと甚しくして勢當る可からず生命を保つ忍を絶つに至
 れり。即我が裏に必死の擬定を爲せり特に己を待ますして只死者を復活せしむ
 る神を待まん爲なり。一〇彼は既に我等を此くの如き死より救ひ今又救ふ我等彼を
 待む後も亦救はん、一〇二爾等も我等の爲に祈禱して助くるが故なり多くの人の轉達
 に依りて我等が受けし賜の故を以て多くの人が我等の爲に感謝せん爲なり。一〇三蓋
 我等の誇は乃此、即我が良心の我等が質料と神に喜ばるゝ正直さを以て肉體の
 智慧に由らずして神の恩寵に由りて世に居り特に爾等の中に居りしを隠すること
 なり。一〇四蓋我等が密して爾等に達するは爾等が厭む所識る所に外ならず我望む爾
 等が終に至るまで之を隠らんことを、一〇五蓋爾等は略我が主イエススハリストス
 の日に於て我等が爾等の誇を爲り爾等も同じく我等の誇を爲らんことを隠れり。一
 〇六我此の信に據りて爾等が再恩寵を獲ん爲に先に爾等に至り、一〇七爾等よりマク
 ドニヤに往きマクドニヤより復爾等に來り爾等をして我をイウアヤに送らしめん
 ことを謀れり。一〇八我此くの如く謀りて輕率に行ひしか。抑我が謀る所は肉に由りて

探り、我に是是及び非非ならん爲にするか。一八しが然れども神の信なるが如く爾等に於ける我等の言は是及び非なかりき。一九けだしわれらすなはちわれ以て爾等の中に傳へられし神の子イエスハリストは是及び非なかりき、乃彼に在りては是ありしのみ、二〇けだし神の悉くの許約は彼に在りて是なり彼に在りて「アミン」なり、我等に由りて神に光榮の歸せん爲なり。二一われら爾等と偕にハリストスに堅固にし及び我等に背つけし者は神なり、二三かれ彼は我等に印し且神の賜を我等の心に與へたり。二四われら爾等を顧みて我が靈の證者と爲す、我今に至るまでコリントに至らざれば、爾等を宥恕するが故なり。二五此れ我等は爾等の信に主たるに非ず、乃爾等の喜を助く、蓋爾等は信を以て立つなり。

第三章 一 我復憂を以て爾等に至らざらんご自ら決めたり。二 蓋若し我等を憂ひしめば、我が憂ひしむる者の外誰か我を喜ばしめん。我が憂して爾等に達せしは即是なり、我來る時、我を喜ばしむべき者に由りて憂を受けざらん爲なり、蓋我は爾等に於て、我が喜ばしむる者の喜なりと信す。四 我大なる哀と心の痛さに緣りて多くの

涙を以て爾等に書せり。爾等を愛ひしめん爲に非ず、乃我が爾等に於ける愛の深きを
 を知らしめん爲なり。若し愛ひしめし者あらば唯我を愛ひしめしに非ず、乃略我
 甚しく責むるを欲せず。爾來を愛ひしめしなり。斯る人は多くの人の懲戒を受く
 ること已に足れり。然らば爾等將彼を教し彼を慰めよ。恐らくは彼甚しき愛に沈
 まん。故に我爾等に愛を後に顯さんことを求む。蓋我が嘗て書せしは特に爾等を
 試みて、爾等が凡の事に於て順ふや否やを知らん爲なり。一。爾等何なか人に教すこ
 とあらば我も亦之を教す。蓋我も若し教ししことあらば、爾等の爲にハリストスの面
 前に教ししなり。二。サマナの我等に勝利を得ざらん爲なり。蓋我等は其能計を知ら
 ざるに非ず。三。我ハリストスの福音の爲にトロアダに來りしに、主に由りて我が爲
 に門闢かれたれどし、一。我が兄弟、トに遇はざるに由りて我が心安からざりき。乃
 彼等を辭して、マクドニヤに往けり。二。神に感謝す。彼は常にハリストス、イイススに
 由りて、我等に凱旋せしめ、且我等を以て彼を識る香を運き處に顯す。一。蓋我等は教
 ばる者の中にも亡ぶる者の中にも、神の爲にハリストスの馨香なり。一。彼には

死の香にして死に致し、此には生の香にして生を致す。誰か此等に堪へん。一七、我等は多くの人の如く神の香を混乱せず、乃誠により神に由り神の前に、ハリストスに在りて言ふなり。

第三節 我等復始めて己を薦むべきか、抑或人の如く我等は爾等に示す薦書或は爾等よりする薦書を要するか。二、爾等は乃我等の書我が心に荷されし者衆人の知る所説む所の者なり。三、爾等は明に己がハリストスの前にして、我等の役事に由りて墨を以てせしに非ず、即活ける神の神を以てし、石碑の上に非ず、即心の肉の上に書されたるを示す。四、我等ハリストスに報りて、神の前に此くの如き信あり。五、此れ我等が能く己に由りて何をか思ふこと己に由るが如くするに非ず、乃我等の能する所は神に由るなり。六、彼は我等をして能く新約の役事を爲らしめたり、即文に非ずして神の役者なり。七、若し死の役事を以て石に書されたる者は、光榮なる者にして、イスラエルの諸子が、メイセイの面を其面の移るふ光榮の爲に見ること能はざりしならば、況や神の役事は更に光榮なる者たらざ

涙を以て爾等に傷せり、爾等を愛ひしめん爲に非ず、乃我が爾等に於ける愛の深きを知らしめん爲なり。若し愛ひしめし者あらば唯我を愛ひしめしに非ず、乃略（我甚しく責むるを欲せず）爾衆を愛ひしめしなり。斯る人は多くの人の懲戒を受くること已に足れり。然らば爾等、彼を赦し、彼を慰め、恐らくは彼甚しき愛に沈まん。故に我爾等に愛を彼に顯さんことを求む。蓋我が嘗て書せしは特に爾等を試みて、爾等が凡の事に於て順ふや否やを知らん爲なり。一〇爾等何をか人に赦すことあらば、我も亦之を赦す。蓋我も若し赦し、ことあらば、爾等の爲にハリストスの面前に赦し、なり。一、サタナの我等に勝利を得ざらん爲なり。蓋我等は其陰計を知らざるに非ず。一、二我ハリストスの福音の爲にトロアタに來りしに、主に由りて我が爲に門闢かれたれども、一、三我が兄弟、トに遇はざるに由りて、我が心安からざりき、乃彼等を辭して、マケドニヤに往けり。一、四神に感謝す、彼は常にハリストス、イエスに由りて、我等に凱旋せしめ、且我等を以て彼を識る香を運き、處に顯す。一、五蓋我等は救はるゝ者の中に、亡ぶる者の中にも、神の爲にハリストスの馨香なり。一、六彼には

死しかの香かきにして死しに致いたし、此これには生いのちの香かきにして生いのちを致いたす。誰たれか此これ等らに堪たへん。一七いちぢ我われ等らは多くの人ひとの如ごとく神かみの言ことばを混ま亂らんせず、乃すなはち誠まことに由より、神かみに由より、神かみの前まへに、ハリストスに在ありて香かきふなり。

第三 我われ等ら復また始はじめて己おのれを驚おどすべし、抑おさりて或ある人ひとの如ごとく、我われ等らは爾なんぢ等らに示しめす。爾なんぢ等らよりする驚おどすを要えするが。爾なんぢ等らは、乃すなはち我われ等らの書あき、我われが心こころに書かされし者もの、衆しゆう人じんの知しる所ところ、爾なんぢ等らの所ところの者ものなり。爾なんぢ等らは、明あきらかに己おのれが、ハリストスの例たとにして、我われ等らの役えき事じに由よりて、盤ばんを以もつてせしに非あらず、即すなはち活いける神かみの神しんを以もつてし、石せき碑ひの上うへに非あらず、即すなはち心こころの肉にく碎さいの上うへに書かされたるを示しめす。我われ等らハリストスに頼よりて、神かみの前まへに此この如ごとく信しんあり。此これ我われ等らが能よく己おのれに由よりて何なにかを思おもふこと、己おのれに由よるが如ごとくするに非あらず、乃すなはち我われ等らの能よくする所ところは、神かみに由よるなり。彼かれは我われ等らをして能よく新しん約やくの役えき事じを爲ならしめたり、即すなはち文ぶんに非あらずして、神しんの役えき事じなり。蓋けだし文ぶんは死しし神しんは生いかすなり。若もし死しの役えき事じ、文ぶんを以もつて石いしに書かされたる者ものは、光くわう榮えいなる者ものにして、イスラエルの諸しよ子しが、モイセイの面おもてを其その面おもての移うつる、光くわう榮えいの爲ために見みること、能よくはざりしならば、況いはんや、神しんの役えき事じは、更さらに光くわう榮えいなる者ものたらざらざらん。

らんや。蓋若し定即の役事は光榮ならば精義の役事は光榮なること益盛なり。一
 〇 舊光榮ありと爲し、者は其分に於て己に光榮ありと爲さず、後の光榮の更に愈
 れるに縁りてなり。二 蓋若し移るふ者光榮たらば、畏らふる者は益々光榮たるなり。
 一 故に我等是くの如き望ありて、毅然として行ふ。二 用イセイが其面に軸を聚り
 て、イズライリの諸子に移るふ者の終を見るを得ざらしめしが如きに非ず。一 然れ
 ども彼等の思念は味みたり、蓋今日に至るまで、舊約を讀む時其軸は存して啓かれず、
 此れハリストスに由りて除かる、故なり。一 今日に至るまで、セイセイを讀む時軸
 は猶彼等の心に在り。一 然れども彼等が主に歸する時其軸は除かる。一 主は神な
 り、主の神の在る所には、自由あり。一 我等皆露れたる面を以て、主の光榮を鏡に於け
 るが如く觀て、其像に變ぜられ、光榮より光榮に進む、主の神よりするが如し。

四 故に我等神の恩恵に依りて、此の職を任じて敢て倦まず、二 乃隠れたる
 愧づべきことを棄て、醜陋を行はず、神の言を混さず、唯眞實を顯して、神の前に在りて、
 己を衆人の良心に質す。三 若し我等の福音辨はるゝあらば、是れ亡ぶる者の爲、即

此の世の神が智慧を味まし、不信者の爲に拵はる。彼等には見る可からざる神の像たる、ハリストスの光榮の福音の光を照さざらん爲なり。蓋我等の傳ふる所は己に非ず、乃ハリストスイエス主なり、我等はイエスに緣りて爾等の僕なり。蓋暗より光の照るこそ命ぜし神は、我等の心を照せり、イエスハリストスの面にある神の光榮を知る知識を以て我等を輝さん爲なり。然れども我等は此の寶を土の器に藏む莫大の能が神に由りて、我等に由らざらん爲なり。我等四方より患難を受くれども崩せず、險しき境に處れども怒を失はず、密逐せらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず。一、常に身に主イエスの死の狀を佩ぶ、イエスの生命も我等の身に斷れん爲なり。二、蓋我等生ける者は常にイエスの爲に死に付さる、イエスの生命も我等の死すべき肉體に斷れん爲なり。三、是くの如く死は我等の中に、生命は爾等の中に行ふなり。一、然れども餘して、我等故に言へり、あるが如く、我等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言ふ、主イエスを復活せしめし者は、イエスを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめん

ことを知るに因る。一五、盗賊等は爾等の爲なり、豊なる恩寵が多くの人の感謝に由りて、神の光榮の溢るゝを致さん爲なり。一六、故に我等は倦まず、乃我等の外なる人は、壞ることも内なる人は、日日に新なり。一七、盗賊等が暫時の輕き苦は、極めて盛なる永遠の重き光榮を我等の爲に備ふ、我等見ゆる者を願みずして、見ゆる者を願みるに緣る、盗見ゆる者は暫時にして、見ゆる者は永遠なり。

第五節 一、盗我等知る、我等の地上の幕屋壞る、時は我等に神より賜ふ所の居所あり、手にて造られざる、崖永遠にして、天に在る者なり。二、此に由りて我等歎息し、深く我等の天よりする屋を衣んさ欲す。三、第願はくは衣たる後にも、仍裸ならざらんことを。四、盗我等は此の幕に居り、重きを負ひて歎息す、脱がんと欲するに非ず、乃衣んさ欲するに因る、死の者は生命に奪まれん爲なり。五、此の事の爲に神は我等を造り、亦我等に神の聘賃を與へたり。故に我等恒に勇む、我等身に居る時は、主より隠れたるを知る。七、盗我等は信を以て行く、觀るを以てするに非ず。八、是の故に我等勇みて、裸身を離れて、主さ儘に居らんことを認む。九、是を以て我等或は内に居り、或は離ることも彼の喜

を爲さんことを勉む。一〇 我等皆ハリストスの霊前に立つべし、各人が其身に居る時行ひし事、或は善、或は惡に應ふ所を受けん爲なり。二 故に我等主の畏るべきを知りて、人人を諭す、我等は神に顯明なり、爾等の良心にも顯明なりと信す。一三 我等復己を爾等に薦めず、乃、我等を以て誇るべき機会を爾等に與ふ、爾等が貌を以てし心を以てせずして誇る者に答ふるを得ん爲なり。一四 蓋我等若し狂せば、是れ神の爲なり、若し謙らば、是れ爾等の爲なり。一五 蓋ハリストスの愛は我等を勵ます、我等若し一人衆に代りて死せば、衆已に死せるなりと付るが故なり。一六 然るにハリストスは衆に代りて死せり、生くる者は既に己の爲に非ず、乃、彼等に代りて死して復活せし者の爲に生くん爲なり。一七 故に我等今より後肉體に依りて何人をも勵らす、曾て肉體に依りてハリストスを識りたれども、今日に之を識らず。一八 是の故に人若しハリストスに在らば、新なる受造物なり、舊きは逝れり、視よ、一切新になれり。一九 且一切神、即イオヌス、ハリストスを以て我等を己と和睦せしめ、並に我等に和睦せしむる職を授けたる者に由る。二〇 蓋神はハリストスに於て世を己と和睦せしめて、人に其罪を歸

せず並に和睦せしむる言を我等に託せり。故に我等はハリストスより遣されし者なり。神が我等を以て爾等に勧むるが若し我等ハリストスに代りて爾等に求む神に和睦せよ。二一 蓋彼は罪を識らざる者を我等の爲に罪の贖と爲せり。我等彼に在りて神の前に義者と爲らん爲なり。

第二〇章

我等は同勞者として爾等に求む神の恩寵を徳に受くる勿れ。二一 蓋言へるあり納るべき時に我爾に應き救の日に爾を助けたりと。親よ今は喜納るべき時親よ今は救の日なり。我等何事に於ても眼を人に置かず我が職の務を受けざらん爲なり。我等凡の事に於て己を神の役者と顯す。即ち多くの忍耐に忠誠に窮乏に困苦に、死に刑に禁獄に争闘に勦勞に儼然に禁食に、潮溼に知識に恒忍に仁慈に聖神に偽なき愛に、眞實の言に神の能に於てし左右の手に義の武具を以てし、暴祭及び耻辱に惡評及び令聞に於てす欺く者に似たれども眞なり。知られざるに似たれども知られ死したるに似たれども親よ生けるなり。罰を受くるに似たれども死に付されず。一〇 憂ふるに似たれども常に喜び實しきに似たれども多くの者を富ませ有る

なきに似たれども有らざるなし。二コリンフ人よ我等の口は爾等の爲に啓かれ我等の心は廣まれり。二三爾等が我等の裏に居るは狭からず然れども爾等の心には狭し。一四我子に於けるが如く言ふ其報として爾等も己を廣くせよ。一五爾等不信者と與に同じき轡を負ふ勿れ蓋義は不法と何の倍なることかあらん或は光は暗と何の交ることかあらん。一六ハリストスはマリアルと何の合ふことかあらん或は信者は不信者と何の與ることかあらん。一七神の殿は偶像と何の同じきことかあらん蓋爾等は活ける神の殿なり神の譬て言ひしが如し曰く我彼等の中に居り彼等の中に行かん我彼等の神となり彼等我の民となり。一八主又曰く故に爾等は彼等の中より出で自ら離れよ汚穢に觸るゝ勿れ然らば我爾等を納れん。一九我爾等の父となり爾等我の子女となり主全能者之を言ふ。

第三章 一是の故に至愛の者よ我等既に此くの如き許約を得たれば己を凡の肉と神との汚より潔くし神を畏るゝを以て聖を成すべし。二爾等我等を納れよ我等何人をも侵さず何人をも損はず何人よりも利を食らざりき。三此を言ふは爾等を却せん

爲に非ず、蓋我が先に首ひしが如く、爾等我が心の内に在りて、我爾等と偕に死し、偕に生きんことを欲す。我爾等に於て大に毅然たり、我爾等を以て多く誇る、我等の悉くの患難の中に在りて、我慰に満ち喜に溢る。蓋我等がマケドニヤに來りし時、我が身少しも安きを得ず、乃我等は諸の患難に遇ひ外には、爾あり内には懼ありき。然れども謙卑の者を慰むる神は、ソトの至るを以て、我等を慰めたり。唯彼の至るを以てせしのみならず、即彼が我等に爾等の愛慕、爾等の涕泣、爾等が我に於ける熱心の事を告ぐる時に、慰めたる慰を以てせり。故に我益喜べり。ハ、我が書を以て、爾等を憂ひじめしことは、我曾て之を悔いしが、今は悔いす。蓋見る彼の書は、暫時と雖、爾等を憂ひしめたり。今我が喜ぶは、爾等が憂ひしに因るに非ず、乃爾等が憂ひて悔改せしに因るなり。蓋爾等は神の爲に憂ひたり、我等より少しも損を受けざらん爲なり。一、蓋神の爲にする憂は、悔なき悔改を生じて、救を得しむ。惟世の憂は死を致す。二、蓋親よ、爾等が神の爲に憂ひし事は、何如なる勳を、爾等の衷に生ぜしか。即自訴、即憤、即長憤、即懇慕、即熱心、即頭を責むること、是なり。爾等一切此の事に於て

自ら潔きを表せり。二三 我が書して爾等に達せしも倭し、者の爲に非ず亦倭されし者の爲に非ず、乃我等が爾等の爲に神の前に有う所の熱心の爾等に願れん爲なり。故に我等は爾等の慰を以て慰めたり、猶且テトの喜を以て喜べり、爾等皆其神を安んぜしめしが故なり。一四 我が曾て爾等を以て彼の前に誇りし事の若きは我之を愧ぢず、乃我等が爾等に語りしことの皆眞實なるが如く、斯く我等がテトの前に誇りし所も眞實と爲れり。一五 且彼は爾等皆 願 從にして、恐懼慙を以て彼を接し、ことを憶ひ起して、其心 甚 爾等を受せり。一六 故に我凡の事を爾等に託するを得べきに因りて喜ぶ。

第八章

兄弟よ、我等は

マケドニヤの諸教會に賜はりし神の恩寵を爾等に知らしむ。

二三 即 彼等は 大に忠謹に試みらるゝ時、喜に充ち、又彼等の甚しき貧窮は彼等が廉潔の爲に豊なり。

蓋 彼等は 其力に頼ひ、且其力に逾て甘んじて施す、我之を證す。

彼等は 熱切に我等に、其恩施と聖徒の爲にする職に與る分を、受けんことを求めたり。此れ唯我等が望みし所の如きのみならず、乃 彼等は 己を以て先づ主に及び

神の旨に依りて我等に委れたり。故に我等はオトに其爾等の中に此の恵施の事を
 も始めしが如く、亦之を終へんことを求めたり。爾等凡の事に即備に言に知識に、
 凡の熱心に、我等に於ける爾等の愛に富めるが如く、此の恵施にも富むべし。我が此
 を言ふは命するに非ず、乃他人の熱心に倣りて、爾等の愛の實を試みるなり。蓋
 爾等は我等の主イエス Kristus の恵施を知る、彼は富める者にして、爾等の爲に
 貧しき者を爲れり、爾等が彼の貧しきに因りて富める者、爲らん爲なり。一〇此の
 事に於て勸諭を與ふ、蓋是れ爾等の爲に益なり、爾等は之を行ふのみならず、之を認む
 ことをも、他に先だちて、去年より始めたればなり。一〇其行ふ所を成就せよ、爾等が
 志を立て、認みし如く、斯く是の事の爾等の所有に備ひて成就せられん爲なり。一
 三蓋若し志あらば、其納れらるゝこと、人の所有に備ふ、其無き所に備ふに非ず。一三蓋
 他は寛舒にして、爾等は苦しまんことを要するに非ず、乃平均ならんことを要す。一
 四今爾等の有餘は、彼等の足らざるを補ふ、後彼等の有餘も、爾等の足らざるを補はん
 爲なり、斯くして平均ならん。一五蓋して云へるが如し、多く做めし者は、餘なく、少く做

めし者も足らざるなしと。一六 神に感謝す此の爾等に於ける熱心をテトの心に賜ひしに緣る。一七 蓋彼は我が勸を納れたり且其熱心なるに因りて自ら求めて爾等に往けり。一八 彼と偕に我等は一の兄弟を遣せり、即福音の爲に悉くの教會の中に頌美を得、一元此のみならず諸教會より返ばれて我等と同行して我等が主の光榮の爲及び爾等の熱心の爲に務むる所の此の惡施を揃ふる者なり。二〇 此れ我等の務に託する所の惡施の饒なるに由りて人の勸を受けざらんことを慎むが故なり。二一 蓋我等は主の前のみならず、乃人の前にも善からん事を慮るなり。二二 彼等と偕に我等は又我が兄弟を遣せり其熱心は我等屢多くの事に於て之を試みたり今彼等々爾等を信するに由りて更に熱心たるなり。二三 一トの事を言はば彼は私の伴侶及び爾等に在りて私の同勞者なり我が兄弟等の事を言はば彼等は諸教會の使者なり、ハリストスの光榮なり。二四 故に諸教會の前に於て彼等に爾等の愛及び我等が爾等を以て憐ることの虚しからざる證を示せ。

第四節

一七 聖徒に供事することに就きては、我等等に奮するを要せず、蓋我等の

熱心を知る之を以て爾等の事をマケドニヤ人の前に誇りて、アハイヤは去年より已に備を爲せりと言ふ、且爾等の熱心は多くの人を激ましたり。然るに我が兄弟を道し、は我等が此の事に於て爾等の爲に誇る所の虚しくならざらん爲、即爾等の言が言ひし如く備はれる者ならん爲なり。恐らくはマケドニヤ人我と併に來りて、爾等の未だ備はらざるを見れば、爾等を言はず、我等此の誇る所に於て益を得ん。故に我兄弟に求めて、彼等が先づ爾等に至り、爾等が既に告げし所の祝福は之を祝福せしめて、強請するに非ず、預め備はりたる者爲さんことを要せり。我且之を言ふ、乏しく稼く者は乏しく、穡り豊に稼く者は豊に給らん。人の各其心の欲する所に隨ひ、憂に由るに非ず、強ひて爲すに非ずして、施すべし、蓋神は樂しみて與ふる者を愛す。且神は爾等を隨恩に富ましめんことを能す、爾等常に凡の事に於て足らざるなくして、凡の善事を爲すに饒ならん爲なり。九、練されしが、知し云く、彼は散じて貧者に施せり、其義は世に存す。一〇、播く者に種を與へ、食の爲に餅を備ふる者は、願はくば爾等が播く種を備へ、且殖し、又爾等の義の實を益さんことを。一一、爾等が凡の事に富

むに由りて博く施すを得ん爲なり、此れ我等に由りて神に奉る感謝を作す。一三、蓋此の供事の職は第聖徒の乏しきを補ふのみならず、乃亦許多の人をして多くの感謝を神に奉らしむ。一四、彼等は此の職の體に由りて、我等が承け認むるハリストスの福音に服する爲、及び我等が彼等と衆人共に於ける厚き共與の爲に神を讚榮し、一五、且神が我等に賜ひし豊なる恩寵に緣りて、我等を慕ひ、我等の爲に禱る。一六、神に感謝す、其言ひ盡されぬ恩賜に由りてなり。

第二十章

余ハリストスノ面前ニハ爾等ニ對シテ謙卑離れてハ爾等ニ向ヒテ勇ましき者

ハ、ハリストスの溫柔と寛容さを以て爾等に勸む。二、切に求む我をして來りて後敢爲なる勇を用ゐざらしめんことを、即、我が或人我等肉に循ひて行ふ意ふ者に對して敢て用ゐん意ふ所の者なり。蓋我等は肉に在りて行へども、肉に循ひて戰はず。我等が戰の器は肉に屬せず、乃神に由りて、強を破る能あり、我等此を以て踏のはかりと凡そ神の知識に逆ふ高慢さを破り、凡の意思を換にして、ハリストスに従はしめ。且爾等の順從の全くせられて後、凡の不順を罰するに備はれり。爾等は外貌

を觀るが。自らハリストスに屬すも倍する者は己に憑りて度るべし彼がハリストスに屬する如く斯く我等もハリストスに屬するなり。蓋我若し主の爾等を敗るが爲に非ずして建つるが爲に我等に與へし權を以て愈誇ることも愧を得ざらん。然れども我は書を以て爾等を驚かすに似んことを欲せず。一〇 蓋言ふ者あり其書は重くして強し其會ふ時の容は擴く其言は陋しと。一二 若る者は知るべし我等が離れ居る時番の言若何會ふ時行ふ所も亦是くの如きを。一三 蓋我等は敢て己を彼の自ら憂むる者に匹へ或は較ぶるを爲さず。彼等が己を以て己を度り己を以て己に較ぶるは無智なり。一四 然れども我等は量を除けて誇らんとするに非ず。乃神が我等に與きたる分の量に備ふ此れ爾等にまで至る所の量なり。一五 蓋我等は爾等にまで至らざる者の如く己を強るに非ずハリストスの福音を以て爾等にまで至りたればなり。一六 我等は量を除けて他人の功勞を以て誇るに非ず。即爾等の倍の長するに隨ひて爾等の中に益我等の分を盛大にせんことを認む。一七 此れ爾等より遠き處にも福音を傳へん爲にして他人の分に於て己に備へたる者を以て誇らん爲に非ず。一七 誇る

者は主に由りて誇るべし。一ハけだしむつか
蓋自ら譽むる者は罵させらるゝに非ず。即主の譽
むる所の者なり。

一願はくは、爾等少しく私の無智を容れよ、然れども爾等は已に我を容る
なり。我神に於ける熱心を以て、爾等の爲に熱心するに因る。蓋我爾等を一の夫に
聘定せり、淨き處女として、ハリストスに獻げん爲なり。惟我恐る、蛇が其狡猾を以て
エカを誘ひし如く、爾等の意思も壞はれて、ハリストスに由る横實を失はんことを。
蓋若し人來りて、我等が未だ傷へざりし他のイエスを傷へ、或は爾等が未だ受けざ
りし他の神を受け、或は未だ受けざりし他の福音を承くる時は、爾等善く之を容るゝ
ならん。我意ふに、我は一も至大なる使徒に亞る所なし。蓋我言には、僅しき
知識には然らず。然れども我等は一切の事に於て全く爾等に知られたり。我爾等の
高くせられん爲に、自ら卑くなり、價なくして、爾等に神の福音を傳へしは、罪を犯し、
か。我他の教會に費を爲さしめて、爾等に役めん爲に、之より供給を受けたり。爾等の
中に居りし時、乏しかりしと、賤、何人をも累はさせざりき。蓋マケドニヤより來り

し兄弟は我の乏しきを補ひたり且凡の事に於て我自ら守りて爾等を累はさざりき
 の後亦自ら守らん。一〇我に在るハリストスの眞實に由りて云ふ此の誇はアハイヤ
 の諸方に於て我より容はれざらん。一何の故ぞ爾等を愛せざるに由るか。神之を知
 る。一二然れども我が行ふ所は仍之を行はん機を奪ゆる者には機を絶たん爲彼等を
 して其誇る所の我等と同じからしめん爲なり。一三蓋此くの如き偽の使徒詭譎の工
 者はハリストスの使徒の貌に變ず。一四此れ奇とするにも足らずサタナ自ら光明の
 天使の貌に變ずるに因る。一五故に彼の役者が我の貌に變ずるも亦大なる事
 に非ず彼等の終は其行に循はん。一六我又言ふ人我を無智なる者と意ふ勿れ然ら
 ずば或は我を無智なる者として受けよ我も聊か誇るを得ん爲なり。一七我が言ふ所
 は主に循ひて言ふに非ず乃此の誇の分に於て無智者の如く言ふなり。一八多くの
 人肉に循ひて誇るが故に我も亦誇らん。一九爾等は智なる者にして喜びて無智
 なる者を容る。二〇人若し爾等を奴隸と爲し人若し爾等を映ひ人若し爾等を切り人
 若し爾等に驕り人若し爾等の面を批たば爾等之を容る。二一我耻ぢて言ふ是が爲に

は我等弱かりき然れども人若し何をか敢て誇らば無智に由りて言ふ我も敢てするなり。二三 彼等エウレイ人なるか我も然り。イスライリ人なるか我も然り。アウラアムの裔なるか我も然り。二四 ハリストスの役者なるか狂して言ふ我愈れり。我勞に服せしこそ較多く稼うたれしこそ過度獄に繋がれしこそ更に多く死に瀕せしこそ一醫なりき。二五 我五次イウテヤ人より鞭を受けたり四十に一を減せり。二六 三次杖にて撲たれ一次石にて撃たれ三次舟壊られて一日一夜我深淵に在りき。二七 異族を爲し河の難盜賊の難同族の難異邦人の難色の中の難野の中の難海の中の難僞兄弟の中の難に遇ひ。二八 勞し疲れ、屢寝れず飢る渴き、屢禁食し凍れ視たりき。二九 他諸事の外に我に毎日人人の集合、悉くの教會の慮あり。三〇 誰か弱りて我も弱らざらん誰か腹きて我熱中せざらん。三一 若し我誇るべくば我の弱きを誇らん。三二 神我等の主イエススハリストスの父世世に祝讚せらるる者は我が斷らざるを知る。三三 Damasque に於てアレクサ王の邑宰我を執へんを欲して Damasque の邑を守れり我を以て隔より増に狹ひ廻り下されて彼の手を脱れたり。

第三節

一 誇ることには我が爲に益する所なし蓋我主の顯現と默示とに及ばん。二
我ハリストスに在る一人を知る此の人は十四年前に肉體に在りてか知らず肉體の
外に在りてか知らず神之を知る第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て其肉
體に在りてか肉體の外に在りてか知らず神之を知らん樂園に擧げられて道ひ離き
盲人の語る能はざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん己を以て誇
らす或は我の弱きを誇らんのみ。我若し誇らん欲せば無智なる者爲らす蓋眞
を言はん然れども我自ら戒む恐らくは人我に見る所或は我に聞く所に過ぎて我を
擬らん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に一の刺は我が肉體に與へ
られたり即サタナの使なり我を撃たん爲我が高ぶらざらん爲なり。ハ我三次主に之
を我より離さんことを求めたり。然れども主は我に酬へり我の恩寵は爾に足れり
蓋我の能は弱き中に行はる故に我寧甘んじて我が弱きを誇らんハリストスの能
の我の内に寓らん爲なり。一是を以て我柔弱陵辱窮乏窘逐銀紐をハリストス
の爲に受くるを以て喜ぶ爲す蓋我が弱き時に於て我強し。二我誇りて無智に至れ

り、爾等我に此を爲さしめたり。我は反りて爾等より譽めらるべかりき、盜我無きが如
き者なりと雖、何事に於ても至大なる使徒等に亞らざるなり。一三、使徒の證は、爾等の
中に、凡の忍耐に於て、休徵奇跡異能に於て顯れたり。一四、爾等には、他の教會の前
に、何の虧くる所あるか、或は我が自ら爾等を累はさざりし事のみか、請ふ、此の罪を我
に恕せ。一五、親よ、我第三次に爾等に往く備を爲せり、又爾等を累はさざらん、盜我爾等
の所有を求めず、乃爾等を求めむ。子は親の爲に積むべきに非ず、親は子の爲に積むべ
ければなり。一六、我甚爾等を愛して、爾等に愛せらるゝこと少しと雖、爾等の靈の
爲に甘心じて我が物を毀じ、及び我が身を盡さん。一七、或は言はん、我自ら爾等を累は
さざりしと雖、巧なる者にして、詭計を以て爾等より取れり。一八、我は爾等に遣は
し、老の中、誰に由りて爾等より利を獲しか。一九、我方に請ひ、又一の兄弟を彼と偕
に遣せり、方トは何の利を爾等より獲しか、我等は同じき神を以て行ひしに非ずや、同
じき跡を履みしに非ずや。二〇、爾等又我等は爾等に自訴すこと意ふか、我等はクリスト
スに在りて神の前に言ふなり、至愛の者よ、是れ昔爾等の徳を建てん爲なり。二〇、盜

我われ恐おそる我われが来きたりて爾なんぢら等らを見みんこぞ我われが欲ほつする所ところの者ものの如ごとくならず又爾またなんぢら等らの我われを見みんこぞ爾なんぢら等らの欲ほつする所ところの者ものの如ごとくならず即すなはち我われが爾なんぢら等らの中うちに争あらそ闘たう相あ嫉み忿い怒かり分わか争れ競せん言げん際さい刺しり駭たか狩かり淫やみ亂みだれに遇あはんこぞを二且かつ恐おそる我われが復また來きたる時とき我われが神かみは我われを爾なんぢら等らの中うちに卑ひくうし我われ多おほくの者ものが先まに罪つみを犯かして其その行おこなひし汚せう穢たい淫いん行かう邪じや修しゆを悔くいざりしに縁よりて哭なかんこぞを

第三章

一此これれ我われ第だい三さん次じに爾なんぢら等らに往ゆく二三にさん證しょう者しやの口くちを以もつて凡およそこはたしかれん

二我われ先まに言いへり復また爾なんぢら等らに會あふが如ごとく今いま離はなれ居をる時とき書しよして先まに罪つみを犯かし者もの及および其その餘あまの業しぎうに達たつす我われ復また來きたる時とき恕ゆるさざらん三爾なんぢら等らハリストスが我われの中うちに陷かたしるを求もとむるに因よる彼かれは爾なんぢら等らの爲ために弱よわきに非あらず乃すなはち爾なんぢら等らの中うちに強つよし蓋あは彼かれは弱よわきを以もつて十字じゆじ架かに釘ていせられしと聖せい神かみの能ちからを以もつて生いく我われ等らも彼かれに在ありて弱よわしと聖せい神かみの能ちからを以もつて彼かれと偕ともに爾なんぢら等らの中うちに生いきん四爾なんぢら等ら偕ともに居をるか自みづから言いふよ爾なんぢら等ら自みづから試かみよ豈あら自みづから知しらずや若もし爾なんぢら等らの中うちに宜よろしからざる所ところなくばイイススがハリストスが爾なんぢら等らの中うちに居をるこぞを我われ等らに至いたりては爾なんぢら等らが我われ等らの宜よろしからざるなきを知らんこ

一 ことを信ず。七 神に祈る。爾等何の惡をし行はざらんことを、是れ我等の宜しき事の形れ
一 人為に非ず。乃 我等宜しからざるが如くなりとも、爾等善を行はん為なり。八 盜我等
は眞實に遊ひて力なく眞實に順ひて力あり。我等の弱くして、爾等の強き時は、我等
喜ぶ、我等の祈る所は、即 爾等の全備ならんことなり。一〇 故に我離れ居る時、此を奮
す、會はん時に、主が我に敗ぶる爲に非ずして、速つる爲に與へし權に由りて、殿賃を用
ゐざらん為なり。一一 之を要するに、兄弟よ、愛べ、全備に速め、慰を得よ、意を同じくせよ、
和睦せよ、然らば仁愛和平の神は、爾等と偕に在らん。一二 爾等聖なる接吻を以て互に
安を問へ。衆聖徒爾等の安を問ふ。一三 願はくは我等の主、イエス・ハリストスの恩寵、
神父の仁愛、聖神の交親は、爾等衆と偕に在らんことを「アミン」

コリンブ後書

五四六

聖使徒パウロがガラテヤ人に達する書

一 **第二** パウル人に由るに非ず人を以てするに非ず、乃 イイススハリストス及び彼を死より復活せしめし神父を以て立てられたる使徒、及び我と偕に在る衆兄弟は、書してガラテヤの諸教會に達す。願はくは恩寵と平安とは、神父及び我等の主イイススハリストスより爾等に賜はらんことを。彼は神我等の父の旨に遵ひて我等を今の惡しき世より救はん爲に己を我等の罪の爲に與へたり。光榮は彼に歸して無窮の世に至らん「アミン」。我怪しむ爾等が新く速に爾等をハリストスの恩寵に召し、者を離れて他の福音に遷れることを。此れ他の福音に非ず、但或人が爾等を擧げて、ハリストスの福音を紛更せんと欲するのみ。然れども或は我等も或は天よりする使者も我等が曾て爾等に福音せし所に異なる福音を傳へば、「アナヌマ」たるべし。我等が先に言ひし如く、今も亦言ふ、爾等が曾て受けし所に異なる福音を爾等に傳ふる者あらば、「アナヌマ」たるべし。一〇 我今人の心を得んと欲するか、神の心

を得んぞ欲するか、抑人を悦ばしめんことを勉むるか、若し我仍人を悦ばしめば則
ハリストスの僕たらざらん。二二兄弟よ、我爾等に告ぐ、我が傳へし福音は人に由るに
非ず。二三我人より之を受け、之を學びしに非ず、乃イススハリストスの默示に
由るなり。二四爾等は我が先にイウテヤ教に在りし時に行ひし所を聞けり、即我甚
しく神の教會を嘗て送し之を殘害し、一四且イウテヤ教に進歩して、我が同族の中の年
相若しき多くの人に超む、極めて先祖の遺傳に熱中せり。一五然れども我が母の胎よ
り我を簡びて其恩寵を以て我を召し、神が、一六悦びて其子を我が内に願し、我をし
て之を異邦人に福音せしめんさせし時、我直に血肉と相違らず、一七亦イエルサリム
に上りて、我より先に使徒と爲りし者を見ず、乃アラワヤに往き、後又ダマスクに返
れり。一八嗣ぎて三年を越えて、ペトルを見ん爲にイエルサリムに上り、十五日間彼と
偕に居たり。一九他の使徒は、主の兄弟イアコフの外誰をも見ざりき。二〇我が爾等に
番する所の者は、親よ、神の前に在りて跪らす。二一厥後我シリヤ及びキリキヤの諸地
に往けり。二三イウテヤに在るハリストスの諸教會は我が面を繼らざりき、二四彼等

は弟先に我等を容遂せし者、今其先に殘害せし教を福音すさ聞き、二四我に因りて神を讚榮せり。

第三篇 一つ 嗣ぎて十四年の後、我ワルナツタ倍に復オエルサリムに上れり、ネトをも共に擡へたり。我默示に依りて上り、彼等に我が異邦人の中に傳ふる所の福音を告げ、又私に名ある人等に告げたり、我が勤勞し或は勤勞せしことの徒然に歸せざらん爲なり。然れども彼等は我と倍に在りしネトにも、其モリ人なりと雖強ひて御禮を受けしめざりき。私に入りし僞兄弟竊み入りて、我等がハリストスイエスに於て有つ所の自由を窺ひ、我等を奴隷とせんさ欲せし者には、我等一時も之に譲りて服せざりき、福音の眞實の用等の中に存せん爲なり。名ある者に至りても、其皆て何かなる人だりしと雖、我に於て異なる所なし、辨は貌を以て人を取らず。名ある者も我に増益せし所なし。是に反して、福音が御禮を受くる者の爲に、ペトルに委ねられし如く、我には御禮を受けざる者の爲に委ねられたるを見、(蓋ペトルに御禮を受くる者の中に、其使徒職を助けし者は我にも、異邦人の中に之を助けたり) 且我に與

へられし恩寵を知りて、イアコフ、キス、イオアン、柱と意はるゝ者は、我及びワルナツに
交親の體として右の手を與へたり、我等は異邦人に、彼等は割禮を受くる者に往かん
爲なり。一〇 唯彼等の願ひし所は、我等が貧者を記念せんことに在り、我勉めて是の事
を行へり。二 べトルがアンタナヒヤに來りし時、我面り彼を詰り、責むべき所あ
りし故なり。二三 蓋イアコフより來る者の未だ至らざる先には、彼異邦人と併に食
へり、其至りし後には、割禮を受くる者を畏れて、退きて別れたり。二四 其餘のイウテヤ
人も、彼と併に偽を爲せり、ワルナツも其偽に與するに至れり。二五 我は彼等が福音
の眞實に循ひて正しく行はざるを見て、衆人の前に於てべトルに謂へり、若し爾イウ
テヤ人たるに、度生すること、異邦人の如くにして、イウテヤ人の如くならずば、何ぞ異
邦人をしてイウテヤ人の如く度生することを使むる。二六 我等は本性イウテヤ人に
して、異邦よりせし罪人に非ず、然れども人は律法の行に由るに非ず、唯イイスス
ハリストスを信するに由りて、我等もハリストス、イイススを
信ぜり、ハリストスを信するに由り、律法の行に由らずして、我等もハリストス、イイススを
信ぜり、ハリストスを信するに由り、律法の行に由らずして、我等もハリストス、イイススを

法の行に由りては、人一人も義させらるゝなし。一七〇 若し我等ハリストスに由りて義せられんことを求めて、自ら猶罪人たらば、豈ハリストスは罪の役者たるか。非らず。一七二 蓋若し我が殺ちたる者、我復之を述てば、則己の罪人たるを示すなり。一七三 我律法に由りて律法の爲に死せり、神の爲に生きん爲なり。我ハリストスと共に十字架に釘せられたり。一七四 既に我生くるに非ず、即ハリストスは我の中に生くるなり。我が今肉體に在りて生くるは、我を愛して我が爲に己を捨てし神の子を信するに由りて生くるなり。一七五 我神の恩寵を廢せず、蓋若し義させらるゝこと、律法に由らば、ハリストスの死せしことは徒然なり。

第三卷

一七六 無知なる彼ガリヤ人よ、誰か爾等を惑はして眞實に従はしめざる、蓋イ

イススハリストスは爾等の目の前に像られしこと、爾等の中に釘せられしが如くなりき。一七七 我惟此の事を爾等に聞はんことを欲す、爾等が神を受けしは、律法の行に由るか、抑或きて信せしに由るか。一七八 爾等斯く無知なるか、神を以て始めて、今肉を以て終ふるか。一七九 爾等斯く多く苦を受けしこと、徒然なるか、豈止徒然ならんや。一八〇 爾等に神を賜ひ、且

爾等の中に異能を行ふ者は、律法の功に由るか、抑聞きて信ぜしに由るか。斯くア
 ウラアムは神を信じたり、此れ彼に歸して義と爲れり。故に信に由る者は是れ、即
 アウラアムの子なりと知れ。聖書も預め神が信に由りて異邦人等を義と爲さんこ
 とを見て預めアウラアムに稱許して習へり、萬民は爾に由りて祝福せられんこと。是
 くの如く、信に由る者は信なるアウラアムと倣に祝福せらるゝなり。一〇凡そ律法の
 行に由る者は、爾に服す、盜録せるあり、凡そ恒に律法の書に載する所に遊びて之を
 行ひ盡さざる者は、爾はるゝなりと。二律法に由りては人一人も神の前に義とせられ
 ざること明なり、盜曰ふ、殺人は信に由りて生きんこと。三然れども、律法は信に由らず、
 乃曰ふ、此を行ふ人は、此に由りて生きんこと。四ハリストスは我等の爲に、罪と爲り
 て、我等を贖ひて、律法の罪より免れしめたり、盜録せるあり、凡そ木に懸れる者は、罪は
 れたりと。五是れアウラアムの祝福が、ハリストスに由りて、異邦人に及ば
 ん爲、我等信に由りて許約せられし、聖神を受けん爲なり。六兄弟よ、或人の信に、爾
 て、貧乏人の契約すら、既に定まりたらば、之を廢し、或は之を加ふることなし。七夫れ

許約はアウラアム及び其裔に賜はりたり。多くの者を指して云ふが如くに諸裔は云はす。乃一の者を指すが如くに爾の裔は云ふ是れ即ハリストスなり。一七我之を言ふ先に神より定められたるハリストスに於ける契約は四百三十年の後に願れし律法之を廢して許約を處しとする能はず。一八盜竊若し律法に由らば已に許約に由らず然れども神はアウラアムに許約に由りて之を賜へり。一九然らば律法は何ぞや。此れ後に卵の故に由りて許約の屬する所の裔の來るに及ぶまで散けられし者にして天使等に依りて中保者の手を以て授けられたり。二〇夫れ中保者は一の者に有るなし而して神は一なり。二一然らば律法は神の許約に反る。非らず。盜若し生かすを得る律法與へられしならば義させらるゝは眞に律法に由るならん。二三然れども聖書は萬人を卵の下に閉せり許約がイスラスハリストスを信するに由りて信者に與へられん爲なり。二四信の來らざる先には我等律法の下に隠られ閉されて信の顯るゝを俟てり。二五斯く律法は我等をハリストスに導く師傳たりき我等信に由りて義させられん爲なり。二六信の來りし後我等は已に師傳の下に在らず。二七盜竊若し

皆ハリストスイエスを信するに由りて神の子なり。二七 爾等皆ハリストスに於て洗を受けし者はハリストスを衣たり。二八 既にイウテヤ人もモリン人もなく奴隷も自主もなく、男性も女性もなし。蓋爾等皆ハリストスイエスに在りて一なり。二九 若し爾等ハリストスに屬せば、則アウラムの裔たり、且許約に由りて嗣子たるなり。

第四章

一 我亦曰ふ嗣子は全業の主たり、雖其童家の時に於ては僕に異なるなし。

二 乃父の定めし期に至るまで、受託者及び家宰の下に在り。是くの如く我等も童家の時に於ては世の元行に服役せり。然れども期満つるに至りて神は其子を遣じ、彼は女より生れ、律法下の者となれり、律法下の者を贖ひ、我等をして子たるを得しめん爲なり。且爾等子たるに由りて、神は爾等の心に其子の神、「アッリ」父と呼ぶ者を遣せり。故に爾既に僕ならず、乃子なり、若し子ならば、イエスハリストスに由りて神の嗣なり。然れども蓋に爾等神を識らずして、本性神ならざる者に事へたり。九 今神を識りて、爾等に識られて、何ぞ復弱く且卑しき元行に返りて、再之に事へんを欲する。一〇 爾等日と月と節と年とを守る。一一 我爾等の爲に恐る、我が爾等の中に勞

せしことこの徒然に歸せんことを。一三兄弟も爾等に求む我の如くなれ蓋我し爾等の如き者なり爾等一し我を僕しことなし。一四爾等知る我初身の弱きを以て爾等に福音したりと雖も一五爾等は我の身に在りし我が試勝を卑しめず厭はず乃神の使の如くハリストスイエスの如く我を受けたり。一六其時爾等何如に弱なりしか。我爾等の爲に置す若し能す可くば爾等己の目を抉りて我に與へしならん。一七然らば我眞實を爾等に首ふに縁りて爾等の敵と爲りしか。一八彼等が爾等の爲に熱中するは善き意に非ず乃爾等を離して爾等が彼等の爲に熱中せんことを欲するなり。一九善事の爲に恒に熱中するは善し唯我が爾等と偕に居る時に於てするのみならず。二〇我が小子よ我復爾等の爲に産の劬勞に在りてハリストスが爾等の中に形づくらるゝを待つ。二一或はくは我今爾等と偕に在りて我が聲を變せんことを蓋我爾等の爲に惑ふ。二二爾等律法の下に在らんを欲する者は我に語れ爾等律法を聞かざるか。二三蓋縁せるありアリアムに二人の子あり一は婢よりし一は自主の婦よりせり。二四然れども婢よりせし者は肉に循ひて生れ自主の婦よりせし者は許約に因

れり。二四 斯に勢あり此れ二約なり一はシナイ山よりし生みて奴隷と爲す此れ即
 アガリなり。二五 蓋アガリはアラワヤのシナイ山なり今のイエルサリムに當る彼は
 其諸子と共に奴隷たればなり。二六 然れども上なるイエルサリムは自主にして是れ
 我等衆の母なり。二七 蓋録せるあり妊ます生まざる者樂め産に苦しませざる者聲を揚
 げて呼べ蓋棄てられたる婦は夫ある者に較ぶれば更に多くの子ありと。二八 兄弟よ
 我等はイサアクの如く許約の子なり。二九 惟其時肉に循ひて生れし者が神に循ひて
 生れし者を蓋逐せし如く今も亦然り。三〇 然れども聖書は何をか言ふ婢及び其子を
 逐ひ出せ蓋婢の子は自主の婦の子と共に嗣子と爲るを得ず。三一 故に兄弟よ我等は
 婢の子に非ず乃自主の者の子なり。

第三

一 是の故に爾等ハリストスが我等に賜ひし所の自由に堅く立ちて復奴隷
 の軛に服する勿れ。二 視よ我バブル爾等に言ふ若し爾等猶禮を受けばハリストスは
 更に爾等に益なし。三 我復凡そ割禮を受くる人に贈す彼は全律法を行ふべし。四 爾等
 律法に由りて殺させらるゝ者はハリストスを離れ恩寵より絶たれたり。五 我等に至

りては神を以て信仰に由りて義させらるゝ望を得んことを俟つ。蓋ハリストス
 イイススに在りては割禮を受くるも割禮を受けざるも益なく唯愛を以て行ふ信は
 益あり。爾等善く行けり誰か爾等を阻みて眞實に願はしめざる。此の勸は爾等を
 召す者よりするに非ず。僅なる隙は盡くの逆怒を醸くす。一〇我主に由りて爾等に
 他意なからんことを信す爾等を惑はす者は何人に論なく其定罪を受けん。一〇兄弟
 よ、我若し尙割禮を傳ふるならば何ぞ尙密逐せらるゝ。若し然らば十字架の癩は息ま
 ん。一三願はくは爾等を亂す者は絶たれん。一三兄弟よ爾等は召を蒙りて自由を得た
 り唯爾等の自由は肉體に機會を與ふべからず、乃愛を以て互に事へよ。一四蓋全
 律法は一書を以て之を成ふ曰く、爾の隣を愛すること己の如くせよと。然れども
 若し爾等相喰み相喰はば憤め恐らくは相滅されん。一六我百ふ爾等神を以て行へ、然
 らば肉の慾を成さざらん。一七豎肉の欲する所は神に逆ひ神の欲する所は肉に逆ふ、
 斯の二の者相敵して爾等の願ふ所は之を行はざるに至る。一八若し爾等神に導かれ
 ば、則律法の下に在らず。一九肉の行は顯著なり、即姦淫邪淫汚穢邪侈、二〇拜偶像、

巫術仇讐争闘、如嫉憤怒分争、朋黨異端、二一 怨恨兇殺、洗滌醫藥等の類是なり。我が先
 に爾等に言ひし如く、今復預め言ふ、此くの如き事を行ふ者は神の國を嗣がざらん。
二二 神の果は仁愛喜悅平安恒忍仁慈矜恤信仰、二三 溫柔節制なり。此くの如き者に
 は律法なし。二四 凡そハリストスに屬する者は肉體を其情及び慾と共に十字架に釘
 せり。二五 若し我等神に依りて生きば亦神に依りて行ふべし。二六 虚榮を尙び相怒り、
 相妒む勿るべし。

第四圖 一兄弟よ若し人過に陥らば爾等屬神の者は溫柔の神を以て之を規し且
 自省みるべし恐らくは爾も亦誘はれん。二 爾等互に荷を負へ是くの如くしてハ
 リストスの法を盡さん。盗人若し有るなくして自ら有りせば是れ自ら欺くなり。
四 人各其行を勵ふべし然らば其誘る所は唯己に在りて他人に在らざらん。五 盗
 人各己の任を負はん。教を受くる者は其所有を以て教ふる者に分つべし。自ら
 ら欺く勿れ神は慢る可からず。人の種く所の者は亦其獲る所と爲らん。其肉に種く
 者は肉より腐敗を獲り神に種く者は神より永遠の生命を獲らん。我等善を行ひて

偷む可からず、盜若し弛ますば、期に届りて獲らん。一〇の故に我等時の偷存する間は、悉くの人に特に同僚の者に善を爲すべし。一一の親よ、我手づから爾等に幾許か多く得したるを。一二の肉を以て誇らんを欲する者が、爾等を強ひて物禮を受けしむるは、唯ハリストスの十字架の故に由りて密運を受けざらん爲のみ。一三の盜物禮を受くる者は、己も律法を守らず、然るに爾等に物禮を受けしめんことを欲するは、爾等の肉を以て誇らん爲なり。一四の我に在りては、我等の主イエスハリストスの十字架の外に誇る所なし、此に由りて世は我の爲に釘せられたり、我世に於ても亦然り。一五の盜ハリストスイエスに在りては、物禮を受くるも物禮を受けざるも益なく、惟新なる受遺物は益あり。一六の凡そ此の規に遊びて行ふ者は、願はくば平安と慈憐とを蒙らん、神のイヅライリも亦然り。一七の今より後人我を援す勿れ、盜我は主イエスの遺規を我が身に負へり。一八の兄弟よ、願はくば我等の主イエスハリストスの恩寵は、爾等の神と併に在らんことを「アメン」。

ガラオヤ格

五〇

聖使徒パウロがエフesus人に達する書

一 パウル神の旨に由りてイエススハリストスの使徒と爲れる者は、エフesusに在る聖徒ハリストス、イエススに於て信なる者に書を達す。二 願はくは恩寵と平安とは神我等の父及び主イエススハリストスより爾等に賜はらんことを。三 祝慶せらる。四 故神我等の主イエススハリストスの父彼はハリストスに緣りて天に於て凡の屬神の祝福を以て我等を祝福せり。五 蓋我等を創世の先より彼の中に備へり我等が彼の前に愛を以て聖にして疵なからん爲なり。六 我等を其旨の恵に循ひて、イエススハリストスに由りて己の子と爲さんことを預定せり。七 其至愛の者に在りて我等に賜はりし恩寵の光榮の讚美せられん爲なり。八 我等彼に在りて其恩寵の豐厚なるに循ひて其血を以て贖を蒙り、暗罪の赦を得るなり。九 神は我等に其恩寵を増加して凡の智慧と知識とを賜へり。一〇 蓋神は預め彼の内に藏めたる己の恵に循ひて、我等に其旨の奧義を示せり。一一 是れ定めたる期の満つるに屆りて天に在り地に在る萬物

をハリストスの下に歸一せしめんとする者なり。一彼に在りて我等嗣子と爲れり、蓋己の意の欲する所に歸ひて萬事を行ふ者の旨に緣りて預め此が爲に定められたり。二我等先にハリストスを頼める者が彼の光榮の讚美を爲さん爲なり。三彼に在りて我等も眞實の言、我等の救の福音を聞き且彼を信じて許約の聖神に印せられたり。四是れ我等の嗣業の聘買にして、榮の贖を爲す者彼の光榮を讚美せしむる者なり。五故に我も我等がハリストスに於ける信及び衆聖徒に於ける愛の事を聞きて、一斷わす我等の爲に感謝し我が所贖の時に我等を記憶す。二願はくは我等の主イエスハリストスの神光榮の父は我等に智慧と默示との嗣を與へて彼を觀らしめ、一及び我等が心の目を明にせんこと、我等が其召の如何に其聖徒の爲に備ふる嗣業の光榮の豐厚なること、何如、一及び我等が權の力の行爲に由りて信する者の中に其能の極めて大なること、何如を知らん爲なり。二蓋彼は其力をハリストスの中に顯して之を死より復活せしめ之を己の右に天に坐せしめて、三凡の首領、權柄、能力、主制及び凡そ此の世のみならず來世にも稱ふる所の名

の上に置き、二三一切を以て其足下に服せしめ、彼を一切の上に立て、教會の首と爲せり、二三教會は、乃彼の身にして、一切を以て一切を満つる者の充満なり。

第二節 神は爾等罪と怒とに縁りて死せし者をも生かせり、蓋爾等罪に此等を行ひて、斯の世の風習に備ひ、空氣中の穢ある者、今悖逆の子の中に行為する神の旨に従へり。我等も皆爾に其中に在りて、我が肉體の慾に備ひ、肉體と慾念との欲する所を行ひて、他の者の如く、本性に由りて怒の子たりき。然るに、矜恤に富める神は、我等を愛する大なる愛に縁りて、我等即ち由りて死せし者も、ハリストスに備に生かせり、(爾等恩寵を以て救はれたり) 彼に備に復活せしめ、ハリストスに在りて、天に坐せしめたり。未來の世に於て、其ハリストスに在りて、我等に施し、仁慈を以て、恩寵の溢れたる富を示さん爲なり。蓋爾等は恩寵を以て、信に由りて救はれたり、是れ爾等に由るに非ず、神の賜なり。一行に由るに非ず、人の誇ることなからん爲なり。一蓋我等は彼の遣りし者にして、ハリストスに在りて、善き功の爲に遣られたり、即神が我等の行はん爲に預め備へし所なり。一故に記

憶せよ、爾等諸に肉體に緣る異邦人手を以て肉體に行ふ割禮を稱ふる者より無割禮
と稱へられし者は、一二其時ハリストス無く、イスマイリの民に疏く應許の諸約に與
らず、茲を有たす世に在りて神なき者たりき。一三然れども今はハリストス、イエス
に在りて爾等諸に遠かりし者は、ハリストスの血に由りて近くなれり。一四蓋彼は我
等の和平なり、二の者を一と爲し、隔の牆を毀ち、一己の身を以て仇を廢し、教を以て
諸賊の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者を以て己に於て、二の新なる人を遣り、
一又十字架にて仇を殺じ、此を以て、一の身に於て、二の者を神と復和せしめん爲な
り。一七且來りて、爾等遠き者及び近き者に和平を福音せり、一八蓋彼に由りて、我等二
の者は、一の神に在りて、父に近づくを得るなり。一九故に爾等既に異民或は他邦の人
たらず、乃、諸聖徒の同邦の人神の家屬なり、二〇爾等は諸使徒と諸預言者との基に
建てられたり、イエス、ハリストスは自ら其隅石なり。二一此の上に全體は組み立て
られ、次第に築きて、主に於ける聖殿と爲る、二二此の上に爾等も神に由りて神の居處
として共に建てらるゝなり。

第三圖 此に線りて我ハワル爾等異邦人の爲に、イイススハリストスの囚人を爲れり。爾等は已に爾等の爲に我に與へられし神の恩寵の定制を聞けり。即默示を以て我に與義の示されし事なり。我が前に略習じしが如し。爾等之を讀みて之に由りて、我がハリストスの與義を曉れることを知るを得。此の與義は、前代に於て人の諸子に示されしこと。今聖神を以て聖使徒と預言者とに顯されしが如く爲らざりき。即 異邦人等も、ハリストス イイススに在りて、福音に由りて、共に嗣子と爲り、共に一體と爲り、共に神の許約に與る者と爲ること。是なり。我は神の能の行ふ所を以て我に與へられし其恩寵の賜に線りて、此の福音の役者と爲れり。我衆聖徒の中に最も小き者に、ハリストスの量り難き富を異邦人に福音し、且イイススハリストスを以て萬物を遣りし神の中に永世より隠れたる與義の定制の何なるを衆人に顯す所の。此の恩寵は與へられたり。今教會に由りて、天に在る首領權柄に神の萬殊の智慧の示されん爲なり。是れ永世よりの定制がハリストス イイスス我等の主によりて行ひし者に備ふなり。彼に在りて、我等彼を信するに由りて、毅然として切望を

働きて、神に近づくを得。一三故に我爾等に求む我が爾等の爲に受くる患難に由りて
 心を失ふ勿れ、此れ爾等の光榮なり。一四此に緣りて我は我が主イエスハリストス
 の父、一五即天に在り地に在る凡の父たる事の由りて名づけらるる者の前に我が
 膝を風む。一六願ばくは彼は其光榮の宮に備ひ其神を以て爾等に内なる人に於て強
 く堅められ、一七信に由りて、ハリストスの爾等の心に居るを賜はんことを、一八爾等
 が愛に根ざされ基づけられて、衆聖徒と偕に關ささし見ささし深ささし高ささしの何なるか
 悟り、一九及びハリストスの測り難き愛を知るを得ん爲爾等が凡の神の充満に滿て
 られん爲なり。二〇夫の我等の中に行爲する能に備ひて、我等が凡を求むる所或は思
 ふ所よりも極めて多く爲すを得る者には、二一願ばくは光榮は教會に於て、ハリスト
 スイエスに因りて萬代彼に歸して、世世に至らんアミン。

第四節 一此に緣りて我、主の爲に囚たる者は爾等に求む爾等が召されたる召に稱
 ひて行へ、二凡の謙遜と溫柔と恒忍とを以て愛に因りて互に恕せよ、三務めて和平の
 繫を以て、神の一なるを守れ。四體は一神は一爾等が召されたる召の望の一なるが如

し、主は一信は一洗禮は一、神萬衆の父は一なり、彼は萬有の上^{うへ}に在り、萬有を貫き、我等萬人の中に在り。然れども我等各人に恩寵の與へられしは、ハリストスの賜の^{たまもの}に備ふなり。故に云へるあり、高きに登り、撈者を撈にし、人々に賜を與へたりき。夫れ登れりきは、彼が先づ地の最下なる處に降りしを示すに非ずや。降りし者は、彼、即、諸天の上に登りし者なり、此れ萬有を充たさん爲なり。一、彼が與へし者は、使徒あり、預言者あり、福音者あり、牧師及び教師あり、一、聖徒を全備せしめ、服役の事を行ひ、ハリストスの體を建て、一、我等皆信と神の子を識る知識の一なるに、成全の人を爲るに、ハリストスの全き成長の量に至るに迫ふ、一、我等は復嬰兒にして、凡の教の風に揺かし、涙はされて、人の詭計及び試誘の巧なる術に惑はさるゝ者と爲らず、一、愛を以て、眞實を守りて、一切の事を彼、即、首たるハリストスに於て生長せしめん爲なり。一、彼よりして全體は、凡の相輔れる關節を以て組織結合せられ、百體、各其分量に協ひ、其力行に備ひて、益生長し、愛を以て自ら建つるを致す。一、故に我之を言ひ、且主に由りて、戒む爾等、は復他民が其虚しき智慧に備ひて行ふ

が如く行ふ勿れ。一八 彼等思念暗く其無知及び心の頑なるが故に神の生命に離れ、
其本心を失ひて、邪修を恣にし、凡の汚穢を貪り行ふ。二〇 然れども爾等は斯くハリ
ストスを學びしに非ず。二一 爾等が彼に聞き且眞實は、イヌスに在るに由りて、
彼に學びしは、三 惑を爲す慾の中に朽つる弱き人の先の習を脱ぎ、
爾等の智慧
の神を新にして、二四 眞實の義と聖さを以て、神に備ひて造られし新なる人を衣るこ
となり。二五 故に爾等 隣を去りて、各其隣に眞實を言へ、蓋爾等は互に肢なり。二六
怒りて罪を致す勿れ、日は爾等の怒の間に入る可からず。二七 惡寛に處を興ふる勿れ。
二八 竊みし者は復竊む勿れ、勞勞して手づから善き工を爲せ、乏しき者に施すを得ん
爲なり。二九 凡の腐敗したる言は爾等の口より出づべからず、唯善き言信を建つるに
益ある者は出づべし、聽く者に恩寵を興へん爲なり。三〇 爾等が贖の日に印せられし
神の聖神を憂ひしむる勿れ。三一 凡の苦恨、悲慥、忿怒、隨談、防讒は、凡の毒惡と共に爾等
の中より去らるべし。三二 乃仁愛憐憫を以て相待ち相教ず、神もハリストスに
緣りて爾等を教し、が如くせよ。

第五節

故に爾等に至愛の子の如く神に效へ、愛を以て行ふこと、ハリストスの我等を愛し我等の爲に己を付して神に獻する禮物及び祭祝を爲し、燃しき香を爲し如くせよ。淫行と凡の不潔と貪婪とは爾等の中に名づけらるることだに在る可からず、聖徒に符ふが如し。又淫辭、浮言、戲謔は皆宜しからず、悔感謝せよ。蓋知るべし、凡の淫行の者或は不潔の者或は貪婪の者、即拜偶像者は、ハリストス及び神の國に於て嗣業を得ず。人盧しき言を以て爾等を惑はす可からず、蓋此等の事に因りて神の怒は悖逆の子に臨む。故に彼等に與する勿れ。爾等は素暗なりしが、今は主に在りて光なり、光の子の如く行へ。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾等神の悦ぶ所の何なるを審にせよ。一、實を續ばざる暗昧の行に與る勿れ、此れを責めよ。二、蓋彼等が隱に行ふ事は、言ふも亦耻づ可し。一、凡を責めらるる事は、光に由りて顯る、蓋凡を顯るる事は光なり。二、故に云へるあり、寐ぬる者起きよ、死よ、復活せよ、ハリストス爾を照さん。三、是を以て視て行を慎みて、無智の者の如くせず、乃智ある者の如くせよ。一、時を惜むべし、日は懸しければなり。二、是の故に思慮

なき者ものを爲なる勿なれ、乃すなはち神しんの旨めいの何なになるを覺され。一八又酒またに醉まふ勿なれ、此これに由よりて放蕩ほうたうあり、乃すなはち神しんに搯あてられ。一九聖詠せいぎと歌頌かしょうと、屬神ぞくしんの詩賦しじふとを以もつて口くちに唱なへ、心こころに和わして、主しゅを讚美さんびせよ。二〇凡おほその事こと常に我等われらの主しゅイエススハリストスの名なに因よりて、神かみち父ちちに感かん謝じやせよ。二一神かみを畏おそる、心こころを以もつて互たがひに順したがへ。二二婦つまは己おのれの夫をうに順したがふこと、主しゅに於おけるが如ごとくせよ。二三神かみを畏おそる、心こころを以もつて互たがひに順したがへ。二四婦つまは己おのれの夫をうに順したがふこと、主しゅに於おけるが如ごとくせよ。二五蓋つと夫は婦つまの首かしらたること、ハリストスが教會けいこうの首かしらたるが如ごとく、彼かれは亦また體からだの教主きゆうしゅなり。二六乃すなはち教會けいこうのハリストスに順したがふが如ごとく、斯かく婦つまも凡おほその事ことに於おいて夫をうに順したがふべし。二七夫をう己おのれの婦つまを愛あいすること、ハリストスが教會けいこうを愛あいするが如ごとくせよ、彼かれは己おのれ此これが爲ために捨すてたり。二八是これを水みづの洗せんを以もつて首かしらに由よりて潔きよめて聖せいにせん爲ため。二九是これを己おのれの胸むねに光榮くわうえいなる教會けいこう、汚けがれ或あるは穢し或あるは此これくの如ごとく類たぐひなき者ものとじて立たてん爲ため、卽すなはち是これが聖せいにして疵きずなき者ものならん爲ためなり。三〇夫をうは己おのれの婦つまを愛あいすること、己おのれの身みの如ごとくすべし、己おのれの婦つまを愛あいする者ものは己おのれを愛あいするなり。三一人未いだ己おのれの身みを惡にくむ者もの有あらず、乃すなはち之これを養やしなひ之これを温あたむること、主しゅの教會けいこうに於おけるが如ごとく。三二蓋つと我等われらは彼かれの體からだにして、彼かれの肉にくより、し彼の骨ほねよりす。三三是これの故ゆゑに人ひとは其その父母ふぼを離はなれ、其その妻つまに著つきて、二ふたの者もの一體いつたいきな

らん。二三 此の奥義は大なり、我ハリストスと教會とに於て之を言ふ。二三 然らば爾等
各其婦を愛するに己の如くすべし、而して婦は其夫を畏るべし。

第六節

子よ爾等主に在りて己の父母に順へ、蓋此れ宜しきに合ふなり。二 爾の父

及び母を敬へ、此れ許約を加へたる第一の條なり、曰く、爾等爾等を獲地に奪からん爲
なり。父よ爾等も己の子を怒らしむる勿れ、乃主の警戒と教訓とを以て之を養育

せよ。僕よ恐懼戰慄を以て横直なる心に於て肉體に屬する爾等の主に順ふこと、ハ

リストスに於けるが如くせよ。人の税を取る者の如く、唯目の前に勤むるなく、乃ハ

リストスの僕の如く、心より神の旨を行へ、甘んじて事ふるに、人に於けるが如く

せずして、主に於けるが如くせよ。盗知る人或は僕或は自主に論なく、各其行ひし

善に循ひて、主より報を受けん。主なる者よ、爾等も是くの如く、彼等に行ひて、感じ

を和げよ、天には、爾等と彼等との主偏視せざる者あるを知らばなり。二 之を究むる

に、我が兄弟よ、主及び其權の力に頼りて堅固になれ。二 神の全備の武具を衣よ、爾等

が惡魔の奸計を禦ぐを得ん爲なり。二 三 盜我等の眼は血肉に於てするに非ず、乃首

領に於てし權柄に於てし此の世の暗昧の世君に於てし天空に在る凶惡の諸神に於てするなり。一三此に因りて神の全備の武具を取れ惡しき日に於て衆を爲し凡の事を成就して立つを得ん爲なり。一四故に立ちて眞實を爾等の腰に束れ義の甲を衣。一五和平を福音する預備を以て足に履はき。一六更に信の盾を執れ之を以て惡敵の悉くの火箭を滅すを得ん。一七又救の胃及び神の劍即神の言を取れ。一八常に凡の新禱と祈願とに於て神を以て禱れ凡の敵惡忍耐を以て此を務めて衆聖徒の爲に求め、一九亦我の爲にも求めよ我に言は與へられ我が口は啓かれて、二〇我をして纏繞に在りて使を奉ずる所の福音の奧義を侃侃として宣べしめん爲我が宜しきに合ひて言ふべき所に毅然たらん爲なり。二一爾等も我の事我が爲す所の事を知らん爲に至愛の兄弟主に在りて忠信なる役者ヲヒクは悉く之を爾等に告げん。二二我特に此の爲に彼を爾等に遣せり爾等が我等の事を知り且彼が爾等の心を慰めん爲なり。二三願はくは諸兄弟は神父及び主イエイススハリストスより平安と愛と信とを獲ん。二四願はくは恩寵は純ら我等の主イエイススハリストスを愛する衆人と偕に在らん。

おたけのうた

おたけのうた

第六章

五七三

エクス書

五七四

聖使徒パウルがスリッピ人に達する書

第一

一

メワル及びカモスイ、イエスス、クリストスの僕たる者は、スリッピに在るハ

リス、トスイ、イエススに於ける衆聖徒及び諸監督と諸役事とに書を達す。二願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イエススハリストスより爾等に賜はらんことを。三我爾等を記念する毎に、我が神に感謝し、恒に我が凡の祈禱に於て、爾等衆の爲に欣びて我が祈禱を爲す、爾等が初の日より今に至るまで共に福音に與るが故なり。四我深く信ず、爾等の中に善き工を始めし者は、之を成して、イエススハリストスの日に達せん。五我が此くの如く、爾等衆を思ふは宜しきなり、蓋爾等我が心に在り、我が纏繞に及び福音を辨明し堅固にする時に於て、爾等皆我と共に恩寵に與ればなり。六神は我の證者なり、我イエススハリストスの心を以て爾等衆を愛す。七且我が祈る所は、乃爾等の愛は益知識と凡の心懐とに長じて、一〇爾等最善き事を辨へ、ハリストスの日に於て純潔にして疵なく。二

榮と歡美とを顯さんとするに在り。一三、兄弟よ、我爾等が我に在りし事が福音の益
 廣布するに助けしを知らんことを欲す。一四、我の纏繞は、ハリストスに由りて、全公麻
 及び各處に著るゝに至れり。一五、主に於ける諸兄弟の中多くの者は、我が纏繞に由り
 て力を獲て、益發然として、懼るゝなく神の言を傳ふ。一六、或る者は猜忌と競争とに因
 りて、ハリストスを傳へ、或る者は善惡を以て之を傳ふ。一七、彼の者は分争に因りて正
 直ならずして、ハリストスを宣べて、我が纏繞の苦を益さんと欲し。一八、此の者は愛を
 以て之を宣ぶ、我が福音を辨明する爲に立てられたるを知るに因る。一九、然らば何ぞ
 や、何如に驗なく、或は偽の心を以ても、或は誠を以ても、ハリストスの傳へられば、我之
 を喜び、且之を喜ばん。二〇、蓋我此の事の我が救を致さんを知る、是れ爾等の祈禱とイ
 イススハリストスの神との助に由りてなり。二一、蓋我何事に於ても、愧を得ず、即凡の
 勇敢に依りて、今も常の如く、我が身に於て、或は生、或は死を以て、ハリストスの讚榮せ
 られんことを確信希望するなり。二二、蓋我の爲には、生くること、ハリストスなり、死す
 るも亦益なり。二三、若し肉體に於て生くること、我が功に果を増さば、我何れを擲ぶべ

きを知らず。二三われふたつものあひだに介まれたり釋かれてハリストスと共に在らんことを願ふ益是れ最良なり。二四然れども肉體に留るは爾等の爲に更に切要なり。二五且我確に知る爾等の信の進と喜との爲に、我が留りて爾等衆と偕に居らんことを、二六我が再爾等に来る時爾等のハリストスイイスに於ける誇が、我に困りて益加はらん爲なり。二七惟ハリストスの福音に符ひて度生せよ、我が或は來りて爾等を見或は離れて爾等が神を一にして立ち心を一にして共に福音の信の爲に戦ひ、二八何事に於ても爾等に恐れざるを聞かん爲なり。是れ彼等には亡の爾等には救の徴なり、此れ神に由るなり。二九蓋ハリストスの事に關して爾等に賜はりしは唯彼を信するのみならず亦彼の爲に苦を受くるなり。三〇乃爾等が曾て我に於て見し所、今我に於て聞く所の苦の如き者はなり。

三一故に若しハリストスに於て安慰あり若し愛の喜悅あり若し神の共與あり若し慈憐及び矜恤あらば、二四爾等私の喜を満たして爾等の意を同じくし愛を同じくし益を一にし念ふことを一にせよ。三二何事をも分争或は虚榮に由りて行ふ勿れ、

乃 謙遜にして互に人を以て己より愈れりさせよ。各唯己の事を顧みるなく、乃
各人の事をも顧みよ。蓋 爾等はハリストスイイスの意を以て意をすべし。
彼は神の像にして神と匹しくなることを僭ふさせざりき。然れども己を虚しくし
て僕の貌を受け、人と同じき者と爲りて外形に於て人の如くなり、己を卑くして死
に至るまで順ひ且十字架の死に至れり。故に神も彼を無上に高くして彼に凡の名
に超ゆる名を賜へり。一 凡そ天に在り地に在り及び地の下に在る者の膝は、イイス
スの名の前に屈み、二 且凡の舌は、イイススハリストスが主たるを承け認め、光榮
を神父に歸せん爲なり。三 故に我が至愛の者よ、爾等常に我に従ひし如く、我が共に
在る時のみならず、乃今我が在らざる時に於ては更に恐懼服従を以て己の救を成
せ。蓋 神は其善旨を以て爾等の裏に望む事をも行ふ事をも爲すなり。一 凡の事
を怨言なく疑惑なく行へ。一 爾等が此の積なる悖れる世代の中に於て、疵なく玷な
く、咎なき神の子と爲らん爲なり。爾等は彼等の中に、星の世に於けるが如く、光りて
生命の言を保つなり、我がハリストスの日に於て起りしことの徒然ならず、勞せし

この徒然ならざるを誇らん爲なり。一七〇 若し我爾等の信の祭を奉事の上にて満
させらるるも我喜び且爾等衆に併に喜ぶ。一八一 此の事爾等も亦喜び且我に併に喜ぶ。
一九二 我主イエスに頼りて速に我を爾等に遣さんことを望む我も爾等の請
事を知りて心を慰めん爲なり。二〇二 蓋我に復同じき心を以て眞實に爾等の事を慮
る者なし。二〇三 人皆己の事を求めて、バリストスイエスの事を求めざるに因る。二二
然れども彼の忠信は爾等の知る所なり蓋彼は子の父に於けるが如く我に併に福音
に役事せり。二三 故に我己の事の何如にならんを知らば直に彼を遣さんことを望む。
二四 我主に頼りて、自も亦久じからずして爾等に至らんことを信す。二五 然れども我
兄弟エメフロスト、我の同業者及び同職者爾等の使者及び我の乏しきに供せし者を、
爾等に遣すを切要なりと慮へり。二六 蓋彼我爾等衆を見んことを望めり且爾等
が其病みたるを聞きしを以て、深く憂ひたり。二七 彼は實に病みて死に近づけり然れ
ども病は彼を恤みたり、惟彼のみならず、我にも及びり、我が憂の上にて憂の加はらざら
ん爲なり。二八 故に我、愈速に彼を遣せり、爾等が復彼を見て喜ばん爲、我が憂も減

ぜん爲なり。爾等主に由りて喜を盡して彼を接げよ、且此くの如き者を敬へ。三〇
 蓋彼ばハリストスの事の爲に死に近づくに及び己の命を顧みざりき爾等も我に於
 ける供事の缺くるを補はん爲なり。

三〇 一之を要するに、我が兄弟よ、主に於て喜べ。此等の事を盡して爾等に達する

は、我が爲に煩はしからず爾等の爲に益あり。爾等犬を懐め、悪を行ふ者を懐め、割を
 懐め。二蓋割禮とは、即我等神を以て神に事へ、ハリストスイイススを以て誇爲し、肉
 體を待まさざる者是なり。然りし雖、我も肉體を待むを得べし。若し他人肉體を待むを
 得べき意はば、我更に之を得るなり。我第八日に割禮を受け、イスラエリの族、マニア
 ンの支派に屬し、エウレイイ人よりするエウレイイ人律法に由りては、ソリセイ、熱心に
 由りては、神の教會の寄逐者律法の義に由りては、玷なき者なり。然れども我が益た
 りし者は、我之をハリストスの爲に損と爲せり。且一切を以て損と爲す、ハリストス
 イイスス我が主を識る智識の勝れたるが故なり。彼の爲に我一切を棄て、一切を以て
 芥蒂と爲す、ハリストスを獲ん爲し、且律法に由る己の義を以てせずして、ハリストス

を倍するに由る者即倍に備ひて、神に由る義を以て、彼の中に居らん爲。一〇彼及び其復活の能を知り、且其苦に與るを知りて、彼の死に效はん爲なり。一〇或は如何にしてか死より復活するを得ん。二〇我已に獲たり、或は已に全くなれり、言ふに非ず、惟我追ふ、或は之を獲ん、パリストス、イスススの我を獲たるが如し。一〇兄弟よ、我已を以て獲たりと意はず、我惟一事を務む、即後を忘れて、前に進む。一〇標準に向ひて、パリストス、イスススに於ける神の上よりの召の裏面を追ふなり。一〇故に我等の中全き者は、此くの如く思ふべし、若し爾等に何事に於てか異なる思あらば、神は之をも爾等に示さん。一〇然れども我等の已に到りし所は、我等之を思ひ、此の規に違ふべし。一〇兄弟よ、我に效へ、且我等を模範として行ふ者を願ふ。一〇蓋多くの人が、我が爾等に言ひ、今又泣きて言ふ所の者は、パリストスの十字架の敵の如くに行ふ。一〇爾等の終は滅なり、彼等の神は腹なり、彼等の榮とする所は辱なり、彼等は地上の事を思ふ。二〇我等の居處は天に在り、我等は彼處より教主、即我等の主、イススス、ハリストスの來るを待つ。三〇彼は萬物を己に服せしむるを得る能に因りて、我等の卑しき體を化して、其彼

の光榮の體に象れる者と爲るを致さん。

第四節

一故に我が愛する所慕ふ所の兄弟、我の喜、我の畏、我が至愛の者よ、斯く主に

在りて立てよ。二我エラスヤに勸め、シンカヒヤに勸む、主に在りて意を同じくせんこ

とを。三然り親しき朋よ、我亦爾に求む、此の二の婦、我とクリメント、及び其餘の我の同

勞者、其名の生命の書に録されし者と、偕に福音に勞せし者に助けよ。四爾等恒に主に

在りて喜べ、又言ふ喜べ。爾等の溫柔は衆人に知らるべし。主は近し。何事をも慮る

勿れ、乃凡の事に於て、祈禱、祈願、且感謝を以て、爾等の求むる所を神に告げよ。然らば

神の平安、凡の知識に超ゆる者は、ハリストスイイスに於て、爾等の心と、爾等の念と

を守らん。之を究むるに、我が兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊きこと、凡そ義なること、

凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ稱すべきこと、如何なる徳、如何なる譽も、爾等之

を念へ。爾等が我に學びし所、受けし所、聞きし所、見し所は、之を行へ。然らば、平安の神

は、爾等と偕に居らん。二爾等が已に復我を慮る意を起し、ば、我主に於て、甚之を喜

ぶ。爾等先にも慮れり、唯機を得ざりしなり。三我乏しきに因りて、此を言ふに非ず。蓋

遇ふ所を以て足れりとするを學べり。一三我貧しきに居ることをも知り、富に居ることをも知る、凡の事に於て飽くことにも飢うることにも豊なることにも歎しきことにも、皆然練せり。一四我を堅むるイエスハリストスに由りて、我能せざる所なし。一五然れども爾等は我が患難に與りて行ひし所善し。一六夫リ、人よ爾等知る福音を傳ふる始我がマクドニヤを出でし時與ふること及び受くることに於て、我に與りし者は唯爾等のみにして、他の教會は一もなかりき。一七爾等ハサロニカにも、一八次も、二九次も、我の乏しきに供する爲に送れり。一七我が之を音ふは贈を求むるに非ず、乃爾等を益する實の繁からんことを求むるなり。一八我一切を得て餘あり、我エバフロソトより爾等が送りたる諸物を隠しき香納れらるべき祭料の悦ぶ所の者として受け、諸ち足れり。一九願はくは我の神は其光榮の富に宿りて、ハリストスイイスに依りて爾等が凡の需むる所を充たさん。二〇願はくは光榮は神我等の父に無窮の世に歸せん、「アメン」。

爾等ハリストスイイスに在る衆聖徒に安を問ふ。我も偕に在る諸兄弟は爾等の安を問ふ。二三衆聖徒赫にケサリの家に屬する者は、爾等の安を問

ふ。二三願はくば我等の主イエスキリストの恩寵は我等衆と倍に在らんことを
「アミン」。

聖使徒パウロがコロサイ人に達する書

第一

一 マウル、神の旨に由りてイエススハリストスの使徒と爲れる者及び兄弟

ヲモスイは、書じて、コロサイに在る聖徒、ハリストスイエススに於て信なる諸兄弟に達す。願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イエススハリストスより我等に賜はらんことを。我等恒に爾等の爲に祈禱して神我等の主イエススハリストスの父に感謝す。是れ爾等がハリストスイエススに於ける信及び衆聖徒に於ける愛、即ち爾等が先に福音の眞の音の中に聞きし如く、天に爾等の爲に備へたる所に於ける望に由る者を聞きたればなり。此の福音は爾等の中に存すること、全世界に於けるが如し、且果を結び又蔓延すること、爾等の中に於て爾等が之を聞きて神の恩寵を眞實に知りし日よりするが如し。此れ爾等が我等の至愛なる同業者、爾等の爲にハリストスの忠信の役者たる、エパfrasより學びしが如し。彼は爾等が神に緣る愛を我等に告げたり。故に我等も之を聞きし日より、爾等の爲に絶えず祈禱して、爾等

に、凡の智慧と神識とを以て盡く神の旨を知るを得しめんことを求む、一〇爾等が神に宜しき所の如く行ひて、凡の事彼を悦ばせ、凡の善事に於て果を結び、神を知る知識に長じ、一、其光榮の權能に備ひ、凡の力に認められて、凡の事喜びて忍耐恒忍せん爲なり。二、我亦神父に感謝す、其我等を召して、諸聖徒と與に光明の業に分あらしむるを以てなり。三、彼は我等を黑暗の權より拯ひて、其至愛の手の權に選せり、一、爾等が我等に由りて、其血を以て贖及び罪の赦を得たり。二、彼は見る可からざる神の像にして、萬物の先に生れたる者なり。三、蓋萬物は彼に由りて造られたり、天に在る者地に在る者見る可き者見る可からざる者、或は寶座、或は主制、或は首領、或は權柄一切彼を以て、且彼の爲に造られたり。四、彼は萬物より先に、萬物は彼に由りて立つ。五、且彼は其體たる教會の首なり、彼は元始にして、死の中より首めて生れたる者なり、其萬事に於て首たらん爲なり。六、蓋父の喜ぶ所に、彼の中に凡の充滿の存在し、一、且彼に由りて、其十字架の血を以て、地に在る者をも天に在る者をも復和せしめて、彼に由りて、一切を己に和せしむるに在り。二、爾等素達さかりて、意念を以て惡しき

行を以て敵たりし者をも、二三今彼の肉の體を以て、其死に由りて和せしめたり。爾等
 を、聖にして、二二疵なく、貴なき者として己の前に立たしめん爲なり。二三爾等若し信の基
 に立ちて、二四動きなく止り、福音の望より移らずば、必之を得ん、此の福音は、二五爾等の聞き
 し所、天下の悉くの受造物に傳へられし所、我パウロが其役者として爲りし所の者なり。二六
二七今我爾等の爲に受くる所の苦を喜び、且我が肉體に於て、二八パリストスの體、二九即教會
 の爲に、我に缺くる所のハリストスの患難を補ふ。三〇我は爾等の爲に我に託せられ
 し神の定制に、三一循ひて、教會の役者として爲れり、神の旨、三二即歴世歴代に隠され、三三今彼の
 聖徒に顯されたる、三四奥義を、三五傳へん爲なり。三六神は、三七此の密徒に、三八異邦人の中に於て
 此の奥義の光榮の宮の如何なるを、三九知らしめん、と欲せり、四〇是は、四一即ハリストス爾等の
 中に在り、四二光榮の望なり。四三我等彼を傳へて、四四凡の人を、四五隠し、四六悉くの智慧を以て之を、四七傳
 ふ、四八凡の人をハリストスイエスに於て、四九完全なる者として、五〇立たしめん爲なり。五一我
 此が爲に、五二其大能を以て、五三我が裏に行爲する力に、五四循ひて、五五勞苦勤勉するなり。
五六我爾等の爲に、五七ヲテ、五八キヤミ、五九イエラ、六〇ボリ、六一に居る者、六二の爲及び、六三凡そ肉體に於

て未だ我が面を視ざりし者の爲に、如何に心勞するかを爾等が知らんことを欲す。二
 願はくは彼等の心は愛に和合せられて、完全なる類悟の富を得、神父及びハリストス
 の奥義を知りて、慰を受けんことを、智慧と知識との一切の寶は、ハリストスの中に
 隠るゝなり。我が此を言ふは、人が巧なる言を以て、爾等を惑はさざらん爲なり。三
 蓋我身は偕に居らずと、雖、神は爾等と偕に居りて喜び、爾等の秩序及び爾等がハリ
 ストスに於ける信の堅きを見るなり。故に爾等が主ハリストスイエスを受けし
 如く、彼に在りて行へ、七か、彼の中に根を深くし、堅く建てられ、爾等が教へられし如く、信
 に堅固になり、之に増長じて、感謝せよ。兄弟よ、慎め、人がハリストスに循はずして、
 人の遺傳に循ひ、世の元行に循ふ、理學と空術とを以て、爾等を惑はさざらん爲なり。九
 蓋、神性の充滿は、悉く實體を以てハリストスに居るなり。一〇、爾等も彼、即、凡の首
 領、楯柄の首たる者に在りて、充滿せられたり。二、彼に在りて、爾等は亦手を以てせ
 ざる割禮を受けたり、即、肉身の罪の體を脱ぐ所のハリストスの割禮なり。一三、洗禮
 を以て、爾等は彼と偕に葬られて、亦彼を死より復活せしめし神の力を信するを以て、

彼と儂に復活せり。一三 爾等曾て階脚と身に割禮なきに因りて死せし者を神は彼
と儂に生かして我等に悉くの罪を赦し、我等に對する禮儀の券、我等を攻むる
者を抹し彼は之を中間より取りて十字架に釘せり。一四 首領權柄より力を奪ひて彼
は顯に之を辱しめ十字架を以て彼等に勝てり。一五 是を以て食物或は飲物或は節期
或は新月或は安息日の故に縁りて人爾等を議す可からず、一七 此れ皆將來の者の影
にして實體はハリストスに在り。一八 何人も任意の謙遜と天使等に奉事すること
を以て爾等を欺くべからず、彼等は未だ見ざる事を窺ひ己の肉の智慧を以て妄に誇
り、一九 首に倚らず盜全體は首より、隨の節と維とに由りて相助け相繋がりて神の生
長を以て長するなり。二〇 故に爾等若しハリストスと儂に世の元行の爲に死せしな
らば何ぞ世に居る者の如く禮儀に違ふ、二一 卽ち觸る、毋れ嘗むる毋れ刑る毋れと
二二 此等皆用ゐるに因りて朽つ、是れ人の誠と教とに違ふなり、二三 此れ唯智慧の外
表にして任意の奉事と謙遜と身を惜まざること及び肉體を養ふを重んぜざるに在
り。

第三節

一 敵に爾等若しハリストスに借に復活せしならば、上に在る事を求めよ。即ちハリストスが神の右に坐する處の事なり。二 上に在る事を以て念と爲せ。地に在る事を以てする勿れ。蓋爾等は死し爾等の生命はハリストスに借に神の中に隠れたり。三 爾等の生命たるハリストスの現れん時、爾等も彼に借に光榮の中に現れん。故に爾等の地に在る肢體を殺せ、即ち淫行、汚穢、邪修、忿怒及び貪婪、即ち拜偶像、是なり。此等の爲に神の怒は悖逆の子に臨む。爾等も置に彼等の中に居りし時之を行へり。今に爾等も忿怒、恚恨、怒、妬、脚、爾等の口より出す愧ぢべき言、一切之を去れ、互に謙を言ふ勿れ。蓋爾等、惡き人、其行を脱ぎて、一 惡なる人、即ち彼を遣りし者の像に備ひて知識の改めらるる者を衣たり。二 此にはマリヤン人及びイウテナ人、割禮及び無割禮、兇狄及びスキフ奴隸及び自主の者無し、即ちハリストスは一切なり及び一切の中に在り。三 故に爾等神の選を蒙りし聖にして愛せらるる者として、慈悲、仁愛、謙遜、溫柔、恒忍を衣よ。四 若し互に責むべき事あらば、相恕し相赦せ、ハリストスの爾等を赦し、如く爾等も此くの如くせよ。五 凡そ此等の上に愛を衣よ、是れ完備の總綱な

り。一五かつかみ 且神の平安は爾等の心の中に幸たるべし。爾等は一體に於て之に召されたり。爾等又恩に感ぜよ。一六 ハリストスの言は豊に爾等の中に居るべし。凡の智慧を以て相隣へ相敬め。聖詠と歌頌と風神の詩賦とを以て恩寵に由りて爾等の心に私して、主を讚美せよ。一七 爾等が凡そ爲す所の事、或は言、或は行、皆主イエススハリストスの名に因りて之を爲し、彼に由りて神父に感謝せよ。一八 婦よ、爾等の夫に服へ、主に在りて宜しき所の如し。一九 夫よ、爾等の婦を受せよ、詩く之を待ふ勿れ。二〇 子よ、凡の事に於て爾等の父母に順へ、益此れ主の悦ぶ所なり。二一 父よ、爾等の子を怒らしむる勿れ、其氣の鋭みさらん爲なり。二二 僕よ、凡の事に於て肉體に屬する爾等の主に順へ、人の悦を取る者の如く、第目の前に於てするのみならず、乃機直なる心を以て神を畏れて勤めよ。二三 凡そ爾等の爲す所は、心より之を爲し、人に於けるが如くせずして、主に於けるが如くせよ。二四 爾等主より閑業の報を受けんことを知ればなり、益爾等は主ハリストスに勤む。二五 非義を行ふ者は、亦非義の報を受けん、主は偏視する所なし。

第四節

主なる者よ、義と公平とを以て僕に施せ、天には爾等にも主あることを知

ればなり。祈禱に恒にして之に敬慕し且感謝せよ。亦我等の爲にも祈禱せよ。神が我等に言の門を開きて、ハリストスの奥義、我が纏繞に在る所以の者を言はしめん爲、我が之を言ふべきが如く我をして之を顯さしめん爲なり。智慧を以て且機に乗じて外の者に行へ。爾等の言は恒に恩を以てし且謙を調和すべし。爾等が如何にか各人に答ふべきを知らん爲なり。至愛の兄弟、主に在りて忠信なる役者及び同勞者ヲヒクは、我の事を悉く爾等に告げん。我特に此が爲に彼を爾等に遣せり。彼が爾等の事を知り且爾等の心を慰めん爲なり。彼と偕に我等の忠信にして至愛なる兄弟オニシム爾等の中の一人の者を遣せり。彼等は此の處の事を悉く爾等に告げん。一〇我と偕に囚と爲れるプリスタルフ及びワルナワの甥マルコは爾等の安を問ふ。マルコノ事に關しては爾等曾て命を受けたり。若し彼爾等に來らば之を接げよ。一一又イオニス稱じてイウストと云ふ者は爾等の安を問ふ。彼等は割禮を受けし者なり。唯彼等のみ我と共に神の國の爲に勞して、我の慰と爲れり。一二爾等の一人なるエパウラスイオニススハリストスの僕は爾等の安を問ふ。彼は恒に務めて爾等の爲に祈禱し、爾

等が全備にして立ち悉くの神の旨を全く守らんことを請ふ。一三 我彼の爲に證す彼
は爾等及びブラチヤキヤミイエラポリに在る者の爲に甚熱心す。一四 至愛なる醫
師ルカ及びママス、爾等の安を問ふ。一五 爾等ブラチヤキヤに在る諸兄弟及びニムスン
と其家の教會とに安を問へ。一六 此の書、爾等之を讀みて後、ブラチヤキヤの教會も之を
讀まんことを致せ、ブラチヤキヤよりする書は、爾等も之を讀め。一七 アルラブに告げよ、
爾が主に在りて受けし所の職を慎みて之を盡せ。一八 我ババル手づから安を問ふ。
我の線綾を念へ。願はくは恩寵は爾等と倫に在らんことを「アミン」。

三
口
サ
不
書

五
九
四

聖使徒パウルがスサロニカ人に達する前書

第一節

パウル及びシルヴァン及びティモテウス

に在るスサロニカの教會に達す。願はくは恩寵と平安とは神我等の父及び主

イエス・ハリ・ストスより爾等に賜はらんとす。我等は爾等を我が肺腑の中に記憶して恒に爾等衆の爲に神に感謝す。是れ爾等が神我等の父の前に在る信の行、愛の勞、我等の主イエス・ハリ・ストスに於ける忍耐を絶えず念ひ、且神に愛せらる。兄弟、爾等の選を知るに因りてなり。蓋我等の福音は爾等の中に言を以てせしのみならず、乃能を以てし、聖神を以てし、多くの保證を以てせり。爾等自ら我等が爾等の中に在りて、爾等の爲に如何なる者たりしかを知るが如し。而して爾等は我等及び主に效ふ者として、多くの患難の中に、聖神の喜を以て言を受けて、凡そマケドニヤ及びアハイヤの中の信する者の爲に模範と爲るに至れり。蓋主の言は爾等より唯マケドニヤ及びアハイヤに響きしのみならず、乃凡の處に於て、爾等が神に

於ける信は傳はりて我等何事をも言ふを要せざるに至れり。蓋彼等自ら我等の事を述べて我等が如何に爾等の中に入り爾等が如何に偶像より神に歸して生ける眞の神に事へ。二〇天より其子彼が死より復活せしめしイエス我等を將來の怒り拯ふ者の来るを待つことを言ふ。

第二〇章 兄弟よ爾等自ら我等が爾等の中に入りしことの徒然ならざるを知る。二乃我等は爾等の知れる如く先にフルビに於て苦を受け且辱しめられて後我等の神に頼りて毅然として多くの勤勞を以て爾等に神の福音を傳へたり。蓋我等の勤勞は惑よりするに非ず邪よりするに非ず爾等よりするに非ず。乃神が我等を試みて福音を託するに堪ふる者と爲し。如く我等斯く之を言ふ人の喜を取るが如くならず。乃我等の心を試みる神の喜を取るが如し。蓋爾等の知れる如く我等未だ曾て爾等の前に訣の言を出さず又何の事に於ても貪ることなせず神は眞者なり。我等は人よりする光榮を爾等よりも他人よりも求めず。我等はハリストスの使徒として威嚴を示すを得べかりしと雖爾等の中に溫柔なりしこと乳母の其子を愛育するが

如し。八か 新く我等は爾等を慕ひて、第神の福音のみならず我等の靈をも爾等に與へん
 ことを認めり、蓋爾等は我が至愛の者と爲れり。兄弟も爾等は我等の勞苦と勤勉と
 を記念す、爾等の中一人をも累はさざらん爲に、我等夜晝工を作じて、神の福音を爾等
 に傳へたり。一、爾等及び神は証す、我等如何にか、聖潔公義無玷にして、爾等倍する者
 の中に行ひしを、二、爾等は知る如何にか、我等は父が其子に於けるが如く、爾等
 各人に、一、爾等を其國と光榮とに召し、神に合ひて行はんことを勧め、勵まし、求め
 しを。二、故に我等も、爾等が我等より聞きし神の言を受けて、之を人の言の如くなら
 す、乃神の言の如く受けしを、神に感謝して、絶えず、是れ誠にして、神の言にして、爾等倍する
 者の中に力行するなり。一、爾等兄弟も、爾等はイウテヤに在るハリストスイイスに
 於ける神の踏教會に效ふ者と爲れり、爾等も、彼等がイウテヤ人より受けし如き苦を、
 己の同族より受けなければなり。一、イウテヤ人は、主イイスと其諸預言者とを殺し、
 我等を逐ひ出し、神の悦を取らず、悉くの人に逆ひ、一、我等が異邦人を罰へて、救を得
 しむるを拒む、是くの如く常に己の脚の道を盈たす、然れども、至極の怒は、彼等に臨め

り。一七 兄弟、我等留く面を以てし、心を以てせずして、爾等を離れて、愈切に望みて、爾等の面を見んことを務めたり。一八 故に我等、即我バワル、一次又二次、爾等に至らんと欲したれども、サタナ我等を阻みたり。一九 蓋誰か我等の望、或は喜、或は誇の望たる。爾等も我等の主、イエスハリストスの前に、其降臨に於て、此れなるに非ずや。二〇 蓋、爾等は我等の光榮及び喜なり。

第三章

故に我等復忍ばずして、爾等ヲに留るを意に定め、二 我が兄弟神の役者、

ハリストスの福音に於ける我等の同勞者たるエモスイを遣せり、爾等を堅め、爾等の信に於て、爾等を慰めん爲、一人も此の患難に在りて、拙かさらん爲なり、爾等自ら我等が此に定まりたるを知らばなり。蓋、我等は爾等の中に在りし時、我等が難に遇はんことを預め、爾等に告げたりしが、果して是くの如く成れり、爾等之を知る。故に、我も復忍ばずして、爾等の信を知らん爲に遣せり、恐らくは、試誘者、爾等を誘ひ、而して我等の勞は徒然ならん。今は、エモスイ、爾等より我等に來りて、我等に爾等の信と愛との喜音を報じ、又爾等が常に惡に我等を念ひ、我等の爾等に於けるが如く、我等を見

んご欲するを告げたり、故に兄弟、我等は我が凡の患難急迫の中に於て爾等の信に由りて爾等の爲に慰を得たり、蓋爾等主に於て堅く立つに因りて、我等今生く我等は爾等の爲凡そ我等の神の前に爾等に由りて喜ぶ所の喜の爲に如何なる感謝を神に歸するを得んか。一、我等に歸するは爾等の面を見及び爾等が信の足らざる所を補はんことなり。二、願はくは神我等の父及び我等の主イエスハリストスに親ら我等の途を爾等に向けしめん。三、願はくは又主は爾等の相互の及び衆人に於ける愛を増し且満たして我等が爾等に於ける愛の如くせんことを、爾等の心を聖潔無玷にして、神我等の父の前に、我等の主イエスハリストスの其衆聖者並に來らん時に立たしめん爲なり「アミン」。

第四 之を究むるに兄弟、我等ハリストスイエスを以て爾等に求め爾等に勤む爾等は既に如何に行ひ及び神を悦ばしむべきを我等より受け且之を行ふに由りて、益之に進歩せよ、爾等は我等が主イエスに由りて如何なる誠命を爾等に授けしを知ればなり。蓋神の旨は爾等の聖潔なり、即爾等が自ら淫行を戒むるに

在り、爾等が各己の器を守るに、聖潔尊貴を以てして、神を識らざる異邦人の如く情慾を以てせざるを知るに在り、又何事に於ても己の兄弟に對して法に違ひ利を貪りて行はざるに在り、盜主は凡そ此等の爲に報を爲す者なり、我が先に爾等に言ひ且隠せしが如し。盜賊の我等を召し、は汚穢の爲に非ず、乃聖潔の爲なり。故に拒む者は人を拒むに非ず、乃我等に其聖神を與へたる神を拒むなり。兄弟の愛に至りては、我が爾等に與するを要せず、爾等自ら相愛すること、神より教へられたればなり。一、盜、爾等果して是くの如く全マケドニヤに在る諸兄弟に行ふ、兄弟よ、我等爾等に勤む、益此に進歩し、二、且務めて安靜を守り、己の事を行ひ、手づから工を作さん、こゝを我が爾等に戒めしが如し、三、爾等の行が外の人の前に端正にして、亦自ら乏しきことなからん爲なり。一、兄弟よ、愛りし者に至りては、我等が知らざるを欲せず、爾等が忍なき他の者の如く哀しまさらん爲なり。一、盜若し我等イエスの死して復活せしことを信ぜば、則神はイエスに在りて贖りし者をも彼と偕に擡へん。一、盜、我等主の言を以て、爾等に語く、我等生きて主の來る迄存する者は、贖

りし者に先だたざらん。一 盜主親ら號令と天使首の聲と神の靈に伴はれて天より降らん而してマリストスに在りて死せし者は先づ復活せん、一七其後我等生きて存する者は彼等と偕に獄に擧げられて主を空中に迎へん是くの如くして常に主と偕に居らん。一八故に爾等此等の言を以て互に慰めよ。

第三

兄弟よ、時及び期に至りては我が爾等に奮するを要せず、二 盜用等自ら

主の日の來らんことを盜が夜に來るか如きを明に知るなり。三 盜人が平安無事なりと謂はん時滅亡は忽彼等に至らん産苦の妊める婦に於けるが如し彼等遠くるを得ざらん。四 然れども兄弟よ爾等暗に在らずして其日を盜の如く爾等に及ぼしめざらん。五 盜用等皆光の子の盜の子なり我等は夜の者暗の者に非ず。六 故に我等他人の如く寝ぬ可からず乃 徹醒謹すべし。七 盜賊ぬる者は夜に寝れ醒ふ者は夜に醒ふなり。八 我等は盜の子なるに因りて信と愛との甲及び救の望の胃を衣て謹愼すべし。九 盜神は我等を怒の爲に定めしに非ず乃 救を得じめん爲なり我等の主イエスハリストスに由りてなり。一〇 彼は我等の爲に死せり我等徹醒するも寝ぬるも彼と偕

に生きん爲なり。一 故に爾等互に慰め互に徳を建てよ。爾等の已に行ふ所の如し。
 二 兄弟よ、我等爾等に求む。爾等の中に勞し主に在りて爾等を治め、爾等を罰ふる者
 を認めて、三 彼等の工の爲に彼等を辱びて、篤く愛せよ。爾等互に睦しぐせよ。一四 兄
 弟よ、我等爾等に勸む。妄行なる者を徹め、氣餒むたる者を慰め、弱き者を扶け、衆人を待
 つに寛忍を以てせよ。一五 慎みて惡を以て惡に報ゆる毋れ。常に互に善を追ひ、又之を
 衆人に及ぼせ。一六 常に喜べ。一七 報めずして祈れ。一八 凡の事感謝せよ。蓋是れ爾等の
 爲にハリストスイエスに頼る神の旨なり。一九 神を熄す毋れ。二〇 預言を讀んずる
 毋れ。二一 凡の事を察して、善き者を執れ。二三 悉くの惡の類に離れよ。二四 願はくは平
 安の神は親ら、爾等を全く聖にし、爾等の神と靈と體とは全うし、饒られて、我等の主イ
 エススハリストスの降臨の時に疵なからん。二五 爾等を召す者は、誠信なる者にして、彼
 は之を行はん。二六 兄弟よ、我等の爲に祈れ。二七 聖なる接吻を以て悉くの兄弟の安を
 問へ。二八 我主を以て、爾等に此の書を悉くの聖兄弟の前に讀まん、こゝを醫はしむ。二九
 願はくは我等の主イエススハリストスの恩寵は、爾等と偕に在らん、こゝを「アミン」。

聖使徒パウロがエサロニカ人に達する後書

第一節

ハリストスに在るエサロニカの教會に達す。願はくは恩寵と平安とに神我等の父及び主イエスス
 及び主イエススハリストスより爾等に賜はらんことを。兄弟よ、我等恒に爾等の爲
 に神に感謝すべし是れ宜しきに合ふなり蓋爾等の信は大に長じ爾等衆の中に各人
 相互の愛は彌増す、我等自ら爾等を以て神の諸教會の中に誇るに至れり蓋爾等は
 忍耐と信を以て凡の窘迫患難を受くるなり。此れ爾等が苦みて待つ所の神の國
 を得しめん爲に神の義なる審判あらんことを明なる徴なり。蓋爾等を苦しむる者
 に苦を以て報い、爾等苦しめらるる者に我等と偕に安悦を以て報ゆるは神の前に
 義なるなり是れ主イエススの天より其能力の天使等と偕に現る時に在り。彼は
 火燄を以て神を識らざる者及び我等の主イエススハリストスの福音に服はざる者
 に報を與ふ。彼等は主の顔及び其大能の光榮より永遠の滅の罰を受けん。一〇すなはち

彼が來りて、其日に諸聖者の中に光榮を得、衆信者の中に威嚴を顯さん時に在り、爾等が我等の証を信ぜしが如し。一、此に由りて我等恒に爾等の爲に祈禱して、我等の神が爾等を召に任ふる者と爲し、且大能を以て、凡の仁愛の善旨と信の功とを成就せんことを求む。二、我等の主イエススハリストスの名は爾等の中に爾等も彼の中に於て、我等の神及び主イエススハリストスの恩寵に依りて榮せられん爲なり。

第三 兄弟よ、我等の主イエススハリストスの臨むこと及び我等が彼に集ることに就きては、我等爾等に求む。爾等或は神に由り、或は言に由り、或は我等の遣れるに似たる意に由りて、ハリストスの日、今日に至ることを云ふを以て、輕く心を動かさし、且怖るゝなからんことを。人何の法を以ても、爾等を惑はすべからず、蓋反離は先に來らず、且不法の人、淪亡の子、背逆の者自ら高くして、凡そ神或は拜まるゝ者と稱する者に、超に甚じきに至りては、神の如く神殿に坐し、己を示して神を爲す者現れずば、其日に至らざらん。我が尙爾等の中に在りし時、此を爾等に言ひしを、爾等記憶せざるか。六、爾等今彼を捉むる者を知る、彼が其時に至りて現れん爲なり。蓋不法の秘密は已に

行はる唯今に於て之を拒むる者が中間より除かるゝに至るまでは成就する能はず。
 其時に不法の者現れん、主イエスは己の口の氣を以て彼を殺し己の降臨の現を
 以て廢せん。其來るはサタナの行爲に循ひて凡の靈の異能と奇徴と奇蹟とを以て
 せん、一〇凡の不義の詭譎を以て亡ぶる者の中に在らん、蓋彼等は己の救の爲に眞
 實の愛を受けざりき。一一是の故に神は彼等に迷圖の行爲を遣して彼等が罪を信す
 るを致さん、一二凡そ眞實を信せずして不義を悦べる者の罪の定められん爲なり。一
 三然れども主に愛せらるゝ兄弟よ我等は爾等の爲に恒に神に感謝すべし、蓋神は始
 より神の成聖と眞實を信する信者に因りて爾等を救の爲に簡び、我等の福音を
 以て爾等を此に召せり、我が主イエスハリストスの光榮を得ん爲なり。一四兄弟よ、
 故に爾等堅く立ちて、我等の言或は書を以て教へられし所の傳を守れ。一五願はくは
 我が主イエスハリストス及び神我等の父我等を愛して其恩寵に由りて永遠の慰
 と善き望みを賜ひし者は、一六親ら爾等の心を慰めて爾等を凡の善言善行に堅めん。

第三卷

終に言ふ兄弟よ、我等の爲に祈禱せよ、主の言の疾く廣まりて榮せらるゝ

一、我等の中に於けるが如く、二、且我等が非理及び悪なる人より救はれん爲なり、
蓋人皆信あるには非ず。三、然れども主は信なり彼は我等を堅めて凶悪者より離らん。
四、我等主に頼りて我等の事を確信す我等が我等の命する所を行ひ且行はんことを。
五、願はくは主は我等の心を神の愛及びハリストスの忍耐に導かん。兄弟よ我等は、
我が主イエススハリストスの名を以て我等に命す凡そ妄に行ひて我等より受けし
所の傳に循はざる兄弟より遠ざかれ。蓋我等自ら如何に我等に教ふべきを知る、
我等は我等の中に在りて妄なる事を爲さざりき、亦何人にも徒食せざりき、乃勞
さ苦さを以て夜晝業を作せり我等の中の一人をも累はさざらん爲なり、此れ我等
に權なきが故に非ず、乃己を模範として我等に與へて我等に教はしめん爲なり。
一、蓋我等中等の中に在りし時此を以て我等に命せり人若し業を作すことを欲せず
ば食ふ可からず。二、今聞くに中等の中或者は妄なる事を行ひ何事をも爲さず唯
餘事を務む。三、此くの如き者に我等は我が主イエススハリストスを以て命じ且勸
む安靜に業を作して己の餅を食はんことを。二、兄弟よ我等は善を行ひて倦む勿れ。

一四〇 若し此の書に言ふ所の我等の言を聴かざる者あらば、彼を詰して、與に交る勿れ、
彼を辱しめん爲なり。一四一 然れども、彼を敵の如くする勿れ、乃兄弟の如く調へよ。一
四二 願はくは平安の主親ら恒に凡の事に於て我等に平安を賜はん。願はくは主は我等
衆と僭に在らん。一四三 我メヌル手づから、我等の安を問ふ、毎に之を以て、詰と爲す、我
が僭する所此くの若し、一四四 願はくは我等の主、イエス、ハリストスの恩寵は、我等衆
と僭に在らんことを「アミン」。

ニサロニカ後書

六〇八

聖使徒パウロがテモスイに達する前書

第一

一、パウロ、神我等の教主及び主

イエススハリストス、我等の怒なる者の命を

奉じて、イエススハリストスの使徒と爲れる者は、書して信に於て我が眞の子なる
テモスイに達す。願はくは恩寵と慈憐と平安とは神我等の父及びハリストスイイス
ス我等の主より爾に賜はらんことを。我がマケドニヤに往く時、爾にエススに留り
て或人人に就めて異なることを教ふるなく、又虚誕及び窮りなき系圖即神に於け
る信の建立よりも多く争論を生ずる者に意を用ゐざらしめんことを求めしが如く、
今も亦然り。誠の目的とする所は愛なり、乃、深き心と粘なき真心と偽なき信
に由る者なり。或者は此に違ひて、虚しき論に轉じ、牧法師と爲らんを欲して、自
ら其言ふ所斯むる所を知らず。我等は律法の善きを知る、捨人法に留ひて之を用ゐ
るに在り。蓋知る律法は義人の爲に設けたるに非ず、乃不法の者、不服の者、不虔の者、
罪惡の者、放肆の者、不潔の者、父母を弑する者、人を殺す者、淫行の者、男色の者、人を

換む者誰を言ふ者密に背く者及び其他儲全なる教に伴る事の爲に設けたるなり。
 一 我に託せられし洪福なる神の光榮の福音に循へるなり。 二 我に力を賜ひしハ
 リストスイイスス我等の主に感謝す其我を忠なる者と見て役事の職に任ぜしに因
 る。 三 我は昔勝る者逐する者悔る者たりしが知らずして信ぜざるに由りて之を
 行ひし故に矜恤を蒙りたり。 四 我が主の恩寵はハリストスイイススに於ける信及
 び愛と共に豊に我の内に顯れたり。 五 ハリストスイイススは即人を救はん爲に世
 に来れり此れ信なる全く受くべき言なり即人の中我第一なり。 六 然れども我が矜
 恤を蒙りしは、イイススハリストスが先づ我に於て全き寛恕を示して後彼を信じて
 永遠の生命を得んと欲する者の模範と爲さん爲なり。 七 願はくは尊敬と光榮とは、
 萬世の王壇る可からず見る可からざる獨一睿智の神に、無窮の世に歸せん「アミン」。
 一八 吾が子エモスイ、我爾に會て附を指し、福音に符ひて此の誠を託す爾が福音
 に循ひ信と玷なき良心を保ちて善き職を履はん爲なり。 一九 蓋或者は良心を棄て
 其信を弱らせり。 二〇 其中にイメテイ及びアレキサンドルあり我彼等をサタナに

付せり彼等が神を踏らざることを學ばん爲なり。

【第三】 故に我凡の事に先だちて勸む衆人の爲帝王及び凡そ權を操る者の爲に、
祈禱祈願懇求感謝を爲さんことを。我等が凡の敬虔と聖潔さを以て平安にして穩
靜なる生を度らん爲なり。蓋此れ我等の教主神の前に善にして納れらるゝ事なり。
彼は衆人が救を得及び眞實を知るに至らんことを欲す。蓋神は二なり、神一人と
の間には中保者も亦一なり乃人ハリストスイイス、衆人の願の爲に己を與へ
し者なり。此の證は其期に於て已に在りき。我之が爲に立てられて宣傳者と爲り使
徒と爲りハリストスに在りて眞實を言ひて離らず、信と眞實さを以て異邦人を救ふ
る師と爲れり。故に我等男は潔き手を擧げて怒なく疑なく何の處に於ても祈禱
を爲さんことを、女も亦宜しきに合ふ衣を衣履耻貞潔にして自ら飾るに髪を編む
こと或は金或は眞珠或は高價なる衣を以てせず。乃神に事ふるを約せし女に稱
ふが如く善行を以てせんことを。一、女は幽靜にして全く順ひて學ぶべし。二、女に
は教ふることを又男の上に權を執ることを許さず、乃幽靜なるべし。蓋アダムは

前に遣られて、エツは後なり。一四かつ且アダムは誘はれしに非ず、乃婦は誘はれて罪に陥れり、一五然れども若し信と愛と聖と貞潔とに居らば子を産むに因りて救を得ん。

第二四章 一信なる説是の言人若し監督の職を得んは欲せば善き事を習むなり。二監督は責む可き所なく一婦の夫たるべく謹慎廉節端正たるべく懇に遠人を待ひ善く教訓を施し、三酒を好まず人を厭たす汚利を圖らず溫和にして争を好まず財を食らず、四善く其家を齊へ凡の爛莊を以て其子女を順従せしむべし、五蓋其家を齊ふるを知らざる者は如何にして神の教會を理むるを得ん、六新に教に違みし者たるべからず、七恐らくは誘りて、悪魔と同じく密判に服せん、八亦外の人より善く證せらるる者たるべし、九恐らくは誘及及び悪魔の網に陥らん、一〇役事も亦爛莊にして二舌ならず酒を嗜まず、汚利を食らず、一〇一濁き良心に信の奥義を保つ者たるべし、一〇二是くの如き者は先づ之を試みて若し貴むべき所なくば、一〇三則役事の職に當つべし、一〇四役事は一婦の夫に莊にして、幾般せず謹慎にして凡の事に忠信なる者たるべし、一〇五蓋善く役事せし者は己の爲に上して善く其子女と其家を理むる者たるべし、一〇六

級キョウさ、ハリストスイイスに由ユる所の信シンに於オける。大オホなる勇敢イダクさを得ウるなり。一イチ我ワレ速スに爾ニに至いたらんことを望ノゾめども、此コノを畫シして爾ニに達タツす、一イチ我ワレ若カし速スはらば爾ニが如カ何ナニに神カミの家イヘ、即ス活イける神カミの教會ケウカイ眞實シンジツの柱ハシラ及び固カタなる者モノに行ユクふべきを知らん爲タメなり。一イチ六ロク論ロンなく敬虔ケイケンの典義テンギは大オホなり神カミは肉體ニクタイに顯アれ神カミに由ユりて義ギせせられ天使テんシ筈ハに見ミられ諸民シヨミンに傳ツタへられ、世界セカイに信シンぜられ、光榮クワウエイの中に舉アげられたり。

第四節

一イチ神カミは明アカに言イふ後世ゴウセイ或アル人ニ人ニ信シンを離ヒれて誘惑ユウワクの諸神シヨシン及び魔鬼マジキの教カウを納イる、

あらん、二ニ是コノれ其ソノ眞心マコトコノの格ヤかれたる虚言ウソコト者モノの偽善ヘイゼンに由ユりてなり。三サン彼等カレラは嫁娶カシヨを禁キンじ、信シンじて眞實シンジツを知る者モノが感謝カンシャして食クはん爲タメに神カミの造ツクりたる食品シヨクヒンを斷タつことを命メイす。四シ蓋フタ悉シツくの神カミの造物サツブツは善ゼンにして棄スつべき者モノなし惟ただ感謝カンシャして之レを受ウくべし、五ゴ神カミの言コトと祈禱キタウさを以もつて聖セイにせらるゝが故ゆゑなり。六ロク爾ニ此レ等ヲを兄弟ケイテイに勸すすめば、イイススハリストススの眞マコトき役者エキヤク信シンの言コト及び爾ニが從したがひし善よき教カウに育やしなはるゝ者モノと爲ならん。七シチ卑ヒしき虚談ウソコト及び老婦ラウフの奇談キタンを避さげよ、自ら敬虔ケイケンに練習レンシユせよ。八ハチ肉體ニクタイの練習レンシユは益エキ少し、惟ただ敬虔ケイケンは一切イチの事コトに益エキありて、現在ゲンザイ及び未來ミライの生命シメイの許約キョウヤクを得ウるなり。九ク此レ信シンなる全マツタく受ウくべき

音なり。一〇蓋我等は此が爲に勞して勝を受く、乃活ける神に望あるに因りてなり、
 彼は悉くの人特に信者の救主なり。二爾此等の事を戒め且教へよ。三一人の年少
 きを以て輕んずべからず、乃爾言に行に愛に神に信仰に潔淨に於て信者の模範と
 爲れ。二三爾言と勸諭と教訓とを務めて、我が來るを俟て。二四爾に在る恩賜預言に由
 りて長老の按手を以て爾に授けられし者を忽にする勿れ。二五此等の事を思念し專
 ら之を務め、爾の上達が衆に顯れん爲なり。二六己と教ふる事を慎め、恒に之に居
 れ蓋斯く行ひて、爾は己及び爾に聽く者を教へん。

爾言

一老人を嚴責する勿れ、乃彼に勸むること、父に於ける如くせよ、少き者には
 兄弟に於ける如く、二老女には母に於ける如く、少き女には、凡の潔淨を以て姉妹に於
 ける如くせよ。三養を敬へ、即眞の養なる者を。四然れども若し養に子或は孫あらば、
 彼等先づ己の家に孝敬を行ひ、其親に恩を報ゆる事を學ぶべし、蓋是れ榮にして神の
 前に納れらるべき事なり。五眞の養にして獨なる者は、神を頼みて、晝夜祈禱祈願を爲
 す、然れども樂を繼にする者は、生くことも死せるなり。七爾此を以て彼等を戒めて、實

むべき所なからしめよ。人若し己に屬する者殊に己の家族を顧みずば、信に背き、不信者よりも惡しき者なり。彼等の籍に登せらるゝは六十歳より少からず、一夫の婦たりし者、一〇せんが、以て證せらるゝ者若くは子女を育て若くは遠人を館し若くは聖徒の足を濯ひ若くは忠難の人を助け若くは凡の善事に従ひし者たるべし。一、然れども少き箴を受くる勿れ、盜彼等ハリストスに背きて、心を亂す時は復嫁がんと欲す。一、彼等は罪に定められん其初の信を棄てし故なり。一、且彼等は問暇にして、人の家を廻るを習ひ、問暇なるのみならず、亦多言を爲し、見聞を好み言ふべからざる事を言ふなり。一、故に我少き箴の復嫁を生子を養ふ家を齊へ、敵に一も闘るべき機を與へざらんことを欲す。一、盜彼等の中には己に稱じてサタナに従ひし者あり。一、若し信男或は信女に誘あらば、之を養ふべし、教會を煩はす可からず、之をして眞なる養を養ふを得しめん爲なり。一、善く治むる長老は信して之を敬ふべし、言と教とを以て勞する者には、殊に然すべし。一、聖書に云く、穀物を踐み落す牛には、口を閉づる勿れ、又云く、勞する者其値を得るは宜しきなりと。一、長老を駭ふることをあらば、二三の

敵者あるに非ずば之を受くる勿れ。二〇 罪を犯す者を衆の前に責めよ他の者も懼を
 抱かん爲なり。二一 我は勝及び主イエススハリストス及び其選びたる天使等の前に
 於て爾に戒む此を守りて預見を執る勿く二も備候して行ふ勿らんことを。二三 速に
 何人にも手を按する勿れ人の罪に與る勿れ自ら潔きを守れ。二四 是より水のみを飲
 む勿れ乃少しく酒を用ぬよ爾の飲の爲及び爾の腹疾むに因りてなり。二五 或人の罪
 は明にして直に密を受けしめ或人の罪は後に顯る。二六 是くの如く善行も亦明なり
 然らざる者も隠る能はず。

第二節 一 凡そ輒の下に在る僕は己の主を以て全く敬ふべき者と爲すべし神の名
 をしへ 敬との勝られさらん爲なり。二 信者たる主に属する僕は其兄弟なる故を以て之を
 經んすべからず乃益勤むべし其信者にして愛せらるる者恩寵に與る者たるに因
 りてなり爾此等を敬へ且勤めよ。三 異なることを敬へ我等の主イエススハリストス
 の歸正なる言及び敬虔の教に従はざる者は四 自ら驕り知る所なく討論争辯の病あ
 り之よりして熾熾分争訕謔惡しき疑 又智慧を亂し眞實を失ひ敬虔を以て利を

獲る者なりと意ふ人人の空論は生ず。爾是くの如き者より遠ざかれ。敬虔にして足
 ることを知るは、大なる利なり。蓋我等は何者をも世に搦へ來らざりき何者をも之
 より搦へ去るを得ざることを明なり。食あり衣ありて、我等足れりき爲すべし。富を
 得んき欲する者は、隣に、人に災難を沈淪に溺らす所の無智にして、害ある多く
 の怒に陥るなり。一、利を貪るは、萬惡の根なり、或者は之に耽りて、信より離れ、多く
 の苦を以て自ら刺せり。二、神の人よ、爾此等を選りて、敬虔、愛、忍耐、溫柔を、一
 信の善き職を、觀ひ、永遠の生命を、執れ、爾は之に召されて、多くの證者の前に、善き承
 認を作せり。二三、我萬有に生を施す神の前に、及び、ポンテ、ライヒラトに對して、善き承認を
 證せし、ハリストス、イエススの前に、於て、爾に命ず、一、玷なく、責むべきなく、我等の主
 イエスス、ハリストスの、顯現に至るまで、誠を守らんことを。二、神は、其期に、屆りて、此
 の顯現を示さん、即有禍にして、獨一機能なる、神、諸王の王、諸主の主、獨一不死を
 有つ者、近づく可からざる光に、居る者、人の未だ、曾て見ず、又見ること、能はざる者なり。
 願はくは、彼に、尊榮と、永遠の權能と、は歸せん、「アミン」。爾此の世に於て、當める者

に戒めよ、彼等が高ぶらずして、定まりなき富を恃むなく、乃我等に樂の爲に豊に一切
 を賜ふ活ける神を恃み、一八、恩恵を行ひ、善行に富み、惜まずして、施を爲し、善く人と交
 り、一九、斯くして永遠の生命を得ん爲に、未來に善き基を爲す財を己に蓄へんことを。
 二〇、嗚呼、マモズイよ、爾に託せし事を守りて、妄なる虚言及び偽りて知識と稱する反
 論を避けよ、二一、或者は之に耽りて、信に背けり。願はくは恩寵は爾と備に在らんことを
 〔アミン〕。

聖使徒パウロがテモスイに達する後書

第一

パウロの神の旨に由りて、ハリストスイイススに在る生命の許約に備ひて、
イススハリストスの使徒と爲れる者は、誓して至愛の子テモスイに達す。願はく
は恩寵と慈憐と平安とは神父及びハリストスイイスス我等の主より爾に賜ばらん
ことを。我先祖より潔き良心を以て事ふる所の神に感謝す。晝夜我が祈禱の中に爾
を記念して已めざるに因る。且爾の涙を念ひて切に爾を見んことを望む。我が喜に
満てられん爲なり。遊我爾の偽なき信を憶ひ起す。此れ先に爾の祖母ロイダ及び
爾の母エリカに居りき。我爾に信す。爾の中にも居ることな。是の故に我爾に、我の
接手に由りて爾の中に在る所の神の恩賜を熾さんことを記念せしむ。蓋神の我等
に賜ひしは長の神に非ず。乃能き愛と睿智との神なり。故に爾我等の主イスス
ハリストスの証及び彼の囚人たる我を以て耻と爲す勿れ。乃神の能に備ひて、ハリ
ストスの福音と共に苦を受けよ。神は我等を救ひ且聖なる召を以て我等を召せり。是

我等の行に由るに非ず、即其旨と恩寵とに由るなり。是の恩寵は世世の先よりハリ
 ストスイイスに於て我等に賜はり、一〇今我等の救主イエススハリストスの現る
 を以て明になりたり。蓋彼は死を滅し生命と不朽とを照せり。福音に由りてなり、
 我之が爲に立てられて、宣傳者と爲り、使徒と爲り、異邦人の教師と爲れり。一一是の
 故を以て、我此等の苦を受く然れども、耻とせず。蓋我は我が信する者を知り、且彼が我
 の託せし者を彼の日に至るまで守らん。ことを能すと確信す。一二爾ハリストスイ
 イスに於ける信と愛とを以て、我に聞きし所の醇正の旨の模範を保て。一四我等の
 中に居る聖神を以て、善き委託を守れ。一五アシヤの者皆我を棄てたり。爾之を知る。其
 中にヌゲル及びエルマゲンあり。一六願はくは主は慈憐をカニシフルの家に賜はん
 ことを。蓋彼は、我を慰め、且我が線纒を耻とせざりき。一七すなはち、乃羅馬に在りし時、務め
 て我を尋れて、我に遇へり。一八願はくは主は彼に、彼の日に於て、主の慈憐に遇ふこと
 を賜はん。エヌスに在りて、彼が如何ばかりか、我に事へしは、爾更に能く之を知る。
一九又多

第二〇章

一

吾が子よ

是を以て爾

ハリストスイ

イスに在る

恩寵に堅固

なれ

又多

くの證者の前に於て我に聞きし事を忠信にして他人を教ふるを能する人に託せよ。
故に、用苦を忍ぶこと、イエススハリストスの善き軍士の如くせよ。凡そ軍士た
る者は、度生の務を以て己を累はさず、彼を戮れる者を悦ばしめん爲なり。又力を角
ふ者は、若し法に違ひて角はずば、冕を得ず。勞する農夫は、先づ實を食ふを得べし。セ
我が言ふ所を察せよ。願はくは、主は爾に萬事を曉らしめん。ハダワドの裔たる主イエ
ススハリストス、死より復活せし者を、我が福音に循ひて記念せよ。此の福音の爲に
我、苦を受けて、犯罪者の如く繋がるゝに至れり。然れども、神の言は繋がれず。一〇故
に、我選ばれたる者の爲に、一切の事を忍ぶ。彼等もハリストスイイスに於て、救み永
遠の光榮を得ん爲なり。二、信なる彼等の言、若し我等彼と信に死せば、彼と信に生
さん。一、若し忍ばば、彼と信に王たらん。若し降まば、彼も我等を降まん。三、若し我等
信ならずば、彼は恒に信なるなり。蓋己に遠不能はず。一、爾此等の事を記念せしめ、主
の前に戒めて、争論なからしめよ。是れ一も益なくして、悪く者を亂すのみ。二、戒めて
己を潔すべき者、恥を得ざる。工者眞實の言を正しく傳ふる者として、神の前に立てよ。

一六 妄なる虚言を避け、蓋彼等益不虞に逃まん、一七 彼等の言は脱道の如く廣まら
ん。イメ子イ及びスリトは是くの如き者の中に在り、一八 彼等は眞實に離れ復活已に
過ぎたりと音ひて或者の信を圯る、一九 然れども神の堅き基は立てり是に印あり云
く、主は己に屬する者を知れり又云く、凡そ主の名を稱ふる者は不義を離るべし。二
〇 大なる屋には、第金及び銀の器あるのみならず、亦木及び土の器あり或は費き用と
爲る者あり或は我からざる用と爲る者あり、二一 故に人若し此等を離れて己を潔く
せば費き用と爲り、聖にせられて、主宰の用に合ひ、凡の善行に備へられたる器と爲ら
ん。二二 少年の慾を避けて、義信愛凡そ清き心より主を離る者に於ける和平を道
へ。二三 愚魯不學の辯論を避け、争の是より生ずるを知ればなり、二四 然れども主の
僕は争ふ可からず、乃柔和に衆人を待ひ、善く教訓を施し、忍耐を爲し、二五 溫柔を以て、
遊ふ者を戒むべし、神或は彼等に悔改を與へて、眞實を獻らしめん、二六 彼等が惡鬼即
彼等を捕へて己の旨を行はしむる者の網より脱れん爲なり。

二三

一 爾之を知れ

末の日に於て

艱難の時

至らん

蓋人は自愛

貪婪驕傲

矜慢

な

る者、辨防する者、父母に順はざる者、恩を讎らざる者、不度なる者、無情なる者、和を好
 まざる者、讒言する者、慈を疑にする者、殘酷なる者、善を好まざる者、信義を破る者、放
 肆なる者、自負なる者、神を愛するより、も快樂を愛する者、敬虔の貌ありて、其實を察
 てし者と爲らん。爾是くの如き者を避けよ。人の家に竊み入りて、婦を惑はす者は若
 る輩に屬す。此の婦は即罪に溺れ、種種の愁に誘はれ、常に學べども眞實を識るに至
 る能はざる者なり。ハ イアンニイ及びイブムブリイのセイセイに敵せしが如く斯の
 輩、即智慧の壞られたる者、情の理に昧き者は、亦是くの如く眞實に敵するなり。然
 れども彼等は多く進まさらん。蓋彼等の無智は、彼の二人の遇ひし所の如く衆人の前
 に露れん。一、爾に至りては、我が教訓品行意志、信仰、寛容、仁愛、忍耐。二、我がアン
 ナヒヤ、イコニヤ、リストラに在りて遇ひし所の發達及び苦難に於て、我に従へり。此の
 發達は我之を忍び、主は我を悉く其中より救へり。三、凡そ敬虔を以て、バリストスイ
 イナスに在りて坐を度らん。欲する者は皆發達せられん。四、惡しき人及び人を欺
 く者は、益惡に進みて人を惑はし、自ら惑はされん。一、然れども爾は學びし所及び爾

に託せられし所に居れ爾誰より學びしかを知ればなり。一 且爾は幼より聖書を
知る即能く爾にハリストスイエスに於ける信に由りて教を得しむる智慧を與ふ
る者なり。一六 聖書は皆神の感する所の者にして教訓督責矯正及び義に導くに益あ
り。一七 神の人が全き者と爲りて凡の善行に備へられん爲なり。

第四節

一故に我は神及び我等の主イエスハリストス即其顯現の時其國に於

て生者及び死者を審判せんとする者の前に在りて爾に戒む。二 音を傳へ時を得るも
時を得ざるも顧みて之を勉め凡の恒忍と教訓とを以て責め戒め勸めよ。三 盜時至ら
ん人人正の教を容れず即其私慾に徇ひて己の爲に耳を悦ばしむる教師等を擯び
耳を眞實より避け轉じて虚脱に向はん。四 然れども爾は一切の事に敵愾し苦を忍
び福音者の工を行ひ爾の職を盡せ。五 蓋我已に祭として獻せらる我が進く時至れり。
六 我善き服を脱ぎ履すべき程を盡し信を守れり。七 今より後義の冕は我の爲に備へ
らる主義なる審判者は彼の日に於て之を我に賜はん第八 我のみならず乃凡そ彼の顯
現を慕ふ者にも賜はん。九 爾務めて速に我に來れ。一〇 蓋云マスは斯の世を愛し我

を棄て、ニサロニカに往き、クリスセントはガラテヤに、カトはグルマテヤに往けり。
獨ルカのみ我を偕に在り。一、ナルコを擯へて、偕に來れ、蓋彼は役事の爲に我に
要する所あり。二、ヒクをエヌスに遣せり。三、爾來の時、我がトロアゲに於て、カ
ルプに託せし、外服を擯へ、又書、殊に革の名を擯へよ。四、銅工アレキサンドル我に
多くの害を爲せり。願はくは主は其行に備ひて、彼に報いん。五、爾も彼を助け、蓋彼は
甚しく我等の言に敵せり。六、我が始めて己の事を訴ふる時、一人も我を偕にせざり
き、皆我を顧れたり。願はくは此れ彼等に歸せざらん。七、然れども主は我を偕に立ち
て、我を堅めたり。我に由りて、福音は證明せられて、異邦人皆之を聞かん爲なり、我の
口より脱れたり。一八、主は又我を諸の惡事より脱れしめて、我を其天國の爲に救はん。
願はくは光榮は無窮の世に彼に歸せん、「ニアミン」。一九、爾プリスキラ及びアキラ及
びオニシフルの家に安を問へ。二〇、エラストはコリンフに留れり、トロフムは病を患
ふるに困りて、我彼をミリトに留めたり。二一、爾務めて冬の前到來。エマル、ラドリン、
クラサテヤ及び衆兄弟、爾の安を問ふ。二二、願はくは主、イエススハリス、ストスは爾の神

と儂こもにせん願ねがはくは恩寵おんちゆうは爾等なんぢらと儂こもに在あらんことなアミン。

聖使徒パウロがテトに達する書

第一 一 パウル神の僕、イオニスハリストスの使徒神の選びたる者を信に導き、彼等をして敬虔に思する眞實を知らしめ、彼等をして離なき神が世の先より約し、期に届りて、其言を以て、我等の救主神の命に備ひて我に託せられし宣傳に由りて、願し、永遠の生命の望を得しめん爲に立てられたる者は、書じて、共同の信に由りて眞の子なるテトに達す。願はくは恩寵と慈憐と平安とは神父及び主イオニスハリストス我等の救主より常に賜はらんことを。我爾をクリトに留めしは、爾が缺けたる所を補ひ及び各色に長老を立てること、我が爾に命ぜし如くせん爲なり、即ち責むべき所なき者、一婦の夫たる者、其子女の信者にして、放蕩或は不順の訴なき者を擲びて立つるなり。蓋し監督は神の家宰たるに依り責むべき所なき者、己を執らず、隠し、怒らず、酒を好まず、人を敵たす、汚利を食らず、ハズナハルン、シムン、アキラ、の御に遠人を待ぶ者、善を好む者、廉節公義、聖潔節制なる者、學びし所の信なる言を堅く執る者たるべし。即ち正の教を

以て人に勸め、且抗論する者を折くを得ん爲なり。一〇 盜賊はざる者、空論を爲す者、及び惑はす者多くあり、割禮者に於て殊に多し。一二 是くの如き者の口を拵ぐべし、彼等は汚利の爲に宜しからざることを教へて、全家を覆へす。一三 彼等の中の一なる彼等に屬する預言者は云へり、グリト人は恒に隣る者惑しき狀、傾倚なる取なりと。一四 此の證は眞なり。故に爾殿しく彼等を責め、彼等が信に健全にして、一五 イリテヤ人の虚脱及び眞實に背く、人人の律令に意を用ゐざらん爲なり。一六 潔き者の爲には、凡の物潔し汚れたる者及び不信者の爲には、一七 も潔き者なし、卽彼等の知識も良心も汚れたるなり。一八 彼等は神を識る言ふ、然れども行を以て之を歸む、蓋惡むべき者、順はざる者、凡の善事を絶ちたる者なり。

一 然れども爾は醇正の教に合ふことを言へ、二三 卽老人には謹慎端莊廉節にして、信と愛と忍耐とに健全なるべきことを勸め、二四 老婦には同じく、其外能聖潔に合ひ、饑饉せず、多くの酒を飲まず、善を以て人に教ふべきことを勸め、二五 彼等をして、少き婦に、夫を愛し、子を愛し、自ら割し、貞潔にして、家を守り、善長にして、其夫に従ふこと

ことを教へしむべし、神の言が勝を受けざらん爲なり。亦少年に自ら制すべきことを
 勤めよ。爾は一切の事に於て己を以て善行の模範と爲し、傳教に於て誤なきことを
 莊なること爲なきこと、言の端正にして責むべきなきことを表せ、敵が自ら愧ち、我
 等に對して何の惡しき事をも言ふを得ざらん爲なり。僕には其主に従ひ、一切の事
 に於て彼等に悦ばれ、勝はず。一〇 爾等、乃全き忠信を願すべきことを勤めよ、彼等
 が一切の事に於て我等の教主神の教の飾と爲らん爲なり。一 聖神の恩寵、衆人に
 救を施す者は現れて、一 我等に不敬虔と世俗の惡さを離れて自ら制し、義と敬虔と
 を以て今の世に生を度り、一 認む所の結及び大なる神、我等の教主イエスス、ハリズ
 トスの光榮の現を待つべきことを教ふ。一四 彼は我等の爲に己を與へたり、我等を凡の不
 法より贖ひて己の爲に選ばれたる民、善行に熱心なる者を潔めん爲なり。一五 爾此等
 を言ひ、此等を勤め、一切の權を以て責めよ、人をして爾を輕んぜしむる勿れ。

第三章 爾彼等に、政を執る者及び權を有つ者に服し、且願ひ、凡の善行に己を備へ、
 人を防らず、争はず、柔和にして、悉くの人に凡の溫柔を表さんことを記念せしめよ。

三 我等も彼には悪なる者順はざる者速へる者種種の慈と樂との奴隸たる者怨恨
 相嫉を以て日を送りし者惡むべき者又互に惡める者たりき。然れども我等の教主
 神の恩寵と仁愛との顯れし時、彼は我等が行ひし所の義の功に由るに非ず、乃己
 の慈憐に由りて、重生の洗及び聖神の復新を以て、我等を救へり。聖神は即神之
 イススハリストス我等の教主に由りて、豊に我等に注げり、我等が彼の恩寵を以て
 義させられて望に備ひて、永遠の生命の嗣と爲らん爲なり。信なる故此の言我用
 此等の事を確に證するを認む神を信する者は務めて善行を行はん爲なり此は美に
 して人に益あり。愚なる辯論と系圖と争闘と律法の争とを遠ざけ、蓋此等は益な
 くして、虚しき事なり。一 異端者を一次及び二次警めて後に擯けよ、二 是くの如き
 者が道に背き罪を犯して、自ら疑定するを、知ればなり。三 我がアルテマ、或はカヒク
 を用いて道さん時、爾速に我にニコガリに來れ、蓋我彼處に冬を過ごさんことを定め
 たり。一 律法家シナ及びアボロスを鑑に送りて、彼等に「も乏しきことなからしめ
 よ。二 我等の徒も善行を務めて、蓄むる所の用に備ふるを學ぶべし、果を結ばざる者

と爲らざらん爲なり。一五我と信に在る者皆爾の安を問ふ。爾は信に在りて我等を愛する者に安を問へ。願はくは恩寵は爾等衆と信に在らんことを「アミン」。

分ト書

ノ三三三

聖使徒パウルがフリモンに達する書

一 パウル、イエス・ハリストスの囚たる者及び兄弟をモスイは番して至愛なるフリモン、我等の同勞者、及び至愛なる姉妹アプサ、及び我等の同職者アルヒブ并に爾が家の教會に達す。願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イエス・ハリストスより爾等に賜はらんことを。我恒に我が祈禱の中に爾を念ひて、我が神に感謝す。爾の愛及び主イエス・ハリストスと衆聖徒とに於ける信を聞くに因る。願はくは爾が信の共與は力行して、爾等の中に於て、ハリストス・イエスに由る凡の善を知るを致さん。蓋我等は爾の愛に因りて、大なる喜と慰とを得たり、兄、爾に由りて聖徒の心安んぜられたればなり。故に我ハリストスに在りて毅然として爲すべき所を爾に命ずるを得と雖、神愛の故を以て、爾に求む、我是くの如きパウル、老いたる者、今猶イエス・ハリストスの囚と爲れる者は、一〇、我が子オニシム、我が細綿の中に生みし者の爲に爾に求む。一、彼先には爾に益なき者たりしが、今は爾及び我に益ある者と爲れり。

我彼を爾に歸す。一二 爾彼を我が心さして受けよ。一三 我彼を我が側に留めて、我が福音の爲に受くる所の纏繞の中に爾に代りて我に事へしめんことを望めり。一四 然れども爾の旨を得ずしては我何をも爲すことを欲せざりき、爾の善事は已むを得ざるが如くならずして、心願に由らん爲なり。一五 盜知らず彼が暫時爾に離れしは或は爾が永く彼を受けん爲、一六 已に僕の如くならず乃僕に超てて我が甚愛する所、爾が肉體に於ても主に於ても更に愛する所の兄弟として受けん爲ならん。一七 故に若し爾我を友と爲さば彼を受くること我の如くせよ。一八 彼若し爾を僕し或は爾に負ふ所あらば之を我に歸せよ。一九 我バマル手づから之を僕せり我僕はん、我爾は己を以て我に負へりと言はず。二〇 然り兄よ、我に爾より主に於て得る所あらしめよ、我が心を主に於て安んぜしめよ。二一 我爾が順はんことを深く信じて之を爾に書せり、我知る、爾は我が言ふ所よりも多く爲さん。二三 爾且我が爲に寓所を備へよ、蓋我信ず、爾等の祈禱に由りて、我の爾等に賜はらんことを。二三 ハリストス イイススに緣りて我と偕に囚さ爲れるエバフランス及び我の同勞者マルコ、プリスタル、テマス、ルカ、爾の安を

聞きふ。ニニ願ねがはくは我われ等らの主しゆイイススハリストスの恩おん寵ちゆうは爾なん等らの神しんとと併ともに在あらんこ
こを「アミン」

スリマン

14311

聖使徒パウロがエウレイ人に達する書

第一書 一 昔、爾多方を以て預言者に藉りて先祖に語りし神は、此の末の日に於て其子即之を立て、萬物の嗣を爲し之を以て世世を造りし者に藉りて我等に語れり。三 彼は神の光榮の光其本性の像として己の能力の音を以て萬物を持ち既に己を以て我等の罪の淨を爲して高處に在りて威嚴の寶座の右に坐せり。四 彼が天使等に超ゆるは其嗣きたる名の彼等より尊きが如し。五 蓋神は何の天使に對ひて曾て云ひしか、爾は我の子我今日爾を生めり又我は彼に於て父を爲り彼は我に於て子を爲らん。六 又家子を引きて世に入る、時曰く神の悉くの使は彼を拜す可し。七 天使等に及びては曰く爾は其使者を以て風を爲し其役者を以て火燄を爲す。八 子には曰く神よ爾の寶座は世世に在り爾の國の權柄は正直の權柄なり。九 爾は義を愛し不法を惡めり故に神よ爾の神は爾に敵の音を傳けしこと爾の侶に勝れり。一〇 又曰く主よ爾初に地を基けたり天も爾が手の造工なり。一一 此等は亡びん然れども爾は永く

存す此等は皆衣の如く古び、一 爾衣服の如く之を搥き、此等は易らん然れども爾は易らず爾の年は終らざらんぞ。二 神は何の天使に對ひて曾て云ひしか爾我が右に坐して我が爾の敵を爾の足の発き爲すに迄れき。三 彼等は皆奉事する神遣されて、救を嗣がんとする者の爲に役事する者に非ずや。

第三節 一 是の故に我等聞きし所を尤慎むべし恐らくは或は離れ落ちん。蓋若し天使等に藉りて告げられし者は堅く立ちて凡の迷背と不順とは公正の報を受けしならば、我等此くの如き救を願みずして如何ぞ道るを得ん。斯れ始主に因りて傳へられ彼より聞きし者に因りて我等の中に堅く立てられ、神に縁りて其旨に循ひて休徴奇蹟種種の異能及び聖神の分子を以て誰せられたり。蓋神は我等が言ふ所の未來の世を天使等に服せしめしに非ず、然れども或人一篇に聽して曰へり、人は何物たる爾之を憶ふか人の子は何物たる爾之を顧みるか。爾彼を天使等より少しく還らしめ彼に光榮と尊貴とを冠らせ彼を爾が手の遣りし者の上に立て、人萬物を其足下に服せしめたり。既に萬物を彼に服せしめられたれば、乃一も彼に服せざりし

者を遣さざりき。然れども今我等は未だ萬物の彼に服せられしを見ず。唯我等は天使等より少しく遜らしめたるイエスが死を受くる爲に、光榮と尊貴とを冠らせられたるを見る。彼が神の恩寵に由りて、衆人の爲に死を嘗めん爲なり。一〇万物の本づく所萬物の歸する所の者が、多くの子を光榮に導きて、彼等の救の君をして、苦を以て成全せしむるは宜しきに合へり。一、盗聖にする者と聖にせらるゝ者は皆一の者より出づ。是の故に彼等を兄弟と稱ふるを愧ぢずして。二、曰く我爾の名を我が兄弟に傳へ、爾を會中に誅はん。一、又曰く我彼を頼まん。又曰く、親よ、我及び神が我に與へし諸子は此に在り。一、夫れ諸子は肉と血とに屬するが故に、彼も亦親しく之を受けたり。死を以て、死の權を乘る者即無冤を空しくし。一、死を畏るゝに因りて生涯故役に服せし者を釋たん爲なり。一、蓋彼は天使等より受くるに非ず、即アウラアの裔より受く。一、故に凡の事に於て兄弟に背るべかりき。神の前に於て、誠、忠、信なる司祭長と爲りて、民の罪を贖はん爲なり。一、蓋彼親ら試みられて、難を受けしが故に試みらるゝ者にも能く助くるを爲すなり。

第三章 是を以て聖なる兄弟共に天の召に與る者よ我等の承認の使徒及び司祭長たるイイススハリストス、彼を立てし者に忠信なることモイセイが其全家に於けるが如くなる者を深く思へ。蓋彼が光榮を受くべきこと、モイセイに超ゆるは、家を造りし者の家より厚きが如し。蓋凡の家は之を造る者あり惟萬有を造りし者は神なり。モイセイも彼の全家に在りて僕人の如く忠信たりき告げらるべきことなを證せん爲なり。然れどもハリストスは彼の家に在りて子の如し。我等若し勇敢に望の誇さを終に至るまで堅く守らば乃彼の家たるなり。故に聖神の云ふ所の如く、今日爾等彼の聲を聞かば、八曾て野に在りて試の日に激怒の時に於けるが如く爾等の心を頑にする勿れ。彼處に在りて爾等の先祖は我を試み、我を驗し四十年間我が所爲を見たり。故に我其代を憤りて云へり、彼等は常に心迷ひ、我が道を織らざりき。故に我は我が怒に於て醫へり、彼等は我が安息に入らざらん。兄弟よ慎みて爾等の中に不信の惡しき心を樹く者なからしめよ、活ける神より離れざらん爲なり。一三 乃今日と稱ふるを得る間日日相勸めよ、爾等の中一も罪に迷はざらん

に爲らざらん爲なり。一四四 盜我等若し始の本位を終に至るまで堅く守らば、ハリストスに與る者と爲れるなり。一四五 今日さ昔ふ間爾等彼の聲を聞かば、激怒の時に於けるが如く、爾等の心を預にする勿れ。一四六 盜聞きし者の中に怒を激せし者あり、然れどもモイセイに従ひてエギプトより出でし者皆然せしに非ず。一四七 然らば彼は四十年間誰に向ひて憤りしか、罪を犯して其屍の野に仆れし者に非ずや。一四八 誰に向ひて彼の安息に入らざらんか、怒ひしか、順はざる者に非ずや。一四九 是を以て我等は彼等が不信に由りて入るを得ざりしを觀るなり。

第四章 一五〇 故に我等畏るべし彼の安息に入る許約の尙存する時に於て恐らくは爾等の中に及ばざる者あらん。一五一 盜我等にも福音せられしこと、彼等に於けるが如し、然れども彼等には聞きし所の言は益を爲さざりき、聞きし者の信を和せざるに由りてなり。一五二 安息に入る者は、我等信ぜし者なり、彼の言ひし所の如し、我は我が怒に於て醫へり、彼等は我が安息に入らざらんか、然れども彼の工は世の始より成れり。一五三 盜一篇に第七日の事を云へるあり、神は其悉くの工を竣へて、第七日に安息せり。一五四 又

茲に云ふ彼等は我が安息に入らざらんこと。是を以て猶之に入らんことする者あり而して先に福音を受けし者は順はざるに由りて入らざりしが故に、又一日を定めて、多年の後に、ゲワドを以て今日と曰ふ前に云ひしが如し、今日爾等彼の聲を聞かば爾等の心を頑にする勿れ。蓋若しイイスス(ナツン)彼等を安息せしめしならば、後に他の日の事を言はざりしならん。故に神の民には猶安息存するなり。一〇 蓋彼の安息に入りし者は其工を竣へて安息せり、神が己の工に於けるが如し。一一 故に我等其安息に入らんことを勉むべし何人も彼の例に效ひて不順に陥らざらん爲なり。一二 蓋神の言は活きて能あり、凡の兩刃の劍よりも利く、刺して靈及び神筋節及び骨髄の間を剖くに至り、且心の意と念とを鑿察す。一三 又物として彼の前に顯れざるはなし、乃 皆裸にして、其目の前に露る、我等彼に事を陳べん。一四 故に我等に大なる司祭長、諸天を経たる者、イイスス神の子有るに由りて、我等の承認を固く守るべし。一五 蓋我等の司祭長は、我等の柔弱を體恤する能はざる者に非ず、乃即の外一切の事に於て、我等の如く試みられたる者なり。一六 故に我等毅然として恩寵の寶座に就くべし、矜恤

を受け、機に合ふ助さして、恩寵を獲ん爲なり。

第四節

一、凡そ人の中より選ばるゝ司祭長は、人の爲に神に奉事することゝ任ぜ

られて、禮物と祭祀とを神の爲に獻する者にして、無知なる者及び迷ふ者を憐むを

能す、蓋し自も亦柔弱に繼はる、故に彼は民の爲にするが如く己の爲にも亦罪を贖

ふ祭を獻すべし。且人雖も自ら此の尊貴を受くるなし、乃神に召さるゝ者なり、アア

ロンの如く然り。是くの如くハリストスも自ら司祭長の尊榮を以て己に歸せしに

非ず、乃彼に爾は我の于我今日爾を生めりと、言ひし者なり、又他章に云へるが如し、

爾メルヒセテクの班に循ひて、司祭と爲り、世々に迄らん。彼は肉體に在りし日大

なる聲と涙とを以て、彼を死より救ふを能する者に祈禱祈願を奉れり、而して其敬畏

に由りて聽かるゝを得たり。彼は子なりと雖、其受けし苦に由りて、贖ふことを學べ

り。己に全くせられ、凡そ彼に願ふ者の爲に永遠の救の原と爲りて、神よりメル

ヒセテクの班に循ふ司祭長と稱へられたり。此に就きては、我等爾等に多く言ふ

べき事あれども、爾等聴くに鈍くなりたるに因りて、解き難し。蓋し爾等は時の久

しきに因りて、教師たるべき者なり、然るに爾等は復神の言の小學を教へられんことを要す、爾等は乳を要する者も偽れり、堅き食に非ず。一三 凡そ乳に養はるる者は義の言に熟達せず、赤子たるが故なり。一四 堅き食は、乃熟練を以て善惡を別つことに習ひたる感覺を具ふる成人の用ぬる所なり。

第四節

故に我等ハリストスの教の初端を會きて、完全に進むべし、復死の行の悔

改神に於ける信。二 諸洗禮、按手死者の復活及び永遠の審判の教の基を奠く可からず。三 若し神許せば、我等是を行はん。蓋一たび照されて天の賜を味ひ、聖神に與る者も爲り、五 神の慈なる言及び末世の能を味ひて後、墮落せし者は、復悔改を以て之を新にする能はず、彼等己の中に再神の子を十字架に釘して、之を罪に辱しむるに因る。六 盜地、曠之に降る雨を飲み、之を耕す者の爲に用に適する野菜を生ずる者は、神より祝福を受け、荆棘と荊棘とを生ずる者は、用なくして、罪に近く、終には焚かれん。七 至愛の者よ、我等斯く言ふと雖、爾等の事に於ては、爾等が此に愈り、且救に屬する情を有てるを深く信す。一〇 盜神は義ならざる者に非ずして、爾等の行及び爾等が已に聖

徒こに務つとめ、今いまし務つとむるを以もつて彼かれの名なに由よりて願ねがひ、愛あいの勞らうを忘わすれざらん。一一我われ等は
 爾等なんぢらが其その望のぞみの全まくらん爲ために各おのれは各おのれは熱ねつ心しんを終はりて至いたるまで願ねがはんと欲ほつす、
 二二爾等なんぢらが忘わすれずして、彼かれの信しんを恒こん恒ん忍にんを以もつて許きやくを期つぐ者ものに教をはらん爲ためなり。一一三三夫
 れ神かみはアウラムに許きやくを賜たまふ時とき己おのれより大おほなる者ものの一いつも指さして誓ちかふべきなきが故ゆゑ
 に己おのれを指さして誓ちかひて 一一云いへり我われ必かならず願ねがひて爾等なんぢらを祝しゆくし、益たまして爾等なんぢらを益たまさんぞ。
 一一五五斯かくアウラムは恒こん恒ん忍にんして許きやくせられし所ところを獲えたり。一一六六人ひとは己おのれより大おほなる
 者ものを指さして誓ちかふ且かつ事ことを確かくしする誓ちかひは彼等かれらの凡おほよそ争まつ論ろんを息やむ、一一七七故ゆゑに神かみも許きやくを期つ
 ぐ者ものに己おのれの望のぞみの易かはざるを更さらに明あきらかに示しめさんと欲ほつして、別べつに誓ちかひを立てたり、一一八八斯かの二
 の易かはざる者ものに於おいて神かみは能あたはざるが故ゆゑに、我等われら斯かの二ふたつの者ものを以もつたしかに確かくなる慰なぐさを得
 ん爲ためなり、我等われらは超はりて我われが前まへに在ある望のぞみを執とる者ものなり。一一九九此この望のぞみは我等われらの望のぞみの爲ため
 に堅かたくして、動うごかざる鐵てつの如ごとし、且かつ板いたの内うちに入る、二二〇〇すなはち 一一即すなはち イイススがメルヒセテクの
 班はんに預あひて、世よの用もち祭さい長ちやうと爲なりて、我等われらの爲ために前まへ驅かへして入いりし所ところなり。
 一一 蓋い此こののメルヒセテクはサリムの王わう至上じやうの神かみの用もち祭さいなり、諸王しよわうを敗やぶりて歸かへ

れるアウラムを迎へて、之を祝福せし者なり。二 アウラムは彼に一切の十分の一
を分ちたり。先づ其名を隠せば、彼の王なり、次にサリムサリムの王即平安の王なり。三 父なく、
母なく、系圖なく、日の始なく、生命の終なく、神の子に似たる者にして、恒に司祭たるな
り。四 親よ、太祖アウラムは其尤善き抄掠品の十分の一を彼に與へたれば、其人如何
にか大なる。五 レワイの階子の中司祭職を受くる者は律法に由りて、民、即己の兄弟
より、彼等もアウラムの裔なりと雖、其十分の一を取るべき命を奉ず。然れども
其人は、彼等の族より出でずして、アウラムより十分の一を受け、且許約を奉ずる者
を祝福せり。六 夫れ小なる者が大なる者より祝福せらるゝは、一も餘なきなり。八 且此
には、十分の一を取る者は死すべき人なり、彼には己の事を彼は生くさ證せらるゝ者
なり。九 又斯く言ふべし、十分の一を取る所のレワイは自らアウラムに由りて、十分
の一を供せり。一〇 盜メルヒセテクがアウラムに遇ひし時、彼は尙其祖の身に在
りたり。二 是を以て良はレワイ司祭職の下に律法を受けたるが故に、若し此の司祭
職に由りて完全なることを得べくば、何ぞ亦メルヒセテクの班に預ひて他の司祭の

興り、アアロンの班に備ひて稱へられざる者を須ぬん。一三 盜司祭職の易る時は、律法も亦易らざるを得ず。一四 此等の音の指す所の者は、他の支派に屬すればなり、即ち申一人も祭壇に奉侍せざりし支派なり。一五 盜我等の主がイウダより出で、こゝは明なり、モイセイは此の支派に於て司祭職の事を一も言はざりき。一六 其更に明なるは、盜メルヒセテクに似たる他の司祭の孰るなり。一七 乃肉體の誠の律法に備ふに非ずして、無窮の生命の能に備へる者なり。一八 前誠の廢せらるゝは、其弱くして益の班に備ひて司祭を爲り、世世に迄らんと。一九 蓋律法は一も全うせし所なし、乃更に善き忍は入れらる、我等を神なきが故なり。二〇 蓋律法は一も全うせし所なし、乃更に善き忍は入れらる、我等を神に近かつかしむる者なり。二一 且此れ誓なくしてあらざりしに因る。二二 蓋彼の司祭等は誓なく、彼は誓を以て立てられたり、蓋彼の事を言へるあり、主は誓ひて悔いす、爾メルヒセテクの班に備ひて司祭を爲り、世世に迄らんと。二三 乃イススは更に善き約の保證者と爲れり。二四 又彼の司祭等は多く有りき、死は永く存するを許さざりし故なり。二五 然れども彼は世世に存するが故に、易らざる司祭職を有てり。二六 是を

以て彼は恒に彼に頼りて神に就く者を救ふを得其恒に生きて彼等の爲に轉達するを得るに因る。二六我等の司祭長は實に是くの如き者たるべし乃聖にして惡に與らず垢なく罪人に遠ざかり且諸天よりも高き者、二七彼の司祭長等の如く先づ己の罪後に民の罪の爲に、日日祭を獻ぐるを要せざる者なり蓋彼は己を獻げて、一次之を成せり。二八蓋律法は荏弱ある人を立て、司祭長と爲せり然れども律法の後の誓の言は、世世に完全なる子を立てたり。

第四章

一我が音ふ所の首要は左の如し我等に是くの如き司祭長あり彼は天に於て威嚴の寶座の右に坐せり、二且聖所及び眞の幕即人に非ずして、主の殿けし者の聖務者なり。三凡の司祭長は禮物と祭祀とを獻するが爲に立てらる故に彼も亦獻すべき者なかるべからざりき。彼若し地に在りしならば、司祭と爲らざりしならん蓋此には律法に循ひて禮物を獻する司祭等、天上の者の形と影とに奉事する者あり、モイセイに其幕を造らんとせし時に、告げられしが如し曰く、慎みて山に於て爾に示されし式に遵ひて、一切を造れ。然れども彼が今更に優れる奉事を得たるは、更に善

き許約きやくに基もとける更さらに善よき約やくの中保者ちゆうほうしやと爲なりしに稱なふ。七なな。盜者たうしやし第一だいいちの約やくの虧かくることなかりしならば、第二だいにの者ものを立たつる爲ために處ところを索もとめざりしならん。八はち。然しかれども預言者よげんしやは彼等かれらを責せめて曰いふ、主しゆ云いはく、親おや、日ひ至いたらん、我われイスラエリいすらいりの家いへ及びおよびイウダいうだの家いへと新あらたなる約やくを立たてん、九く。我われが彼等かれらの先祖せんぞに、其手そのてを執とりて、エギプトいぐいとの地ちより引ひき出いしたる日ひに立たてし約やくの如ごときに非あらず、盜彼等たうかれら我われが約やくに止とまされば、我われ彼等かれらを顧かへみざりき、主しゆの言ことは是この如ごとし。一〇じゆ。主しゆ又また云いはく、厥日そのひの後のちに、我われがイスラエリいすらいりの家いへに立たてんとする約やくは是こなり、我われは我われが律法りつぽうを彼等かれらの念おもひに置おき、之これを彼等かれらの心こころに銘しるさん、我われは彼等かれらの罪つみと爲なり、彼等かれらは我われの民たみと爲ならん。一一か。各おの々おの其隣そのとなりに、及びおよび各おの々おの其兄弟そのけいていに、教しへて、主しゆを識しれ、云いはさらん、盜小たうせうより大だいに至いたるまで、悉こごとく我われを識しらん。一二に。我われ彼等かれらの不義ふぎを矜あはれ、彼等かれらの罪つみと不法ふぽうさを復また紀念きねんせざらん。一三さん。新あらたなると謂いひて、第一だいいちの者ものの舊ふるきを示しせり、忿ゆるびて、哀あはれむる者ものは七ななに近ちかし。

第四章 第一だいいちの約やくには奉事ほうじの例れいと地ちに屬ぞくする聖所せいじよとありき。二に。第一だいいちの約やくは設たまけられて、其内そのうちに燈臺とうだいと案あんと、供前きゆうぜんの餅ほんとありき、是これを聖所せいじよと稱しす。三さん。第二だいにの帷ゐりの後のちに至いたる

所ところを稱しやうする幕まくありき。茲こゝには金の香爐かうろと、獨あまねく金を蔽おほひたる約匱やくくわいとあり、其内そのうちに「マンナ」を藏たくわめたる金の頸くび、アロンアロンの萌もせる杖つゑ及び約やくの碑ひあり、其その上うへに贖しよく罪ざい所しよを覆おほへる光榮くわうえいのヘルワムありき。此等これらの事は今詳こゝにいまつまびらかに言いふを庸もちぬす。此等これらの物斯ものかく備そなはりて、第一だいいちの幕まくには司祭しさい等恒つねに入りて奉事ほうじを行おこなひ、第二だいにの幕まくには獨ひとり司祭長しさいちやうのみ、一年いちねんに一次たひち血ちを搗たづへざるなくして入り、之これを己おのれの爲ため及び民たみの愆あやまちの爲ために獻けんす。此これを以もつて聖神せいしんは、先さきの幕まくの尙存なほぞんする時ときは、聖所せいしよに入る途みちの未いまだ啓ひらかれざるを示しめす。此こゝの幕まくは今いまの時ときの喪式へうしきを爲なす、其中そのうちに獻けんする所ところの禮物れいぶつと祭配まつりとは奉事ほうじする者ものの良心りょうしんを全まうする能あたはずして、一一に僅わずかに飲食おんじと、穢しゆく穢しゆくの洗滌あらひと、肉體にくたいに屬ぞくする儀式ぎしきと與ともに設まつけられて、改新かいしんの時ときを待まちてり。一一に然しかれどもハリストス、將來しやうらいの福ふくの司祭長しさいちやうは來きたりて、更さらに大おほいに全備せんびなる幕手まくての遺つく所ところに非あらず、即すなはち其遺式その遺しきに非あらざる者ものに緣よりて、一二に牡山羊おしやんと牡犢おしあひの血ちを以もつて、非あらず、乃すなはち己おのれの血ちを以もつて、一次いちだ聖所せいしよに入りて、永遠えいぜんの贖あがなひを獲とたり。一三に若わかし牡牛おしうしと牡山羊おしやんの血ち及び牝犢めしあひの灰はいは、糝りれたる者ものに灑そがれて、之これを聖せいにし、肉體にくたいの潔淨けつじやうを致いたさば、一四に況いはんや聖神せいしんに由よりて、穢しゆくなくして、己おのれを神かみに獻さげしハリストスの血ちは、我等われらの良心りやうしん

を死しの行なより潔きよめて、活いける眞まことの神かみに奉ほう事じせしむるなや。一五九 故ゆゑに彼かれは新あらたなる約やくの中ちゆう保ほ者しやなり、是これ第一だいいちの約やくの時ときに犯おかせる諸しよ罪ざいの贖あがなひの爲ために成なりたる彼かれの死しに由よりて、永えい遠えんの嗣し業げふに召めされたる者ものが許き約やくせられしことを受うけん爲ためなり。一六〇 登のぼり命いのちの在ある所ところに遺のこ命いのちする者ものの死しの之これに隨したがはんことを要ます。一六一 登のぼり命いのちは人ひとの死し後ごに於おいて閉かたり遺のこ命いのちする者ものの尙なほ生いける時ときには力ちからなし。一六二 故ゆゑに第一だいいちの約やくも血ちなくしては立たてざりき。一六三 盜ぬすモイセイは律りつ法ぽうに違したがひて、悉ことごとくの誠まことを全ぜん民みんの前まへに宣のたまへし後のち報ほうと牡を山やま羊やぎの血ち及および水みづと絲いと綿わたと牛うし膝ひざ草くさをとりて、其その書しよ及および全ぜん民みんに遞たぎて。二〇一 曰いへり、此これ神かみが爾なんぢ等に戒いましめし約やくの血ちなり。二〇二 同おなじく血ちを以もつて落おち及および悉ことごとくの奉ほう事じの器うつはに澆そげり。二〇三 又また諸しよ物ぶつは幾いくど皆みな律りつ法ぽうに循したがひて血ちを以もつて潔きよめらる、血ちを流ながすに非あらざれば赦ゆるしなし。二〇四 故ゆゑに天てんの物ものの像かたちは此これ等を以もつて潔きよめらるべかりき、然しかれども天てんの物ものは此これ等らよりも更さらに善よき祭まつりを以もつて潔きよめらるべし。二〇五 盜ぬすハリストスは手てにて違ちがはれたる聖せい所しよ眞まことの聖せい所しよを像かたちれる者ものに入いりしに非あらず、乃すなはち天てんに入いりたり、今いま我われ等らの爲ために神かみの顔かほの前まへに立たたん爲ためなり。二〇六 又また司し祭さい長ちやうが年とし毎ごとに、他たの物ものの血ちを以もつて、聖せい所しよに入いるが若ごとく、厥しかく己おのれを獻けんするが爲ために入いりし

に非ず、二六若し然らば、彼は創世より以來、いらい 歴苦を受くべかりしなり、然れども彼は今季の世に、一次己の祭を以て罪を滅さん爲に願たり。二七またひと 又人に、一次死して、後に審判あることの定められしが如く、二八 斯くハリストスも、多くの者の罪を任はんに爲に、一次己を祭に獻じて、復罪の爲に非ず、乃彼を待つ者の救の爲に、再願れん。
第二十章 律法は將來の福の影にして、本物の眞の形に非るに因りて、年毎に恒に獻ぜらるゝ所の同一の祭を以て、之に就く者を永く全うする能はず。二九 否らずば獻ずることば止まん、盜奉事する者は一たび潔められて復一も其良心に罪を覺ねざるならん。三〇 然れども此の祭に由りて、年毎に罪の事は記念せらるゝなり。三一 盜牡牛と牡山羊との血は罪を除く能はず。三二 故にハリストスは世に入る時曰く、祭祀と禮物とは爾之を欲せざりき、然れども肉體を我が爲に備へたり。三三 全燔と即祭とは爾之を悦ばざりき。三四 其時我言へり、願よ、我往く、雷の首に我の事を紀せるが如し、神よ、爾の旨を行はん。三五 前には祭祀と禮物と、全燔と即祭と、即律法に循ひて獻ぜらるゝ者は、爾之を欲せざりき、又悦ばざりきと誓ひて、三六 後には、願よ、我往く、神よ、爾の旨を行はんと誓へり。三七

一の者を除く、第二の者を立てん爲なり。一〇此の旨に由りて、我等はイイススハリ
 トスの肉體の一次獻せらるゝを以て聖にせられたり。二凡の司祭も日日に立ちて
 奉事し、庶同一の祭、永く罪を除く能はざる者を獻す。三然れども彼は罪の爲に一の
 祭を獻じて後、永遠に神の右に坐し。四彼の敵が其足の癩に置かるゝに至るを俟つ。
 一四彼は其の罪を以て聖にせらるゝ者を永遠に全き者と爲せり。一五聖神も亦
 之を我等に證す、蓋先に言へるが如し、一六主曰く、厥日の後に我が彼等に立てん
 る約は是なり、我は我が律法を彼等の心に置き、之を彼等の念に銘さん。一七次ぎて主
 曰く、且我彼等の罪と不法とを復記念せざらん。一八夫れ罪に赦さるれば復之が
 爲に獻祭するを庸ぬす。一九故に兄弟よ、我等イイススハリストスの血に由りて、二〇
 即彼が我等の爲に開きたる新なる活ける途を以て、唯なる其肉體に由りて、聖所に
 入る勇敢を得。二一且神の家を宰る大なる司祭を得て、二三誠の心と全き信とを以て、
 心を悪しき意念より濯がれ、身を清き水に洗はれて、近づくべし。二四我等の望の承認
 を聞く執りて移らざるべし、蓋許約せし者は倍なるなり。二五我等互に顧みて愛と善

き行さを勵ますべし。二五 會集を廢むること或人の習の如くするなく、乃相勸むべし、彼の日の愈近づくを見て、益是くの如くすべし。二六 若し我等眞實を識るを得たる後、縱に罪を犯さば復贖罪の祭あるなし。二七 乃惕れて審判を待つこと及び敵を食まんとする烈火あるのみ。二八 若しモイセイの律法に背きし者が、二三人の證者ありて、愼なく死に處せられれば。二九 況や神の子を踐み、自ら聖にせられし約の血を聖なりとせず、惡寵の神を侮る者は、其人の受くべき罰更に重きこと幾何なりと意ふか。三〇 蓋我等は首ひし者を懲る、主曰く、譬を復すは我に在り、我報いん。又曰く、主は其民を審判せん。三一 活ける神の手に陥るは畏るべき哉。三二 爾等の初の日、即爾等が光照せられて後、惡難の多くの戦を忍びし日を憶へ、三三 爾等或は自ら新許と迫害に由りて、人の觀玩させられ、或は斯る事に遇ふ者に與る者と爲れり。三四 蓋爾等は我の縲紲をも體恤し、爾等の所業の奪はるゝことなも忍びて受けたり、爾等には更に美にして愼に存する業の天に在るを知ればなり。三五 故に爾等の勇敢を失ふ勿れ、此れ大なる賞を得ん。三六 忍耐は爾等に要する所なり、爾等が神の旨を行ひて、許約せられ

しこきを受けん爲なり。三七一 盜尙片時ありて來る者臨まん、必選はらざらん。三八七 人は信に由りて生きん、人若し退かば、我が靈彼を悦ばず。三九一 然れども我等は退きて沈淪に屬する者に非ず、乃信に立ちて靈の救を得べき者なり。

一 夫れ信まは、認む所を確認し、見ざる所を確證する者なり。二 古の人は之に由りて證せられたり。三 信に由りて我等は世世が神の言に造られ、見ゆる者が願はざる者より成りたるを知る。四 信に由りてアツリはカインに較ぶれば更に善き祭を神に獻げたり、之に由りて彼は義なりと證せられたり、神が其獻物の事を證せしが、如し之に由りて彼は死して後にも亦甞ふ。五 信に由りてエノフは死を見ずして移されたり、人彼に遇はざりき、神彼を移し、之に由る、盜其未だ移されざる先に神の悦を獲し者、證せられたり。六 然れども信なければ、神に悦ばるゝ能はず、盜神に就く者は彼の有ること及び其彼を尋ねる者に報を爲す者なるを信すべし。七 信に由りてノイは未だ見ざる事に於て啓示を蒙りて、敬みて其家族を救はん爲に方舟を備へたり、之に由りて彼は世を罪し、及び信に由る義の嗣と爲れり。八 信に由りてアウラムは嗣業と

して受けんとする地に往くべき召に違ひ、自ら何に往くを知らずして往けり。一、信に由りて彼は許約の地に在りて、己に屬せざる地に於けるが如く、イサアク及びイアコフ、即ち同一の許約を同じく嗣ぐ者、俗に審に居りたり。一、二、信に由りて、胎荒れたれども、懐妊の力を得己に生育の期を逾てて生みたり。蓋彼は許約せし者の信なるを知れり。一、三、故に一人猶己に死せし如き者より、天の星の多きが如く、海邊の沙の數へ難きが如く、多く生れたり。一、四、此等皆信を抱きて死せり。許約せられし所を受けずして、惰途に之を忽みて欣び、且自ら地に在りて、旅人なり、寄寓者なりと誓へり。一、五、盜斯く言ふ者は、自ら其家國を求むるを喪すなり。一、六、彼等若し其出でし國を念はば、歸るべき時ありしならん。一、七、然れども、彼等は更に善き國、即ち天に在る者を慕へり。故に神は、彼等を耻させずして、己を彼等の神と稱ふ。蓋彼等の爲に城を備へたり。一、八、信に由りて、アツラアムは試みられて、イサアクを獻げたり。許約を受けし者にして、其獨生子を獻げたり。一、九、即ち爾の裔はイサアクに由りて稱へられん。蓋はれし所の者なり。一、十、盜彼意へり、神は亦死より

たり。三十一 倍に由りて姦婦ラアブは平和を以て偵使を納れ、他の路より彼等を送りて、不信の者さ倍に亡びざりき。三十二 我復何をか言はん若しゲテラン、ワラク、サムブリン、イチ、ライ、ダワド、サムイル及び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。三十三 彼等は倍に由りて諸國を従へ、戦を行ひ、許約を受け、獅の口を拵ぎ、三十四 火の勢を滅し、銀の刃を避け、弱きよりして強くせられ、戦に勇み、異邦の軍を潰せり。三十五 婦は其死者を復活せし者として受けたり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るゝを欲せずして、酷く戮されたり。三十六 他の者は嘲弄と鞭打と、又縛縛と囹圄との試を受け、三十七 石にて撃たれ、籠にて解かれ、榜間に懸はせられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て渡離し、窮乏、患難、辛苦を忍び、三十八 世界の置くに堪へざる者は、曠野、山嶺、隙穴、地窟に徳へり、三十九 此等皆倍に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき。四十 盜賊は我等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と倍にせずしては、全きを得ざらん爲なり。

第四章

一ゆゑに我等も證者の斯く、靈の如く、衆きに圍まれて、凡の重負と我等を阻

む罪つみを去さり、忍にん耐たいを以もつて、我われ等らの前まへに在ある曉は境まを越こりて、二我われ等らの信しんの首かしら及びよ成せい全ぜん者しゃ
 なるイイススを仰あやぎ忍にんむべし、彼かれは其その前まへに在ありし忍にんに易やすかへて、辱はかしめられしを意いせす、十じ字じ架かを
 忍しのびて、所かみの寶ほう座ざの右みぎに坐ませり。三ゆ故ゆに爾なんぢ等らは即さい人にん等らの斯かく己おのれに逆さかひしを忍しのびたる者もの
 を思おもへ、爾なんぢ等らが倦うみて、靈たまの弱よわらざらん爲ためなり。四なんぢ等らは即つに敵てきし之これを聞きひて、未いまだ血ちを
 流ながすに至いたらざりき。又また子こに於おけるが如ごとく爾なんぢ等らに告つぐる所ところの勅すゝめを忘わすれたり、曰いく、吾わが
 子こよ、主しゆの懲ちやう戒かいを輕かろんずる勿なか、又また彼かれに責せめらるゝ時とき心こころを喪なふ勿なか。蓋け主しゆは其その愛あいする
 者ものを懲ちやうし、凡およそ網いるゝ所ところの子こを鞭むちつと。七なんぢ等ら若もし懲ちやう戒かいを忍しのばし、神かみは子この如ごとく爾なんぢ等らを
 待まちつなり。蓋け子こにして父ちちの懲ちやうさざる者ものあらんや。八なんぢ等ら若もし衆しゆの與あづかる所ところの懲ちやう戒かいに違あは
 ずば、乃すなはち私し生せいの子こにして、嫡てき子しに非あらず。九また我われ等らは肉にく體たいの父ちちより懲ちやうされて、彼かれ等らを敬うやへり、
 況いはんや我われ等ら益えき師しの父ちちに従したがひて、生うを得うべからざらんや。一か彼かれ等らは己おのれの意いに任まかせて、暫せん
 時ときの爲ために我われ等らを懲ちやうせり、然しかれども彼かれは我われ等らを益えきして、我われ等らが彼かれの聖せいに與あづからん爲ためにする
 なり。二お凡およの懲ちやう戒かいは、今いまは豈やに非あらずして、悲かななりと意おもはる、然しかれども後のちには、之これに由よりて
 練れん達たつせし者ものに、後のちの平へい安あんなる果みを結むすばしむるなり。三ゆ故ゆに爾なんぢ等ら衰おこへたる手て別わかりたる

隙を縫にし、一三爾等の足を以て直き徑を行け、跛者の迷ふなくして、糞塗されん爲なり。
 一四務めて衆人と和睦し、亦聖潔を守れ、豈聖潔に非ざれば、人主を見るを得ず。一五
 爾等、慎め、恐らくは神の恩寵を失ふ者あらん、恐らくは苦き根は萌ひ出で、害を爲し、
 多くの者之に由りて汚されん、一六恐らくは淫行の者、或は不敬虔なることイサフ
 の如き者あらん、即一食の爲に其長子の業を覆ぎたる者なり。一七爾等、爾等知る、其後
 彼は祝福を嗣がんと欲したれども棄てられたり、涕を流して求めたれども、父の志を
 同す能はざりき。一八爾等の就きし所は、擗るべき山に非ず、又燃ゆる火と、密雲と、黒
 暗と、暴風と、一九彼の音と、言語の聲とに非ず。此の聲を聞きし者は、復彼等に語を續が
 ざらん、こゝを求めたり、二〇彼等は命とらるゝこゝを忍ぶ能はざりき、云く、或も若し
 山に觸れば、石を以て撃ち、或は矢を以て射るべしき。二一且其見る所の畏るべきは、
 イセイも我、恐れ慄くと言ふに至れり。二三然れども、爾等の就きし所は、乃シオン
 山及び活ける神の城、天のイエエルサリム及び萬萬の天使、二四慶賀の會及び天に
 踏されたる、衆子の教會及び衆の審判者なる神及び成全せられし衆人等の神、二五及び新

約の中保者たるイスラエル及び瀧ぐ所の血、即ちアラムの血に較ぶれば更に善く善ふ者なり。二五〇 慎みて皆ぐる者を拒む勿れ。彼若し彼等地に在りて命を傳ふる者を拒みて免れざりしならば況や我等天より命を傳ふる者に背かば更に免れざらん。二六一 彼の聲は其時地を震はせたり然れども今彼は約して曰へり我又一次地のみならず天をも震はせん。二七 又一次さ雷へるは震ふべき者の其遣られしを以て移さるゝを示す震ふべからざる者の留らん爲なり。二八 故に我等は震ふべからざる國を受けて、恩寵を保ち之に由りて敬虔と實畏とを傾きて神の悦ぶ所の如く奉事すべし。二九 蓋し我等の神は燬き盡す火なり。

一〇 兄弟の愛附等の中に存すべし。道人を善く待ふことを忘るゝ勿れ蓋し或者は之に由りて知らずして天使等を待へり。四 囚者を念ふこと附等も彼等と偕に囚はれしが如くせよ苦しむ者を念へ附等も亦身に居るが故なり。婚姻は衆の中に貴くして脉は玷なかるべし邪淫の者姦淫の者は解之を審判す。貪婪に習ふ勿れ有つ所を以て足れりさせよ蓋し彼自ら云へり我附を棄てず附を遺さざらん。故に

我等毅然として曰ふ、主は我を助くる者なり、我懼れざらん、人何をか我に爲さんぞ。七
 爾等の教導師、神の言を爾等に傳へし者を記念せよ、彼等の生命の終を望みて、彼等の
 信に倣へ。八
 イイススハリストスは昨日、今日及び世々に變らざる者なり。稲穂の異
 なる教に播かざる、勿れ蓋恩寵を以て心を堅むるは善し、食物を以てするに非ず、
 之に遊ひし者は、是に依りて益を得ざりき。一〇
 我等には祭壇あり、祭に準ふる人は、此
 の上の物を食ふ權なし。一一
 司祭長が罪を潔むる爲に、血を聖所に搦ふる所の牲の體
 は、祭の外に焚かる、一二
 故にイイススも己の血を以て、人人を聖にせん爲に門の外に
 於て苦を受けたり。一三
 是を以て我等は彼の辱を任ひて、祭の外に出で、彼に就く
 べし。一四
 蓋我等には此に恒に存する邑なし、即將來の者を求む。一五
 故に我等は彼
 に由りて、恒に讚美の祭を神に獻ぐべし、即彼の名を讚美する口の果なり。一六
 基督を
 爲し共愛を行ふを忘る、勿れ蓋此くの如き祭は神の悦ぶ所なり。一七
 爾等の教導師
 に順ひて、之に服せよ、蓋彼等は神の前に答を爲すべき者として、爾等の望の爲に敵
 す、彼等をして悦びて、之を行はしめよ、歎息して行はしむる、勿れ此れ爾等に益なきが

故なり。一八我等の爲に祈禱せよ。蓋我等は善き良心を有てるを備す。一切の事に於て善きを行はんことを望めばなり。一九我が殊に祈禱を爲すを求むるは速に爾等に還されん爲なり。二〇願はくは平安の神、永遠の約の血に由りて羊の大なる牧者たる我等の主イエススハリストスを死より起し、者は、三其悦ぶ所を爾等の中に爲して、其旨を行はん爲に、爾等を凡の善事に全うせんことを、イエススハリストスに由りてなり。願はくは光榮は彼に無窮の世に歸せん「アミン」。二三兄弟よ、我略書して爾等に達せり。爾等我が勸の言を容れよ。二四知るべし、我等の兄弟ラモス、イ巳に釋されたり。若し彼速に來らば、我彼と偕に爾等を見ん。二五悉くの爾等の教導師及び衆聖徒に安を問へ。イタリヤの者は爾等の安を問ふ。二六願はくは恩寵は爾等衆と偕に在らんことを「アミン」。

神學者聖イオアンの黙示録

【一】 イイススハリストスの黙示、即神が速に成る可き事を其諸僕に示さん
爲に、彼に與へし者なり、彼は其天使を以て之を遣して、其僕イオアンに示せり。二 イオ
アンは神の言を、イイススハリストスの隠さ其凡そ見し所の事を以て、隠を作せり。
此の預言の言を讀み又之を聞き、此の中に録されし事を守る者は福なり、豈時ば
近し。三 イオアン書してアシヤに在る七教會に達す、願はくは恩寵と平安とは、今在り、
先に在りし後に在らんとする者及び彼の寶座の前に在る七神、及び忠信なる證者、
死の中より首生せし者、地上の諸王の君たるイイススハリストスより爾等に賜らん
ことを。願はくは彼、即我等を愛し、其血を以て我等を我が諸罪より洗ひ、我等を王と
爲し、神其父の前に同祭と爲し、者に光榮と權能とは無窮の世に歸せん、アミン。七
視よ、彼は雲に乗りて來る、悉くの目は彼を見ん、彼を刺し、者も亦然り、且地の萬族は、
彼の前に哭かん、誠なる哉、「アミン」。八 主曰く、我は「アリ、ス」及び「シメガ」始及び終なり、

今在り、先に在りし後に在らんとする者なり、全能者なり。我イオアン、爾等の兄弟及
 びイイススハリストスに於ける患難と困と忍耐とに共に與る者は、神の首及びイイ
 ススハリストスの盟の爲に、パトモスと名づくる嶋に居りたり。一〇主の日に、我神に
 在りて、我が後に鑑の如き大なる聲を聞けり、云く、我は「アッス」及び「チメサ」第一の者
 及び末の者なり、一二人の見る所を帯に解して、アシヤに在る諸教會、即エスス、ス
 ミルナ、ベルガム、ヌアタラ、サルテス、フラテルヌヤ及びラチヤキヤに送れ。一二我身を
 轉じて、我に距りし聲を觀ん、欲せり、既に轉すれば、七の金の燈臺、及び七の燈臺
 の間に、人の子に似たる者あるを見たり。其身には、異衣を衣、胸に金の帯を束れ、一四其
 首と髪とは白きこと、縮き羊の毛の如く、鬚の如く、其目は、火珠の如く、一五其足は、綉銅
 に似、爐に燒かるゝが如く、其聲は多くの水の聲の如し。一六其右の手に、七の星を執り、
 其口より、兩刃の利き劍出でたり、其面は、盛に輝く日の如し。一七我彼を見し時、其足下
 に俯伏せしこと、死せる者の如し、彼は其右の手を我に按せて曰へり、懼るゝ勿れ、我は
 第一の者及び末の者なり、一八我は生ける者なり、先に死せしことあり、觀よ、我生きて

九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

無窮の世に在り「アミン」。我は地獄と死との輪を持てり。一九九。故に爾が見し所の事及び今有る事、此の後に有らんとする事を書せ。二〇。爾が我が右の手に見し所の七の星の奥後及び七の金の燈臺は、左の如し、七の星は七の教會の天使なり、爾が見し所の七の燈臺は七の教會なり。

一 エズズの教會の天使に書して曰へ、其右の手に七の星を執りて七の金の燈臺の間を歩む者は是くの如く云ふ、二。我は爾の所爲、爾の勞、爾の忍耐、爾が惡人を勝ふる能はざる事、自ら使徒と言ひて實は否らざる者を試みて、其虚偽を露し、事を知らる。三。爾は多く勝へたり、忍耐は爾に在り、我が名の爲に勞して倦まざりき。四。然れども我爾に責むべきことあり、是れ爾が初の愛を離れしことなり。五。故に爾何より限ちしかを憶ひ、悔改して初の所爲を行へ、然らすして、若し爾悔改せずば、我速に爾に來りて、爾の燈臺を其處より移さん。六。然れども爾に取るべきことあり、爾がニコライ黨の所爲を惡むこと是なり、我も亦之を惡む。七。耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし、勝つ者には我神の樂園の中に在る生命の樹に由りて食ふを賜はん。八。又スミルナ

の教會の天使に書して曰へ第一の者及び末の者曾て死し今生ける者は是くの如く
 曰ふ、我爾の所爲と忠難と窮乏とを知る、然れども爾は富める者なり又彼の自らイ
 ヲテヤ人なりと言ひて、實は然らず、乃サタナの會を成す者の防衛を知る。一〇爾受
 けんとする苦を懼る、勿れ、親よ、恐覺は爾等の中の者を獄に下さん、爾等の試みられ
 ん爲なり、爾等は忠難を受けんこと十日間ならん、死に至るまで忠信なれ、然らば我爾
 に生命の冕を與へん。二耳ある者は神の路教會に言ふ所を聞くべし、隣つ者は第二
 の死より害を受けざらん。二三又ベルガムの教會の天使に書して曰へ、爾刃の利き劍
 を有てる者は是くの如く云ふ、一我爾の所爲及び爾がサタナの座の在る處に居る
 を知り、又爾が我の名を執り、我の忠信なる證者アンテパが爾等の中に、サタナの居る
 處に殺されたる日に於ても、我の信を棄てざりしを知る。一四然れども我、爾に責
 むべきことあり、蓋爾には彼處にブラアムの教を執る者あり、彼はブラクに、イスライ
 ルの諸子を誘惑に引きて、偶像に獻げし物を食ひ、又淫を行はしむるを教へたり。一五
 是くの如く爾にもニコライ黨の教、我が惡む所の者を執る者あり。一六悔改せよ、然らず

ば、我速に爾に至りて、我が口の劍を以て彼等と戦はん。一七、耳ある者は神の諸教會に
言ふ所を聞くべし、勝つ者には我秘蔵の「マシナ」を與へて食はしめ、又白き石及び石の
上に書かれたる新なる名を與へん、之を受くる者の外に其名を知る者なし。一八、又列
アネラの教會の天使に對して曰へ、勝つ子其目は火燭の如く、其足は綿綱に似たる者
は、是くの如く言ふ、一、我爾の所爲と愛と服役と、信と爾の忍耐と、且爾が後の所爲の
前の所爲よりも多きを知る。二、然れども我聊爾に責むべきことあり、蓋爾は婦
イエザズリ自ら預言女と言ふ者に、我が諸僕を教へ惑はして淫を行ひ、偶像に獻けし
物を食はしむるを容す。三、我彼に其淫行を悔改する時を與へたれども、彼は悔改せ
ざりき。四、視よ、我彼を牀に投げん、又彼と與に姦淫する者も、若し其所爲を悔改せず
ば、之を大なる患難に投げん。五、彼の諸子に我死を以て之を滅さん、而して諸教會は、
我が人の心腸を監察する者なるを知らん、我爾等各人に其行に備ひて報いん。六、然
れども我爾等及び其他スアネラに在りて、此の教を受けず、所聞サタナの奥祕を知ら
ざる者に言ふ、我爾等に他の任を負はせざらん。七、惟有つ所の者を固く執りて、我が

來るに及べ。二六 勝を得て終に至るまで我が所爲を守る者は我彼に異邦民の上に權を與へん。二七 彼は鐵の杖を以て彼等を牧せん彼等は陶器の如く碎かれん我も我が父より受けし權の如し。二八 且我彼に晨の星を與へん。二九 耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし。

三〇 又サルラスの教會の天使に對して曰へ神の七の神及び七の星を有つ者は是くの如く言ふ我爾の所爲を知る爾は生ける名ありと雖死せるなり。三二 爾醒して死に煖き餘情を堅めよ蓋我爾が所爲の我が神の前に全備なるを見ず。故に爾は受けし所聞きし所を憶ひ之を守りて悔改せよ。若し爾醒せずば我盜の如く爾に至らん爾は我が何の時に爾に至るを知らざらん。然れども爾にはサルラスに猶數名其衣を汚さざりし者あり彼等は白衣にして我と與に歩まん蓋之に當る者なり。三三 勝つ者は白衣を衣ん我其名を生命の書より抹さざらん又其名を我が父及び彼の天使等の前に承け認めん。耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし。三六 又サラテルスヤの教會の天使に對して曰へ聖なる者眞實なる者ダワドの鎧を持つ者附けば聞す

者なく、聞せば、聞く者なき者は、是くの如く言ふ、我爾の所爲を知る、親よ、我爾の前に
門を闢けり、能く之を闢す者なし、蓋爾は箇に力ありて、我が言を守り、我が名を棄てざ
りき。親よ、サタナの會たる彼の自らイサテヤ人なりと言ひて、實は然らず、乃、蹠る
者視よ、我彼等をして、來りて爾の足の前に伏拜せしめ、我が爾を受するを知らしめん。
一、爾我が忍耐の言を守りしが、故に我も爾を守りて、地に居る者を試みん爲に、全世
界に臨まんとする試練の時より免れしめん。二、親よ、我速に來る爾が有つ所の者
を固く執れ、人爾の冕を奪はざらん爲なり。三、勝つ者は、我彼を我が神の殿に柱たらし
めて、彼は復外に出でざらん、我は又我が神の名及び我が神の城、即天より我が神
より降る新なるイエルサリムの名及び我が新なる名を其上に書さん。一、耳ある者
は神の踏敷會に言ふ所を聞くべし。二、又ラチテキヤの教會の天使に書して曰へ、ア
ミン、たる者、忠信にして眞實なる證者、神の造化の元始なる者は、是くの如く言ふ、一、
我爾の所爲を知る、爾は冷やかなるにも非ず、熱きにも非ず、怒むらくは、爾或は冷やか
に、或は熱からんことを。然れども、爾は温くして、熱きにも非ず、冷やかなるにも非

ざるに由りて、我爾を我が口より吐き出さん。一七 豈爾は、我富み財を積み置しき所
 なしと、言ひて自ら不幸なる憤むべく貧しく、昏にして寐なるを知らず。一八 我爾に勸
 む爾富を得ん爲に、火に煉りたる金を我より買へ、衣て爾が袂の蓋の露れざらん爲
 に、白き衣を買へ、見るを得ん爲に、目の薬を爾の目に抹れ。一九 我が愛する者は、我之を
 買め、之を懲す故に、爾熱申し且悔改せよ。二〇 視よ、我門の外に立ちて叩く者し、人我の
 聲を聞きて、門を開かば、我彼の處に入りて、彼と偕に、彼も我と偕に飲食せん。二一 勝つ
 者は、我彼をして、我と偕に我が資産に坐せしめん、我も勝ちて、我が父と偕に其資産に
 坐せしが如し。二二 耳ある者は、神の辭教會に言ふ所を聞くべし。

第四章 一 此の後我仰ぎ觀しに、爰に天に門開けて先に開きし所の籤の如く我に語
 れる聲は曰へり、此の上れ我此より後に成るべき事を爾に示さん。二 我忽、神に在り
 き視よ、天に資産は設けられ、資産の上に坐する者あり。三 此の坐する者は、琥珀、玉、瑪
 瑙に似たり、虹は資産を繞りて、其色、葱、硝の如し。四 資産を繞りて、又二十四の資産あ
 り、此の資産には、我二十四の長老の坐するを見たり、白き衣を衣、其首に金の冕を戴け

二七三 二八四 二九五 三〇六 三一七 三二八 三三九 三四〇 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

り。資座より閃電と迅雷と聲と出でたり。資座の前に七の燈の燃ゆるあり。即神の七の神なり。資座の前に玻璃の海の水晶に似たるあり。資座の中及び資座の周圍に四の生物あり。前にも後にも目滿ちたり。第一の生物は獅に似たり。第二の生物は牛に似たり。第三の生物は人の如き面あり。第四の生物は飛ぶ鷲に似たり。四の生物は各周圍に六の翼あり。内には目滿ちたり。日夜息めずして曰ふ。聖なる後聖なる後聖なる後。主神全能者先に在りし。今在り。後に在らんとする者よ。生物が資座に坐する所の無窮の世に生くる者に。光榮と尊貴と感謝とを歸する時。二十四の長老は資座に坐する者の前に俯伏し。無窮の世に生くる者を拜し。其冕を資座の前に置き。曰ふ。一。主よ。爾は光榮と尊貴と權力とを受くるに當れり。盜爾は萬物を遣れり。爾の旨に由りて萬物は存し。且遣られたり。

第五 我又資座に坐する者の右の手に書を執れるを見たり。其内外に書せるあり。七の印を以て封ぜられたり。我又有能の天使が大なる聲を以て宣ぶるを見たり。曰く。誰か此の書を開き。其印を解くに堪ふる。天にも地にも。地の下にも。誰も此の書

を開き或は之を觀ることを得る者なかりき。一も此の書を開きて之を讀み或は之を觀るに堪ふる者を得ざりしに因りて我多く哭けり。長老の一人我に言ふ哭く勿れ觀よ、イウタの支派より出でたる御ダワドの根は、跡を得たり彼は此の書を開き其七の印を解くを得るなり。我又觀しに、後には寶座及び四の生物の中及び長老等の中に居られしが如き羔の立てるあり七の角及び七の目節全地に遺されたる神の七の神を有てる者なり。彼來りて寶座に坐する者の右の手より書を取れり。其書を取りし時、四の生物及び二十四の老長は羔の前に俯伏せり、各馨香を滿つる金の鼎を執れり、是諸聖人の祈禱なり、乃新なる歌を歌ひて曰ふ爾は書を取りて、其印を開くに堪へたり、蓋爾は居られて己の血を以て、諸族諸音諸民諸國の中より我等を贈ひて、神に歸せしめ、一〇我等の神の前に、我等を王及び用祭と爲せり、我等地に王たらん。一、二我又見且聞きしに寶座と生物と長老等との周圍に多くの天使の聲あり、其數は萬萬千千なり、一、二彼等大なる聲を以て言へり居られたる羔は權威と富有と、睿智と能力と、塚貴と光榮と、親眼とを受くるに當れり。一、二我又凡の受造物天に在り、

地に在り、地の下に在り、海に在り、及び凡て其中に在る者の言ふを聞けり、曰く、寶座に坐する者及び羔に親讀と聲發と、光榮と、權能とは無窮の世に歸す。一四の生物は曰へり、「アミン」。二十四の長老は俯伏して、無窮の世に生くる者を拜せり。

第四章

我羔が七の印の第一を開けるを見たり、時に我四の生物の二が雷の如き聲を以て言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。我觀しに、爰に白き馬あり、之に乗れる者弓を執れり、且、忽は彼に與へられたり、彼は勝を得たる者として出で、又勝たん爲に出でたり。第二の印を開きし時、我第二の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。乃他の馬色の赤き名出でたり、之に乗れる者には、地より和平を奪ひ、互に相殺さしむる權は與へられ、又彼に大なる刃は與へられたり。第三の印を開きし時、我第三の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。我觀しに、爰に支き馬あり、之に乗れる者は其手に楯を執れり。我四の生物の中に聲あるを聞けり、曰く、銀一枚に、銀一枚に、銀三枚なり、油と酒とを傷ふ勿れ。第四の印を開きし時、我第四の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。我觀しに、爰に灰色の馬あり、之に乗れる者は其名を死と曰ふ、地獄は其

後に隨へり、彼に地の四分の一に權は與へられたり、刀劍と、饑饉と、疫病と、地の獸を以て殺さん爲なり。第五の印を開きし時、我祭壇の下に於て、神の言の爲及び立てし所の證の爲に殺されたる者の靈を見たり。一〇 彼等は、大なる聲を以て呼びて曰へり、聖にして眞實なる主宰よ、爾は何の時に至るまで審判せず、地に居る者に、我等の血の爲に報を爲さざるか。一一 卽、彼等各人に白き衣は與へられ、且、彼等に言はれたり、尙少時安んじて、其同勞者及び兄弟が、彼等の如くに殺されて、其數を盈たすに至るべし。

一二 第六の印を開きし時、我親しに、爰に大なる地震あり、日は毛衣の如く黒くなり、月は血の如くなれり。一三 天の星は地に墮ちしこと、無花果樹の大なる風に搖られて、其未だ熟せざる果を落すが如し。一四 天は逝きしこと、世を捲くが如く、山と嶋と皆移りて、其處を離れたり。一五 地の帝王と、侯伯と、富める人、と、千夫長と、勇士と、凡の奴僕と、凡の自主の者とは、潮及び山の巖に墮れ、一六 山と巖とに音ふ、我等の上に墮ちて、我等を資座に坐する者の面及び、蒸の怒より匿せよ、一七 蓋其怒の大なる日至れり、孰か能く立たん。

四圍

此の後、我四の天使が地の四隅に立ち、地の四の風を執りて、地にも、海にも、凡の樹にも、風を吹かしめざるを見たり。又他の天使が日の出づる方より上りて、活ける神の印を有てるを見たり。彼は大きな聲を以て、地と海とを傷ふ權の與へられたる四の天使に呼びて曰へり、我等が我が神の諸侯の額に印するに至るまで、地をも、海をも、樹をも傷ふ勿れ。且我印せられし者の數を聞きしに、イスライリの諸子の踏支派の中より印せられし者一百四十四千ありき。イウダの支派より十二千印せられ、ルカムの支派より十二千印せられ、ガドの支派より十二千印せられ、マナシヤの支派より十二千印せられ、シメタンの支派より十二千印せられ、レウイの支派より十二千印せられ、ユサハルの支派より十二千印せられ、ザラロンの支派より十二千印せられ、イカシフの支派より十二千印せられ、ニアミンの支派より十二千印せられたり。此の後我觀しに、爰に誰も數ふる能はざりし大衆、諸國、諸族、諸民、諸音よりする者は、資座及び糸の前に立ち、白き衣を衣、其手に椶櫚の枝を執り、一〇大なる聲を以て呼びて曰

默示錄

第七章 自一五二〇

へり、救は資座に坐する我等の神及び羔に在り。二二 悉くの天使は資座と長老等と、
 四の生物との周圍に立ち、資座の前に俯伏し、神を拜して。二三 曰へり、「アミン」願はくは
 祝讃さ、光榮と睿智と、感謝と尊貴と權威と、能力とは、我等の神に無窮の世に歸せん「ア
 ミン」。二四 時に長老の一人我に問ひて曰へり、此の白き衣を衣たる者は誰ぞ、且何より
 來りし乎。二五 我對へて曰へり、主よ、爾之を知る。彼我に言へり、此れ大なる患難より來
 りし者なり、彼等は羔の血を以て己の衣を滌ひて、之を白くせり。二六 故に彼等は神の
 資座の前に在り、其殿に於て日夜彼に奉事す、資座に坐する者は彼等の中に居らん。
 二七 彼等は復仇せず、復讐せず、日さ凡の熱さは彼等を侵さざらん。二八 資座の中に
 在る羔は、彼等を牧し、彼等を活ける水の泉に導かん、且神は盡く其涙を、其目より拭は
 ん。

第八章

一 第七の印を開きし時、天靜なりしこと約半時。二 我七の天使が神の前に立
 てるを見たり、七の筵は彼等に與へられたり。三 又他の天使來りて、祭壇の前に立ち、金
 の香爐を持って、多くの香は彼に與へられたり、彼が之を悉くの聖人の新婦と、備に資

座の前まへに在ある金きんの祭壇さいだんの上うへに獻さげん爲ためなり。香かうの烟けむりは諸聖人しよせいじんの祈禱きたうと偕ともに、天使てんしの手てより脚かみの前まへに升のぼれり。天使てんしは香爐かうろを執とり之これに祭壇さいだんの火ひを盛もりて、地に投なげたるに、衆あまくの聲こゑと、迅雷いかづちと、閃電ひんづまと、地震ちしんとは起おこれり。七ななの氣つらを持もてる七ななの天使てんしは之これを吹ふく備そなへを爲なせり。第一だいいちの天使てんしは氣つらを吹ふきたるに、益ひようと火ひは血ちに鍾まりて、雨ふりて地に墮おちたり、樹きの三分さんぶんの一いっは焚やけ、背かをき草くさも悉こぞく焚やけたり。第二だいにの天使てんしは氣つらを吹ふきたるに、大おほなる山やまの如ごとき若も火ひに燃もれて、海うみに投なげられたり、海うみの三分さんぶんの一いっは血ちと爲なり、海うみに在ある生いける物ものの三分さんぶんの一いっは死しし、舟ふねの三分さんぶんの一いっは滅ほろびたり。第三だيسانの天使てんしは氣つらを吹ふきたるに、大おほなる星ほしは燈あかりの如ごとくに燃もれて、天てんより墮おち、河かはの三分さんぶんの一いっ及び水みづの泉いづみに墮おちたり。二ふた星ほしの名なを齒隙いんらんと曰いふ、水みづの三分さんぶんの一いっは齒隙いんらんの如ごとく爲なれり、多おほくの人は水みづに墮おちりて死しせり、其その苦くるくなりたる故ゆゑなり。第四だいしの天使てんしは氣つらを吹ふきたるに、日ひの三分さんぶんの一いっ、月つきの三分さんぶんの一いっ、星ほしの三分さんぶんの一いっは墮おちたれて、其その三分さんぶんの一いっは暗くらくなりたり、晝ひるの三分さんぶんの一いっは光ひかりなし、夜よるも亦然またかり。一いち又また一の天使てんしが中ちゆう天てんを飛とびて、大おほなる聲こゑを以もつて音いふを見み且かつ聞きけり、曰いは、餘あまの三みつの天使てんしが吹ふかんとする氣きの聲こゑに因よりて、地ちに居ゐる者は竊おぼなる哉かな、竊おぼなる哉かな、竊おぼなる哉かな。

第四節

第五の天使を吹きたるに、我星の天より、地に墮ちたるを見たり。淵の坑の輪は彼に興へられたり。彼淵の坑を啓きしに、坑より烟上れり。洪なる爐の烟の如し。日と空氣とは坑の烟に因りて暗くなれり。烟より蝗は地に出でたり。之に橋の興へられしこと、地の嶽にある樅の如し。又之に地の草と凡の緑と凡の樹とを傷ふ勿く、第其額に神の印なき人のみを傷ふべきを命ぜられたり。且之に彼等を殺すこと勿く、第五月間苦しむるを許されたり。其苦は蟻が人を齧す時の苦の如し。其日人人死を求むとも、之を得ざらん死せんと望むとも、死は彼等より逃れん。蝗の状は眼に備へられたる馬の如し。其首に金に似たる冕の如き者あり。其血は人の面の如し。其髪は女の髪に如く、其齒は獅の如し。其甲は鐵の甲の如く、其翼の聲は多くの馬が戦に馳せて、引く所の車の聲の如し。一〇其尾は蟻の如し、尾に毒あり、其橋は五月間人人を傷ふなり。二其王は淵の使者なり、彼の名は、エウレイの首にてはアワドンと曰ひ、モリンの首にてはアボリタンと曰ふ。三其の橋は去りて、視よ、其後尙二の禍は來る。一三第六の天使を吹きたるに、我は神の前に在る金の祭壇の四の角より出づる一

の聲が、一、氣を持てる第六の天使に言ひしを聞けり曰く、大なる河エフラトの邊に
繋かれたる四の天使を釋け。一、乃四の天使は釋かれたり是れ一時一日一月一年
間に、人人の三分の一を殺さん爲に備へられたる者なり。一、騎軍の數は二萬萬あり、
我其數を聞けり。一、是くの如く我異象に於て馬之に乗れる者を見たり、彼等の
甲は火と、紫石と、硫磺との如し、馬の首は獅の首の如く、其口より火と、煙と、硫磺と出でた
り。一、斯の三の者、即其口より出づる火と、煙と、硫磺とに由りて、人人の三分の一は殺さ
れたり。一、蓋馬の勢は其口及び其尾に在りき、其尾は蛇に似て首あり、之を以て傷
を爲せり。二、其餘の人、此の災に殺されざりし者は、猶其手の所爲を悔改せずして、
鬼及び金銀銅石木の偶像見ること、聞くこと、行くこと、能はざる者を拜するを止めざ
りき。三、又其兇殺、其魔術、其淫行、其盜竊を悔改せざりき。

第四章 一、我又有能なる他の天使の雲を衣て天より降るを見たり、其首の上に虹あり、
其面は日の如く、其足は火の柱の如し。二、其手には披きたる小巻を持って、其右の足を
海に、左の足を地に立てたり。三、彼大なる聲を以て獅の吼ゆるが如く呼べり、彼が呼

びし時七の雷は其聲を以て語れり。七の雷が其聲を以て語りし時、我之を番さん
 欲せり然れども天より我に言ふ聲を聞けり曰く七の雷の語りしことは之を封じて
 番す勿れ。我が見し所の海及び地に立てる天使は、其手を擧げて天に向ひ、無窮の
 世に生くる者、即天及び其中の物地及び其中の物海及び其中の物を造りし者を指
 して、密ひて曰へり、此より復時無からん、即第七の天使が篋を吹きて聲を出さん
 日に、神の奥義は成就せられん、彼が其踏履預言者に福音せしが如し。我が天より聞
 きし聲、又我に語りて曰へり、往きて海及び地に立てる天使の手に披きたる小巻を取
 れ。我天使に往きて、彼に謂へり、小巻を我に與へよ。彼我に謂ふ取て之を食へ、此れ
 爾の腹を苦からしめん、然れども爾の口には甜きこと、蜜の如くならん。一〇我天使の
 手より小巻を取りて之を食へり、此れ我が口に甜きこと、蜜の如くなりしが、之を食ひ
 し後、我が腹苦くなれり。一、彼我に謂ふ、爾復多くの民と族と音と王との事を預言す
 べし。

一杖に似たる荏荏を我に與へし者あり、曰く起ちて神の殿と祭壇と其中

に拜する者とな度れ、然れども殿の外は之を除きて度る勿れ、蓋此れ異邦人等
 に與へられたり、彼等は聖なる城を圍すこと四十二月ならん。我は我が二の敵者に
 與へん、彼等は麻の衣を衣て、預言すること二千二百六十日ならん。此れ乃二の橄
 欖樹及び二の燈臺にして、地の神の前に立つ所の者なり。若し人彼等を害せん、欲
 せば、火は彼等の口より出で、彼等の敵を噛まん、若し人彼等を害せん、欲せば、其人是
 くの如く殺さるべし。彼等には天を閉ぢて、其預言する日に雨を地に降らせざる概
 あり、又水の上に權ありて、之を血に變ずるを得、且何の時に於ても、之を欲せば、凡の災
 を以て地を撃つを得るなり。彼等が其證を舉へん時、淵より出づる獸は、彼等と服を爲
 し、彼等に勝ちて、彼等を殺さん。其屍を大なる邑の衢に遺さん、此の邑は譬へてリ
 ドム及びエギバトと名づく、我等の主の十字架に釘せられし處なり。諸民、諸族、諸
 音節國に屬する者は、三日半の間、彼等の屍を見ん、且其屍を盛に糺むるを許さざらん。
 一、地に居る者は、之が爲に喜び、樂み互に禮物を贈らん、蓋此の二の預言者は地に居
 る者を苦しめたり。二、然れども三日半の後、生命の神は、神より彼等の中に入り、彼

等は其足を以て立てり而して大なる懼は彼等を見る者に及べり。一三 彼等は天より
 彼等に言ふ大なる聲を聞けり曰く此に升れ乃雲に乗りて天に升れり彼等の敵も之
 を見たり。一四 是の時大なる地震ありて邑の十分の一は倒れ地震に由りて殺されし
 者七千名あり餘の者は懼を懐きて光榮を天の神に歸せり。一五 第二の禍は去りて視
 る第三の禍は速に來る。一六 第七の天使筈を吹きたるに天に大なる聲ありて曰へり
 世の國は我等の主及び其ハリストスの國を爲れり彼は王と爲りて無窮の世に至ら
 ん。一七 神の前に己の寶座に坐する二十四の長老は俯伏して神を拜して一七 曰へり
 主神全能者今在り先に在りし後に在らんとする者よ我等爾に感謝す爾の大なる權
 能を執りて王と爲りしに因る。一八 諸民は怒り爾の怒も至り又死者を審判して爾の
 諸僕即預言者聖人及び小大を論ぜす爾の名を畏る者に賞を與へ且地を壊る者
 を壊る時至れり。一九 乃神の殿は天に開かれ其殿の中に彼の約匣は見れたり又閃
 電と衆くの聲と迅雷と地震と大なる雷とありき。

一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

は十二の星の冕を戴けり。二彼孕み居りしが、産苦を病みて號べり。又他の異象は天に現れたり。龍より大なる赤き龍あり、之れに七の首十の角ありて、其首に七の冕を戴けり。其尾は天の星の三分の一を曳きて、之を地に墮せり。龍は産まんさする婦の前に立てり、彼が産む時に、其子を食はん爲なり。彼は男の子を生めり、此れ鐵の杖を以て萬民を牧せんさする者なり、子は神及び其資産に擧げられたり。婦は野に逃れたり、彼處に神より彼の爲に備へられたる處あり、彼を彼處に於て一千二百六十日開食はん爲なり。七天には眠起れり、ミハイル及び其天使等は龍と戦へり、龍及び其使等も亦眠ひしが、敵する能はずして復天に彼等の處を得ざりき。大なる龍は墮されたり、即昔の蛇惡魔及びサタナと名づくる者、全世界を惑はす者は地に墮され、其使等も彼と偕に墮されたり。一〇我天に大なる聲あるを聞けり、曰く、今我等の神の救と能と、國と及び其ハリストスの權に至れり、蓋我等の兄弟の纒者日夜我等の神の前に彼等を纒する者は墮されたり。二彼等は羔の血及び己の靈の言を以て之に勝ち、死に至るまで己の生命を愛まさりき。三故に諸天及び之に居る者は樂しめ、地及び海に居

る者は猶なる。蝮益惡死は爾等に降り、且つ大なる怒を憤けり、其時の幾くもなきを知るに困りてなり。一三三 龍は己が地に匿されしを見て、男の子を生みし婦を逐へり。一三四 婦には大なる怒の二の翼與へられたり、彼が野に飛び己の處に至り、彼處に蛇の面を避けて、一期數期及び半期の間食はれん爲なり。一三五 蛇は婦の後に於て、其口より水を河の如くに吐きて、彼を深はさん欲せり。一三六 然れども地は婦を助けたり、地は其口を啓きて龍が己の口より出し、河を呑めり。一三七 龍は婦を怒りて、彼の其餘の裔、即神の誠を守り、イイススマリストスの証を有つ者、眠はん爲に往けり。

一三三 我海の沙に立ちて、海より獸の出づるを見たり、之れに七の首十の角あり、其角に十の冕を戴き、其首に神を躡る名を記せり。一三四 我が見し所の獸は豹に似たり、其足は熊の如く、其口は獅の口の如し、龍は彼に己の龍己の座及び大なる權を與へたり。一三五 我其首の一が傷を受けて、死せんとするが如きを見たり、此の死を致す傷愈むれば、全地奇として、獸に従ひ、權を獸に與へし龍を拜し、且獸を拜して曰へり、誰か此の獸の如きある誰か能く彼を眠はん。一三六 彼には誇大と紛論を言ふ口は與へられ、又

四十二月間行爲する權は與へられたり。彼は己の口を啓きて神を聽り其名其恭及
 び天に居る者を聽れり。且彼に聖徒と戰を爲して彼等に勝つこゝは與へられ又彼
 に諸族諸民諸首諸國の上に權は與へられたり。凡そ地に居る者にして世の始より
 居られし燕の生命の由に名の録されざる者は皆彼を拜せん。耳ある者は聽くべし。
 人を擄にする者は己も亦擄にせられ劍を以て殺す者は己も亦劍を以て殺さる
 べし。此には聖徒の忍耐と倍と在り。一我又他の獸の地より出づるを見たり彼には
 燕に似たる二の角あり其音ふこさ龍の如し。二彼は第一の獸の悉くの權を以て
 其前に行爲し地及び凡そ之に居る者をして死を致す傷の愈はたる第一の獸を拜せ
 しむ。一三彼又大なる奇徴を行ひ人人の前に於て火を天より地に降らしむるに至り
 且與へられし權に由りて獸の前に行ふ所の奇徴を以て地に居る者を惑はし地
 に居る者に旨ひて劍の傷を受けて尙活ける獸の像を造らしむ。一四又彼に獸の像に
 神を入るゝ權は與へられたり獸の像が言ふを得且凡そ獸の像を拜せざる者の殺さ
 るゝを致さん爲なり。一六彼は衆人をして小大貧富自主奴僕の別なく其右の手或は

其額に印結を受けしめ、一七此の印結或は獸の名、或は其名の數あらざる者をして、買ふことなをも賣ることなをも得ざらしめん。一八此に智慧あり。智力ある者は獸の數を計るべし。蓋此れ人の數なり。其數は六百六十六なり。

四

我又觀しに、爰に羔はシオン山に立ち、彼ら偕にする者、一四四百四十千あり、彼の父の名は彼等の額に記されたり。二且我天より聲あるを聞けり、多くの水の聲の如く、大なる雷の聲の如し、我又琴を弾く者が、其琴を弾くが如き聲を聞けり。三彼等は寶座の前及び四の生物と長老等との前に、新なる歌の如きを歌ふ、此の歌は地より

贈はれたる、一四四百四十千の者の外に、誰も之を學ぶ能はざりき。一五此の衆は、婦女に結れざる者なり、蓋童貞者なり、彼等は羔の何處に往くに論なく、之に従ふ。彼等は人の中より、順はれて、神と羔とに初買の果たるなり。彼等の口には詭譎なし、彼等は神の寶座の前に、責むべきなし。一六我又他の天使が、中天に飛ぶを見たり、彼は地に居る者、諸國、諸族、諸音、諸民に福音せん爲に、永遠の福音を有ち、一七大なる聲を以て、音へり、神を畏れて、光榮を彼に歸せよ、蓋其審判の時至れり、天地海及び水の泉を造りし者を拜せよ。一八

又他の天使は其後に従ひて言へり、大なる邑ワロンは傾れたり傾れたり、其淫亂の怒の酒を萬民に飲ましめたればなり。第三の天使は彼等の後に従ひて大なる壑を以て音へり人若し獸も其像を拜し其印跡を己の額或は己の手に受けば、一〇 神の怒の酒、即其怒の杯に盛りたる雜なき酒を飲み又聖なる天使等及び羔の前に於て、火と硫磺を以て苦しめられん。二 彼等の苦の烟は上りて無窮の世に絶えず、其像を拜して、其名の印跡を受くる者は、日夜安息を得ざらん。三 此には神の誠とイイススを信する信を守る聖徒の忍耐在り。一三 我天より我に言ふ聲を聞けり、曰く之を書せ、今より後主に在りて死する死者は福なり。神曰く、然り、彼等は其勞を休めで息はん、盜彼等の功は彼等に隨はん。一四 我又觀しに、爰に白き雲あり、雲の上に人の手に似たる者坐せり、其首に金の冕、其手に利き鎌あり。一五 又他の天使は殿より出て、大なる聲を以て、雲に坐する者に呼びて曰へり、爾の鎌を遣して刈れ、盜刈る時至れり、地の刈るべき物熟したればなり。一六 雲に坐する者其鎌を地に投げたれば、地は刈られたり。一七 又他の天使は、天に在る殿より出てたり、彼も利き鎌を持てり。一八 又他

の天使てんし火ひにけん概ある者ものはさいだん祭壇より出いておほい大なるこゑ聲を以もつてりき利き機を持もてる者ものによびて曰いへりなんぢ爾の利き機を造つかしてち地の葡萄ぶどうの房を剪きりて蓋ふ其果はじやく然せり。一ん九てんし天使は其機をちになげて地の葡萄ぶどうをきりて之を神の怒を大なる酒に投なじたり。二ん三み果は酒の中に在りて城まらこ外に於おてあげられたればち血は酒より出いでり馬の勒にまで至いたり一千せん六ひゃく百ひゃく小こ里に及およべり。

四 我又また他の大にしてき奇き妙なる異い象を天に見みたり七のてんし天使は七の末まつ時の苗を持もてり神のい怒を以もつて終る所のもの者なり。二ん我は玻は璃の海の火を開あけりか知しきを見み且かつ其の像を其の印しるしとし其の名の數に勝かちたる者が此の玻は璃の海に立たちて神の琴を執とれるを見みたり。三ん彼等は神の使ハイセイのうたひ及び羔のうたひを歌ひて曰ふ主神全能者の所爲はおほい大なる奇き妙なる哉かな爾聖の王よ爾のみちは義なる義誠なる哉かな主よ誰が爾を畏おそえざらん爾の名を讃ほめせざらん蓋爾は獨聖なり萬ん民みん來きりて爾の前に拜いせん爾の義を列あらわしたればなり。四ん此の後の我が觀みしに後に天に於おて監間の幕の殿は開ひたり。五ん七の苗を持もてる七の天使は殿より出いでたり瀟ひやくして光を照あらわする衆の衣を衣ぬぎ

に金の帯を束ねたり。四の生物の一は七の天使に、無窮の世に生くる驛の怒を満て
たる七の金の鼎を興へたり。殿は神の光榮と其能力とに由りて烟に滿てられたり、
七の天使の七の首の擧るに至るまでは誰も殿に入る能はざりき。

【四】

【五】

我殿より七の天使に言ふ大なる聲を聞けり、曰く、往きて神の怒の七の

鼎を地に傾けよ。第一の天使往きて其鼎を地に傾けたれば、毒惡にして苦痛なる瘡
は獸の印跡ありて其像を拜する人人に生じたり。第二の天使其鼎を海に傾けたれ
ば、海は死人の血の如くに爲りて海中の生物皆死せり。第三の天使其鼎を河及び水
の泉に傾けたれば、乃血と爲れり。我水の天使の言ふを聞けり、曰く、今在り及び先に
在りし主、爾は此くの如く審判せしを以て義なり、聖なり。彼等は諸聖と諸預言者
との血を流し、に因りて、爾は彼等に血を興へて飲ましめたり、盜彼等は之に當れり。
我又他の者の祭壇より言ふを聞けり、曰く、然り、主神全能者よ、爾の審判は誠なる哉
義なる哉。第四の天使其鼎を日に傾けたれば、此に火を以て人人を焚く權は興へら
れたり。人人は大なる熱に焚かれて、此等の首に權ある神の名を踏り、悔改せずして、

光榮を彼に歸せざりき。一〇第五の天使其鼎を獸の座に傾けたれば其國暗くなりて、
 人人苦に因りて其舌を嚙み、二其苦と瘡とに因りて天の神を懼り己の所爲
 を悔改せざりき。三第六の天使其鼎を大なる河エフラトに傾けたれば其水は涸れ
 たり東方の諸王の路を備へん爲なり。一四我は龍の口と獸の口と偽預言者の口より、
 蛙に似たる三の不潔なる神の出づるを見たり。一五此は魔鬼の神にして奇徴を行ふ者な
 り彼等は出でて全地の諸王に就く之を神全能者の彼の大なる日の戦に集めん爲な
 り。一六我盜の如くに來る敵隠して其衣を守り探にして行かず其蓋を見ざらし
 むる者は禍なり。一七乃彼等をエツレイの言にてアルマゲドンと名づくる所に集
 めたり。一八第七の天使其鼎を空氣に傾けたれば天の殿より寶座より大なる聲出で
 て曰く成れり。一九乃閃電と迅雷と衆くの聲と作り又大なる地震ありき人の地に在
 りしより以來未だ有らざりし者なり是くの如き地震斯く大なる者なり。二〇大なる
 邑は裂けて三と爲り、異邦の諸の邑は傾れたり大なるアラロンは神の前に記念せら
 れたり之に彼の烈しき怒の酒の杯を與へん爲なり。二一凡の嶋は奔り踏山は見えず

なれり。二又大なるこさ釣の如き世は天より人人に降りたり人人世の首に因りて神を離れり其苗甚大なればなり。

第七の船

七の船を持てる七の天使の一は來り我と與に語りて我に語り來れ

我爾に多くの水に坐する大なる淫婦の審判を示さん。地の諸王は彼と淫し地に居る者は其淫亂の酒に酔ひたり。乃我を神に於て野に擲へたれば我縁き獸に坐する婦を見たり獸は神を離る名に滿てられ七の首十の角あり。婦は紫布と縁布とを衣金と寶石と眞珠とを敷ひて其手に憎むべき者と其淫亂の穢さを滿つる金の杯を執れり。其額に名の記せるあり曰く、與義大なるワラロン、地の諸淫婦及び憎むべき者の母と。我婦が諸聖の血とイイススの證者の血とに酔へるを見たり彼を見て大に驚き奇しめり。天使我に語へり、何ぞ奇しむ我爾に此の婦及び彼を乘する獸七の首十の角ある者の與義を踏げん。爾が見たる獸は先に有り又無じ後淵より上り又沈淪に往かん地に居る者にして世の始より其名の生命の書に録されざる者は獸が先に有り又無く後復出づるを見て奇しまん。此には智なる意義あり。七の首は婦の坐

する所の七の山なり。一〇またなつて又七の王なり其五は已に傾れ其一は尙在り餘の一は未だ
 来らず来らば暫く存すべし。二先に有り又無き獸は其第八なり七より出でて洗滌に
 往かん。二三爾が見たる十の角は十の王なり未だ國を受けざれども一時獸と併に王
 の如き權を受けん。二四彼等は皆を一にして己の能き權を獸に與へん。二五彼等は
 羔と獸ひ、羔は彼等に勝たん蓋彼は諸主の主諸王の王なり彼と併にする者は召さ
 れ選ばれたる思惟なる者なり。二六又我に謂ふ爾が見たる諸水淫婦が坐する所の者
 は諸民群衆諸國諸音なり。二七爾が獸に於て見たる十の角は淫婦を惡み之を荒し之
 を殺にし其肉を食ひ火を以て之を焚かん。二八蓋神は己の旨を行ふことを彼等の心
 に納れて彼等に其旨を一にし其國を獸に與へて神の言の成就せんことを待たしめ
 たり。二九爾が見たる婦は地の諸王に王たる大なる邑なり。

第三〇章 一此の後我又他の天使の天より降り大なる權を乗れるを見たり地は其
 光榮に由りて照されたり。二彼は厲しく呼び大なる聲を以て言へり大なるラフロン
 は傾れたり傾れたり、魔鬼の居處凡の不潔の神の果凡の不潔にして憎むべき島の果

さ爲れり。三 盜彼は萬國に其淫亂の怒の酒を飲ましめたり、地の諸王は彼を淫し地の
 諸商は彼が奢華の甚しきに因りて富を獲たり。我父天より他の聲を聞けり、曰く我
 が民よ爾等彼の申より出でよ、其罪に與らず其災を受けさらん爲なり。蓋其罪は天
 にまで滔り、神は其不義を億ひ起せり。彼が爾等に與へし如く彼に與へ其行に依り
 て倍して彼に報い其斟みたる杯に倍して彼の爲に斟め。彼が自ら榮に自ら奢れる
 度に適ひて彼に苦さ哀さを與へよ、盜彼は其心の中に言ふ、我女王の位に坐す、我族に
 非ず、哀を見さらん。故に一日の間に其災は至らん、即死、哀、饑饉なり、彼且火を以
 て焚かれん、盜彼を密判する主神は大能あるなり。彼を淫し、彼を與に奢りたる地の
 諸王は彼が焚かる、烟を見る時彼の爲に哭き號び、一、彼の苦を畏るゝに由りて遠
 く立ちて曰はん、禍なる哉、禍なる哉、大なる邑ヲ、マロン、堅固なる邑よ、蓋一時の間に爾
 の密判は至れり。一、地の諸商も彼の爲に哭き哀しまん、盜復彼等の貨物を買ふ者な
 し。二、其貨物は、金、銀、寶石、真珠、細布、紫布、絹、絲布、凡の香水、象牙の諸器、佳木、銅、鐵、燧石の
 諸器、一、肉桂、香品、香膏、乳香、酒、油、麴、麥、牛、羊、馬、車、及び人の身、靈なり。一、爾の靈の

嗜める果實は甯に離れ凡の珍奇華美の物は甯に離れたり甯復之を見ざらん。一五此等の諸商彼に由りて富を獲たる者は彼の苦を畏るゝに由りて遠く立ち哭き哀しみて一六曰はん禍なる哉禍なる哉細布と紫布と絳布とを衣金と寶石と異珠とを飾りたる大なる邑よ蓋一時の間に是くの如き富は滅びたり。一七凡の舟長と凡の舟に乗れる者と凡の舟人と凡そ海に貿易する者は遠く立ち一八彼が焚かるゝ烟を見て號びて曰へり何の色か此の大なる邑に似るを得ん。一九又其首に座を蒙りて哭き哀しみ號びて曰へり禍なる哉禍なる哉甯大なる邑凡そ海に舟を有つ者が彼の奢華に由りて富を獲たる者よ蓋一時の間に彼は荒墟と爲れり。二〇天及び聖使徒預言者よ之が爲に樂しめ盜賊は甯等の密列を彼に行へり。二一又一の有能なる天使は大なる巖の如き石を取り海に投じて曰へりフワロン大なる邑は斯く烈しく傾されて復之を見るを得ざらん。二三琴を弾き歌を歌ひ簫を品べ箏を吹く者の聲は復甯の中に聞ゆざらん凡の工藝者凡の工藝は復甯の中に見ゆざらん巖の聲は復甯の中に聞ゆざらん。二三燈の光は復甯の中に照らざらん新妻者と新婦との聲は復甯の中に聞ゆざらん。

らん盜爾の諸商は地の侯伯と爲れり爾の寛術に由りて萬國は惑はされたり。二四彼
の中に諸預言者諸聖人及び凡そ地に於て殺されたる者の血は見られたり。

第二十三章

此の後我多くの民の呼ぶが如き大なる聲の天に在るを聞けり曰く「ア

リルイヤ」教願と光榮と聲貴と權能とは我等の主に歸す。盜其審判は誠なり我なり、
蓋彼は淫亂を以て地を敗壞せし大なる淫婦を定罪し己の諸僕の血を其手より衆め

たり。再言へり「アリルイヤ」。彼の烟は上りて無窮の世に息ます。又二十四の長老

及び四の生物は俯伏し寶座に坐する神を拜して曰へり「アモン」「アリルイヤ」。聲

寶座より出で、曰へり悉くの神の僕及び彼を畏るゝ小なる者と大なる者よ我等の

神を讚美せよ。我多くの民の聲の如く多くの水の聲の如く烈しき雷の聲の如きを

聞けり曰く「アリルイヤ」。盜主神全能者は王と爲れり。我等は喜び樂しみて光榮を

彼に歸すべし。盜羔の婚姻は屆り其婦は己を備へたり。彼に潔くして光れる細布

を衣ることは與へられたり細布とは諸聖の義なり。天使我に言へり之を書せ羔の

婚姻の筈に召されたる者は福なり又曰へり是れ神の眞の言なり。一〇我其足下に俯

伏して彼を拜せんとせしに、彼我に言へり、不可なり、我は爾とイエスの證を有つ爾の兄弟との同僚なり、神を拜せよ、蓋イエスの證は預言の神なり。二、我天の開けたるを見たり、後に白き馬あり、之に乗れる者は、忠信及び眞實なる者と稱へられ、義を以て審判を行ひ、及び暇を爲すなり。一、其目は火燄の如く、其首に多くの冕を戴けり、彼は鐵されたる名を有てり、彼の外之れを識る者なし。一、彼は血に染みたる衣を衣たり、彼の名は神の言と稱へらる。一、天の軍は、狭くして潔き細布を衣、白き馬に乗りて、彼に従へり。一、彼の口より利き劍出づ、之を以て諸民を撃たん爲なり。彼は鐵の杖を以て、彼等を牧せん、彼は神全能者の憤と怒との酒酌を賤む。一、彼の衣と股とに名の書されたるあり、曰く、諸王の王、諸主の主と。一、我一の天使の日に立てるを見たり、彼は大なる聲を以て、中天に飛ぶ、凡の島に呼びて曰へり、來りて、神の大なる怒に集れ、一、諸王の肉、千夫長の肉、勇士の肉、馬之に乗る名との肉、凡の自主と奴僕と、小なる者と大なる者との肉を食はん爲なり。一、我黙と地の諸王と、彼等の軍とが、馬に乗れる者及び其軍と、暇は入爲に集りたるを見たり。二、我及び彼と、偕に偽預言者、即替て

彼の前に奇徴を行ひ、之を以て獄の印跡を受けて、其像を拜する者を惑はし、者は執はれたり、斯の二者は生きながら硫磺を以て燃ゆる火の池に投ぜられたり。二其餘の者は馬に乗れる者の口より出づる劍を以て殺されたり、凡の鳥は彼等の内に飽きたり。

第三十章 我天使の天より降るを見たり、其手に淵の輪さ大なる鍵さを持てり。二彼は龍昔の蛇、即 惡魔及びサタナなる者を執へて、之を一千年の爲に縛り、之を淵に投げ、之を閉ぢて、其上に封印せり、一千年の終るに至るまで、復甦民を惑はさざらん爲なり、其後彼は暫時の間放たるべし。我列座及び之に坐する者を見たり、彼等に審判の權は與へられたり、我又イエスの證及び神の言の爲に斬られたる者、即 黙さ其像さを拜せず己の額及び己の手に印跡を受けざりし者の靈を見たり。彼等は生きて、一千年の間ハリストスと共に王たりき。餘の死者は一千年の終るに至るまで生きざりき。此れ第一の復活なり。第一の復活に分ある者は福なり、聖なり、第二の死は彼等の上に權を有たす、乃彼等は神及びハリストスの司祭と爲りて、彼に借に一千年

の間王たらん。一千年の終るに及びて、サタナは其牢獄より釋かれ、出で、地の四極の諸民、エグ及びマエグを惑はして、之を戰の爲に集めん。其數は海の沙の如し。彼等は地の廣き處に上りて、諸聖の陣營を愛せらる。城を圍みたるに、火は神より天より降りて、彼等を嚼みたり。一〇 彼等を惑はし、惡魔は火と硫磺との池に投ぜられたり、即、獸と偽預言者との在る所なり、彼に於て、彼等は日夜苦しみて、無窮の世に熄まざらん。一〇 我大なる候き資座及び之に坐する者を見たり、天と地とは彼の顔より遊れて其所を得ざりき。一二 我死者の小なる者及び大なる者が神の前に立てるを見たり、諸書は披かれ、又他の書、即生命の書なる者は披かれたり、死者は此等の書に録されたる事により、其行に循ひて、審判を受けたり。一三 海は其内の死者を出し、死と地獄とは亦其内の死者を出せり、各其行に循ひて、審判を受けたり。一四 死も地獄も火の池に投ぜられたり。此れ第二の死なり。一五 凡そ生命の書に録されざりし者も、火の池に投ぜられたり。

一六

一六 我新なる天及び新なる地を見たり、盜先の天及び先の地は造れり、

海も亦有るなし。又我イオアンは聖なる城新なるイエルサリムが其夫の爲に飾られたる新婦の如く預備せられて神より天より降るを見たり。我大なる聲の天より音ふを聞けり曰く、親よ、神の幕は人人と偕に在り、彼は彼等と偕に居らん、彼等は彼の民と爲り、神は親ら彼等と偕に在りて、彼等の神と爲らん。神は彼等の目より凡の涙を拭はん、死は復有らざらん、悲哀も、號泣も、疾痛も、復有らざらん、盜前の事は逝れり。寶座に坐する者は曰へり、親よ、我一切新なるを造る。又我に言ふ之を書せ、盜此の言は眞實にして、信すべきなり。彼我に言へり、成れり、我は「アリス」及び「セメガ」始及び終なり、瀉く者には、我價なくして生命の水の泉より飲ましめん。勝つ者は一切を嗣がん、我は彼の神と爲り、彼は我の子と爲らん。然れども臆する者、信ぜざる者、憎むべき者、人を殺す者、淫行の者、冤術を行ふ者、偶像を拜する者、凡そ臆を言ふ者の分は、火と硫磺とを以て燃ゆる池に在り。此れ第二の死なり。七の末時の苗を満つる七の罪を持ちし者の天使の一、我に就きて曰へり、來れ、我爾に新婦、即、羔の妻を示さん。一〇すなはち我を神に於て大なる高き山に擡へて、我に大なる城、聖なるイエルサリム、天より神よ

降り降る卷を示せり。一 城には神の光榮あり其光に至りて資なる石に似透明なる碧玉の如し。二 此に大なる高き垣あり十二の門あり門には十二の天使あり又名の書されたるあり、即 イズラエリの諸子の十二の支派の名なり。三 東に三門北に三門南に三門西に三門あり。四 城の垣には十二の基址あり其上に羔の十二の使徒の名あり。一 我と詔れる者は金の竿を持って城と其門と其垣とを度らん爲なり。二 城は四方にして其長さは其淵に異なるなし。彼竿を以て城を度りて十二千小里を得たり。其長さと淵と高さと相等し。一 七またかりしに二百四十四尺を得たり是れ人の度亦天使の度なり。一 八 垣の結構は碧玉なり城は純金にして淨き玻璃の如し。一 九 城の垣の基址は諸の寶石を以て飾れり。第一の基址は碧玉第二は青玉第三は蒼玉第四は葱瑁、二〇 第五は雜紅玉第六は瑪瑙第七は黄玉第八は綠玉第九は淡黄玉第十は翡翠第十一は赤玉第十二は紫玉。二二 十二の門は十二の眞珠なり、一の眞珠は一の門を爲せり城の衛は純金にして透明なる玻璃の如し。二三 我其中に殿を見ざりき蓋主神全能者及び羔は其殿なり。二四 城は日月の之を照すを需めず蓋神の光榮は之を照し且

羔は其燈なり。二四す、
を其中に搦へん。二五そのらん終日閉ぢず夜は彼處に無からん。二六諸民の光榮と寶
貴とは其中に搦へられん。二七凡の不潔及び憎むべきこと一隣を行ふ者は其中に
入るを得ず惟羔の生命の書に録されたる者は入らん。

第三十三章

一彼は我に生命の水の清き河を示せり澄めること水晶の如し神及び
羔の資産より出づ。二其衛の中及び河の左右に生命の樹あり果を結ぶこと十二次
月毎に其果を出す樹の葉は諸民を醫すが爲なり。三凡の呪詛は復有らざらん神及び
羔の資産は其中に在らん彼の諸僕に彼に奉事し、彼の顔を見彼の名は其額に在ら
ん。四夜は彼に無からん燈さ日の光を帯めず蓋主神は彼等を照す彼等は無窮の世
に王たらん。又我に言へり是の言は信すべくして眞實なり聖なる諸預言者の主神
は速に成るべきことを其諸僕に示さん爲に、其天使を遣せり。七我、我速に來る斯
の書の預言の言を守る者は福なり。八我イオアンは此等の事を見且聞けり。我は陷き
且見し時此等の事を我に示せる天使の足下に俯伏して拜せんさせしに、彼我に言

へり、不可なり。蓋我は爾を用之兄弟。爾預言者之斯の書の言を守る者との同僚なり。神を拜せよ。一〇又我に言へり、斯の書の預言の言を封する勿れ。蓋時は近し。一一不義なる者は仍不義を爲すべし。汚穢なる者は仍汚穢を爲すべし。義なる者は仍義を爲すべし。聖なる者は仍聖にせらるべし。一二視よ、我速に來る。我の報は我と偕に在り。各人に其行に依りて報いん爲なり。一三我は「アリス」及び「タメガ」始及び終、第一の者及び末の者なり。一四生命の樹に權を得及び門より城に入らん爲に彼の城を守る者は福なり。一五犬と、宛術者、淫亂者、兇殺者、拜偶像者、凡そ驕を好みて之を行ふ者は外に在り。一六我、我イイススは、我が天使を遣せり。之を爾等に諸教會に證せん爲なり。我はダウ下の根及び苗裔なり。光れる晨の星なり。一七神と新婦とは曰ふ、來れ、聞く者も曰ふべし、來れ。渴く者は來るべし。望む者は假なくして生命の水を取るべし。一八我亦凡そ斯の書の預言の言を聞く者に證す。若し之に加ふる者あらば、神は斯の書に録されたる苗を以て彼に加へん。一九若し斯の預言の書の言を削る者あらば、神は彼に生命の書と聖なる城と斯の書に録されたる事とに與る分を削らん。二〇此を證する者

は曰ふ、然り、我速に來る、「アミン」。然り、主イエスマスよ來れ。二願はくは我等の主イエスマスハヨストスの恩寵は爾等衆を倂に在らんことを「アミン」。

歌
示
錄

POK

明治三十五年五月九日印刷

明治三十五年七月十八日發行

ハリストス正教會聖書出版事務所發行

發行者兼

石川喜三郎

東京市本郷區西片町十番地

印刷者

山田殿太郎

東京市神田區淡路町一丁目
一番地

印刷所

建昇堂

東京市本郷區湯島切通坂町
五十一番地